

宮崎県立西都原考古博物館

# 研究紀要

## 第1号

BULLETIN

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Vol. 1

二宮 満夫	副葬された鉄製農具-宮崎県における5~7世紀の資料-	01
吉村 和昭	西都原あるいはえびの市真幸出土の三角板鉄留短甲	08
竹中正巳・高橋由香	風習的抜歯の疑われる地下式横穴墓出土人骨の追加例 -宮崎県都城市下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨-	24
東憲章・柄本久子	宮崎市阿波岐原出土の瀬戸内系土器	30
北郷 泰道	韓国内出土馬具類集成	33
地村 光広	「大足(おおあし)」について(資料とその周辺)	47
鳥原 孝仙	玉文化を考える	49
鶴田 裕一	日向国可愛山陵説	52
鶴田 裕一	筑紫の日向について	56
東 憲章	国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」鞍橋金具の復元について	62
日高敬子・有馬あゆみ	宮崎県立西都原考古博物館における金属製品の保存処理と保管	77
高橋 由香	宮崎県立西都原考古博物館における古人骨の整理と資料化	85

2005.3

宮崎県立西都原考古博物館



国宝日向国西都原古墳出土金銅馬具類鞍橋金具 (前輪)

(財) 五島美術館所有



復元された鞍橋金具 (前輪)



国宝日向国西都原古墳出土金銅馬具類鞍橋金具 (後輪)

(財) 五島美術館所有



復元された鞍橋金具 (後輪)

## 宮崎県立西都原考古博物館研究紀要の刊行にあたって

宮崎県立西都原考古博物館は、  
南九州の人々の生きた証を見つめる「人と歴史の博物館」である。  
そこで私たちは、過去を見つめてはじめて今日を知り、  
未来を見通すことができることを知る。  
ロマン溢れる古代日向の全体像とその特色について、  
情報受発信の拠点として広く国内外と連携しながら、  
そこに秘められた大いなる謎を解き明かすための時間と空間の旅が  
今始まる。

宮崎県立西都原考古博物館には「常設展示」は存在しない。  
常に更新されていく仮説と実証を、様々な角度から情報として発信し続ける。  
空間も情報も作り込まれたものではなく、「仮設」の展示として成長を続けるのである。  
考古学の思考に基づき、物語に沿った謎解きを展開する「考古博物館」。  
提示された多くの情報を検証する「考古学研究所」。  
二つの仮想の場は、対をなして西都原考古博物館という  
「情報の深い森」を形成するのである。

【宮崎県立西都原考古博物館コンセプトブック】より

宮崎県立西都原考古博物館は、建物内にとどまるものではない。  
広大な古墳群全体が展示空間であり、そこに存在する古墳の全てが情報発信の主役である。  
国内最大規模の特別史跡西都原古墳群に臨む「遺跡博物館（サイトミュージアム）」として、  
自然と歴史的景観を包括した「野外博物館（フィールドミュージアム）」として存在する。  
「史跡の保存と活用」、「博物館展示と調査研究」は、常に両輪として、  
これからの考古学のあり方を問いかけ、そして応えてゆく。

2005年3月

宮崎県立西都原考古博物館

## 副葬された鉄製農具

—宮崎県における5～7世紀の資料—

二宮 満夫

### 1 はじめに

農耕文化の発展史を考える上で、生産力向上のための技術的革新を無視することはできない。弥生時代中期以降に登場する鉄製農具は、生産に伴う作業工程を著しく飛躍させたであろうことは、疑う余地もない。

さて、鉄製農具は古墳の副葬品としてみられることが多い。南九州の古墳時代には、地下式横穴墓という独自の墓制が存在し、先学が示すように副葬された豊富な鉄製品は、極めて保存状態が良く、鉄製農具も例外ではない。

そこで、宮崎県内で副葬された鉄製農具に焦点をあて、今後の基礎資料となり得ることを期待して集成を試み(表1)、若干の検討を行う。

### 2 鉄製鎌(図2)

古墳時代の鉄製鎌のあり方については、5世紀前半の曲刃鎌の出現期を農業経営の大きな画期と位置付けた都出比呂志の先駆的な研究以後<sup>1)</sup>、これを基礎とした形式分類、機能論などについて論じられている。<sup>2)</sup>

宮崎県出土の鉄製鎌は大別して直刃のもの(A類)(図2-4~14)と曲刃(刃部が内湾)のもの(B類)(図2-1~3)の2種に分類できるが、A類には緩やかに外反するもの(A1類)(図2-3・4・7~9)があり、さらに先端部が大きく反り上がるもの(図2-5・10)も存在する。また、鎌本体と木製柄の装着角度は、鎌の機能分化を決定する大きな要因として早くから指摘されており、すなわち、鎌と柄の角度が直角のもの(I類)(図2-1・2・7・8・12~14)と鈍角のもの(II類)(図2-3・6・9・11)とに分類される。<sup>3)</sup> さらに、長さ12cm未



図1 宮崎県における副葬された鉄製農具出土地  
(番号は表1に対応)

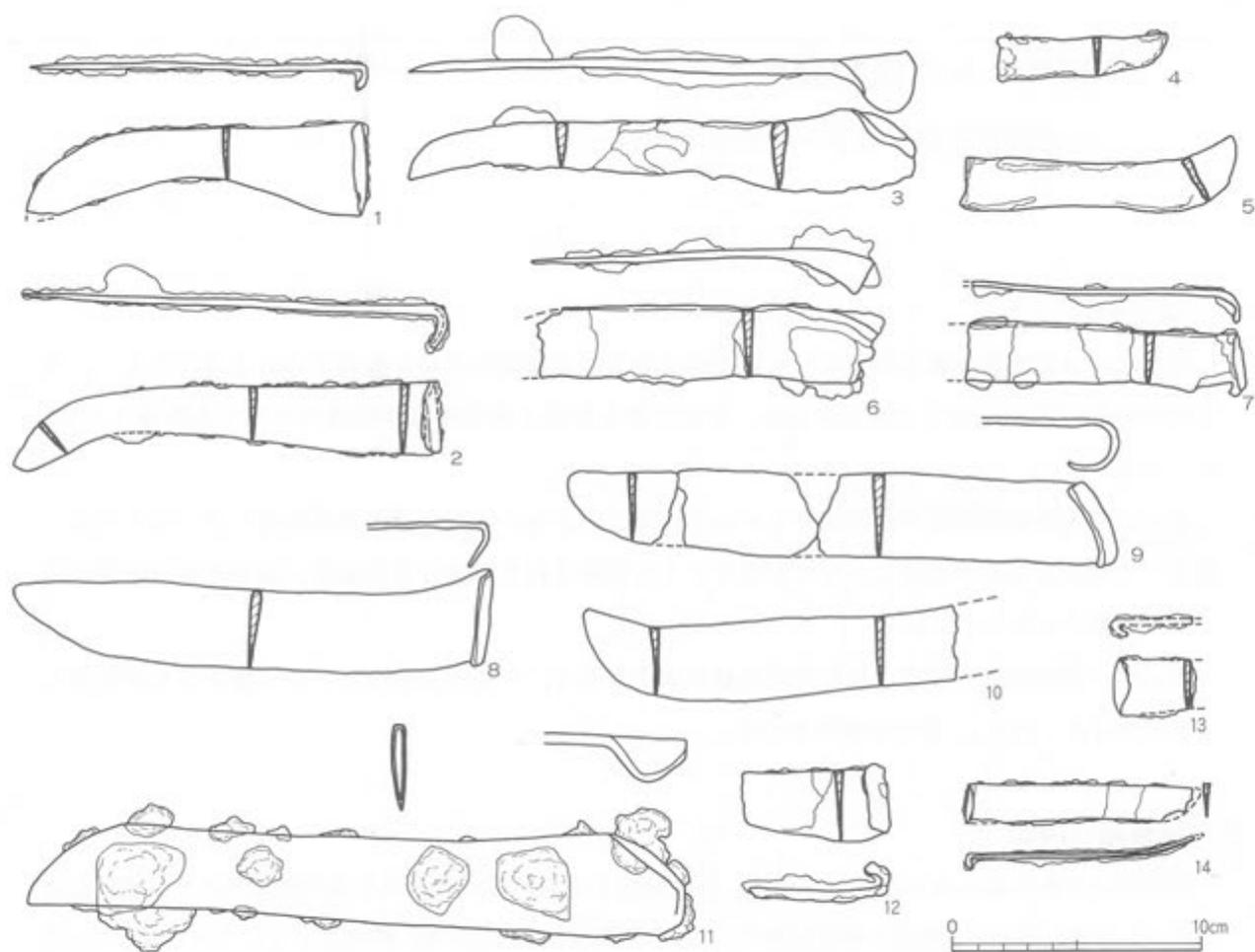


図2 鉄製鎌実測図（各報告書を再トレース）

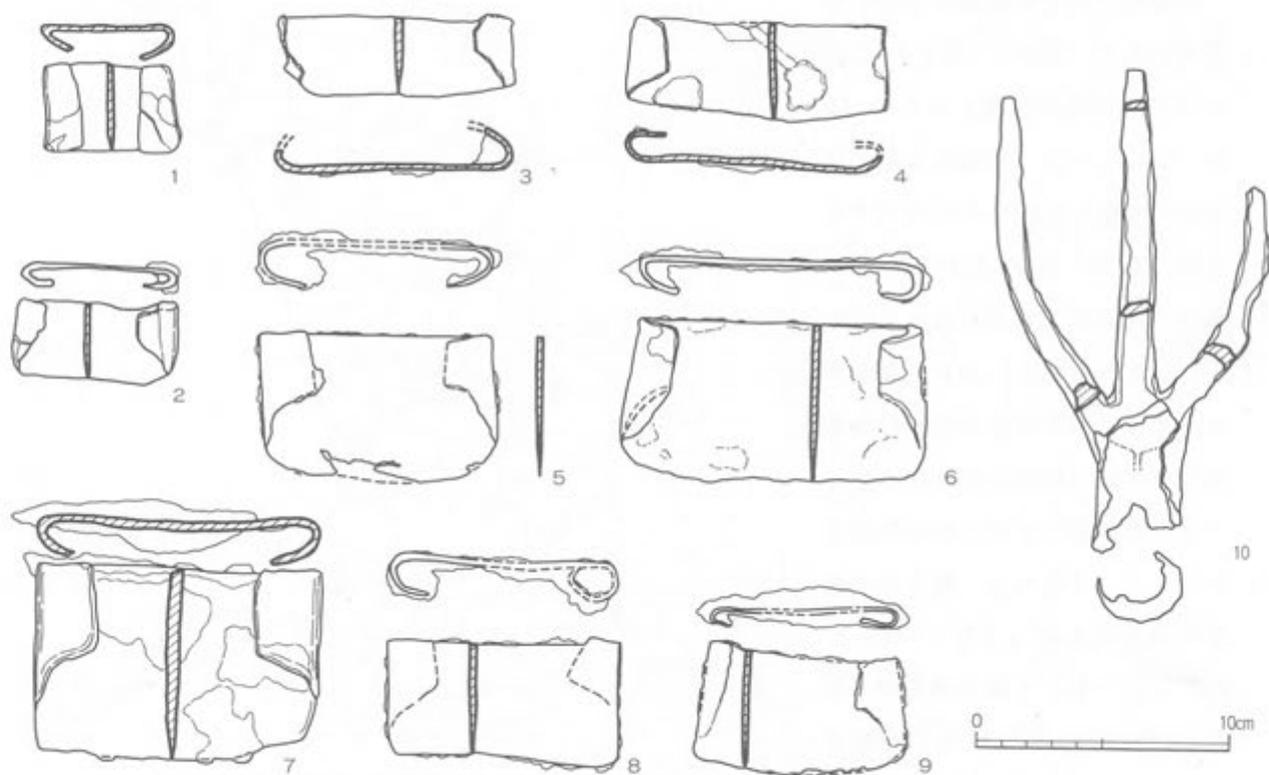


図3 鉄製方形板鎌・鋤先・三叉鎌実測図（各報告書を再トレース、9のみ新実測）

溝のものを小型(図2-1)、12~20cmのものを中型(図2-2・8・14)、20cm以上のものを大型(図2-3・9・11)とする。<sup>4)</sup>

鉄製鎌は、5世紀中葉頃から副葬され始め、B類と一部A類がある。5世紀後半以後は、A類(A1類)が主流を占め、大型品は6世紀代では見受けられない。

柄の装着角度は、鎌の機能差を示すものであるから、そこには明確な時期差はない。しかし、松井が指摘するように、基部の折り返し方向には時期差が見受けられる。つまり、刃部を下に向け先端部を左に置いた時、手前(松井分類甲類)あるいは向こう側(乙類)に折り返す2種があり、松井は5世紀代になると乙類の割合が高くなり、この傾向は西日本に顕著となると指摘している。<sup>5)</sup> 宮崎県の場合、5~6世紀のものは甲類が主流で、7世紀になると乙類(図2-12・13)が現れるため、西日本での傾向と若干のズレが生じている。<sup>6)</sup>

### 3 鉄製鎌・鋤先(図3、4)

鉄製鎌・鋤先は、弥生時代以来の方形板刃先のものと同墳時代に登場するU字形刃先のものに分類される。<sup>7)</sup>

#### (1) 方形板鎌・鋤先(図3-1~9)

方形板鎌・鋤先は大別して、長さとの幅の比が約1:2のもの(A類)(図3-1・2・5~9)と約1:3のもの(B類)(図3-3・4)とに分類でき、さらにA類では長さ3~4cm、幅5~7cmの小型のもの(図3-1・2)、長さ4~6cm、幅8~11cmの中型のもの(図3-5・6・8・9)、長さ7cm以上、幅11cm以上の大型のもの(図3-7)とに細分できる。B類は長さ3~4cm、幅9~10cmのものである。時期としては、5世紀前半にA類で小型のものとB類の2種が使用され、5世紀中葉頃にはA類で中型と大型の2種に変わる。

方形板鎌・鋤先は、6世紀代の後曾木6号石棺墓を最後に副葬が終了する。松井によると、6世紀前半頃まで方形板鎌・鋤先は残存すると報告され<sup>8)</sup>、宮崎県の場合も、6世紀の早い段階には姿を消すと考えられる。

#### (2) U字形鎌・鋤先(図4)

U字形鎌・鋤先の分類は、都出<sup>9)</sup>、松井<sup>10)</sup>らによってなされているが、ここでは松井の分類基準に従う。松井は、A類:刃部が大きく曲線を描くものとB類:刃部が直線状ないしそれに近い緩やかな曲線を呈するものの2類に大別し、さらにA類をA1類:刃先部がやや長く、先端部が直線気味のもの、A2類:本来のU字形を呈していて、刃先部の幅が耳部の幅とあまり変わらないもの、A3類:刃先部はU字形であるが、その長さがかなり長く出ているものの3類に細分する。

宮崎県出土のものは、すべてA2類にあたり、大きさは長さ10~15cm、幅13~16cmの範疇に収まるものがほとんどである。これを標準とした場合、中迫1号地下式横穴墓出土のもの(図4-1)が長さ9.8cm、幅12.8cmとやや小振りて、下北方4号地下式横穴墓出土のもの(図4-14)が長さ17.2cm、幅16.1cmと大型の部類に属する。<sup>11)</sup>

松井によると、5世紀中葉から後半頃に出現したA2類は、以後古墳時代を通じて主流を占める

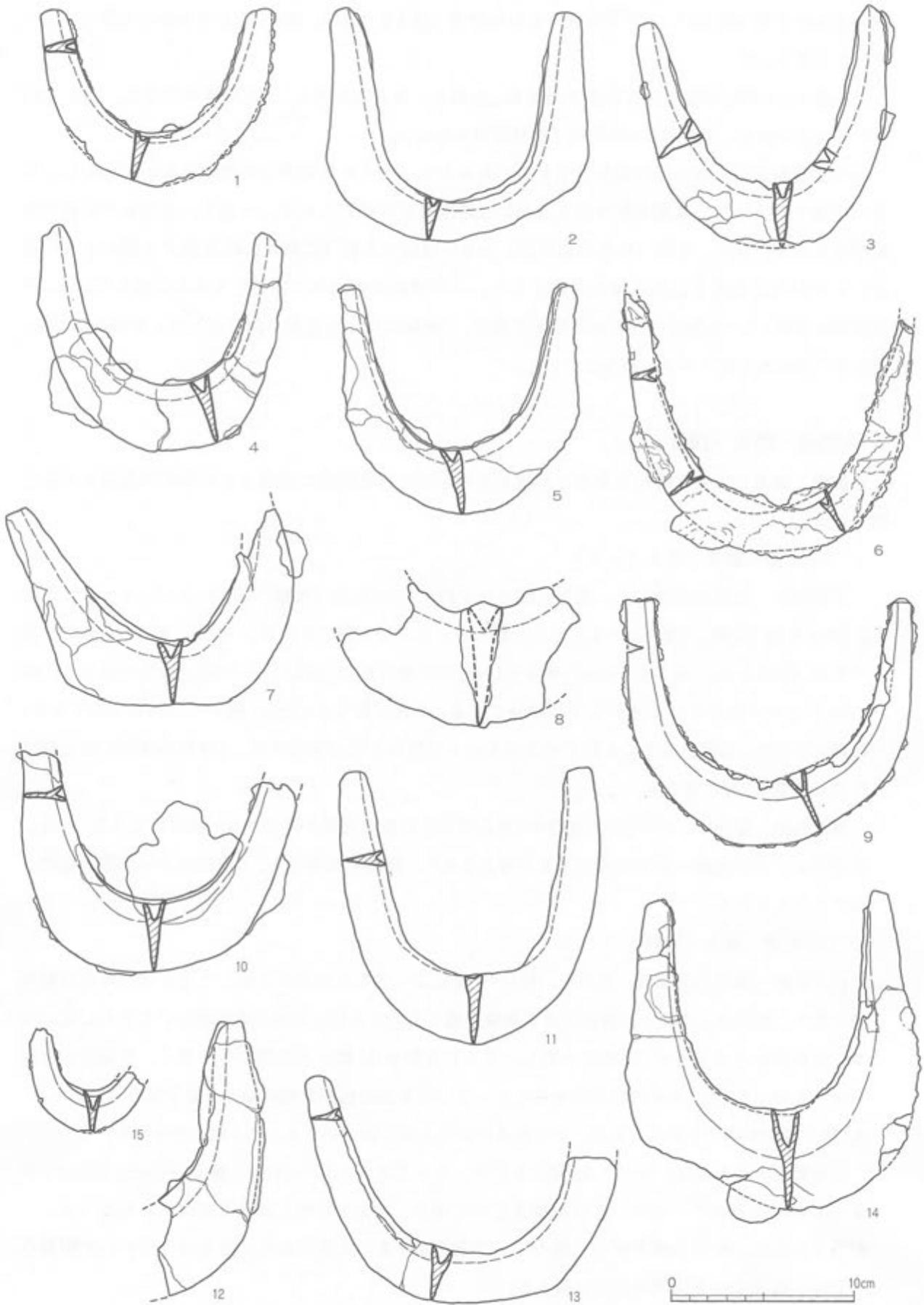


図4 鉄製U字形鋤・鋤先実測図（各報告書を再トレース）

とされ<sup>12)</sup>、宮崎県の場合も例にもれない。ただ、5世紀後半～6世紀前半にかけて大型品も使用されるが、宮崎県では広く普及しなかったようである。

### (3) 三又鋤先 (図3-10)

宮崎県では、5世紀後半の六野原6号地下式横穴墓で、1点が確認されているのみである。全長19.0cm (刃部長13.0cm)、幅11.0cm、のものである。

## 4 おわりに

宮崎県の鉄製農具は、まず始めに5世紀前半に方形鋤・鋤先が副葬され、ついで中葉になると、鎌、U字形鋤・鋤先が副葬され始める。方形鋤・鋤先は5世紀代では主要な副葬品のひとつであったと考えられるが、U字形鋤・鋤先の出現に伴って、6世紀には完全に交代する。

鉄製鎌は、5世紀前半での曲刃鎌の出現以後、直刃から曲刃に漸次交代し、6世紀になるとほとんど曲刃に変わることが指摘されている。<sup>13)</sup>しかし、宮崎県において曲刃鎌は、副葬され始める5世紀中葉に見られるだけで、5世紀後半以後は直刃 (A1類) が主流を占める。直刃のA1類は、弥生時代末～古墳時代前期の北部九州にも見られる形態<sup>14)</sup>で、九州において独自の形態として発展したものと思われる。

以上、宮崎県における副葬された鉄製農具について、簡単に概観してきた。副葬される資料であることから、限られた数量の中での検討となった。今後は、集落遺跡等で出土する資料も加え、農業経営のあり方など新たな検討を行いたい。

- 註 1) 都出比呂志1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会36～51頁  
 2) 寺沢薫1991「収穫と貯蔵」『古墳文化の研究』第4巻 雄山閣50～69頁、  
 古瀬清秀1998「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣71～91頁、  
 松井和幸2001「古代の鉄鎌の導入と展開」『日本古代の鉄分化』 雄山閣103～123頁  
 3) 鎌と柄の角度が直角のものを「農業用刈り取り」鎌、鈍角のものを木材の切削や小枝打ちなどに用いる「蛇鎌」と理解されている。註2) 寺沢、古瀬論文など  
 4) 鎌の場合、研ぎによる変化が激しいと考えられるが、寺沢は民俗例を参考にして鎌の長さによる鎌の機能差を指摘している。註2) 寺沢論文  
 5) 註2) 松井論文  
 6) 副葬された鉄製鎌のみという限られた数量での比率であるため、宮崎県全体での時期差を示すとは限らない。この点は集落遺跡等で出土したものも含めて改めて考える必要がある。  
 7) 註1) 都出論文、松井和幸2001「古代の鉄製鋤先と鋤先」『日本古代の鉄分化』 雄山閣74～102頁  
 8) 註7) 松井論文  
 9) 註1) 都出論文  
 10) 註7) 松井論文  
 11) 池内B7号横穴墓出土のU字形鋤・鋤先 (図4-15) は、長さ5.7cm、推定幅7.0cmであり、儀器的なミニチュア製品であると考えられる。  
 12) 註7) 松井論文  
 13) 註2) 寺沢論文、松井論文  
 14) 寺沢は「きわめて不定形な矩形を示す例」としている。註2) 寺沢論文

報告書等

- ① 綾町教育委員会1996「中迫地下式横穴墓群」
- ② 石川恒太郎1969「国富町飯盛の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第13輯 宮崎県教育委員会
- ③ 石川恒太郎1970「国富町大坪地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財報告書』第15集 宮崎県教育委員会
- ④ 石川恒太郎1972「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財報告書』第16集 宮崎県教育委員会
- ⑤ 石川恒太郎1977「高崎町横谷の地下式古墳」『増補 地下式古墳の研究』(株)ぎょうせい
- ⑥ 石川恒太郎1980「本庄小学校内地下式横穴発掘調査報告書」『国富町文化財調査資料』第1集 国富町教育委員会
- ⑦ 石川恒太郎1980「飯盛の地下式横穴発掘調査報告」『国富町文化財調査資料』第1集 国富町教育委員会
- ⑧ 石川恒太郎1980「大坪地下式古墳調査報告書」『国富町文化財調査資料』第1集 国富町教育委員会
- ⑨ 猪野隆徳2003「上ノ坊古墳」『延岡市史』 延岡市
- ⑩ 岩永哲夫・北郷泰道1981「日守地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集 宮崎県教育委員会
- ⑪ 岩永哲夫・北郷泰道・重山護1984「大萩地下式横穴墓群—遺構編—」『宮崎県文化財調査報告書』第27集 宮崎県教育委員会
- ⑫ 置田雅昭1993「市の瀬1～4号地下式横穴」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ⑬ 面高哲郎・長津宗重1991「新田場地下式横穴墓」『宮崎県文化財調査報告書』第34集 宮崎県教育委員会
- ⑭ 面高哲郎1993「新田場地下式横穴群」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ⑮ 佐土原町教育委員会1981「一般国道10号佐土原バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(土器田横穴古墳)」
- ⑯ 茂山護1980「大萩地下式横穴36号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教育委員会
- ⑰ 茂山護1985「大萩地下式横穴37号墓調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第28集 宮崎県教育委員会
- ⑱ 菅付和樹1986「市の瀬地下式横穴墓群(5号地下式横穴墓)」『国富町文化財調査資料』第4集 国富町教育委員会
- ⑲ 菅付和樹1987「蓮ヶ池横穴墓群—遺物編—」『埋蔵文化財調査研究報告I』 宮崎県総合博物館
- ⑳ 鈴木重治1960「野尻町大萩地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第5輯 宮崎県教育委員会
- ㉑ 瀬之口傳九郎1944「六野原古墳調査報告」『史跡名勝天然記念物調査報告』第13輯 宮崎県
- ㉒ 高原町教育委員会1991「立切地下式横穴群」高原町文化財調査報告書第1集
- ㉓ 田中茂1977「国富町塚原地下式横穴A号出土遺物」『宮崎考古』第3号 宮崎考古学会
- ㉔ 田中茂1993「木脇塚原地下式横穴群」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ㉕ 田中茂1993「後曾木箱式石棺群」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ㉖ 中山豪・鳥枝誠1996「史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書」 宮崎市教育委員会
- ㉗ 長津宗重・與倉武憲・日高浩・御手洗勝1983「主要遺跡概説」『国富町文化財調査資料』第3集 国富町教育委員会
- ㉘ 野間重孝1982「宮崎市下北方古墳群をめぐって」『宮崎考古』第8号 宮崎考古学会
- ㉙ 野間重孝1993「下北方地下式横穴群」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ㉚ 日高正晴・緒方吉信・糞方政幾1987「元地原地下式墳墓群発掘調査報告」『西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集 西都市教育委員会
- ㉛ 藤原郁代1997「出土遺物 B群」『池内横穴群発掘調査整理報告書』 宮崎県教育委員会・池内横穴墓群調査整理委員会
- ㉜ 北郷泰道・永友良典1986「井水地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料』第4集 国富町教育委員会
- ㉝ 北郷泰道・山田聡1993「南方古墳群 天下支群」『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県
- ㉞ 宮崎市教育委員会1977「下北方地下式横穴第5号」宮崎市文化財調査報告書第3集

表1 副葬された鉄製農具一覧

番号	遺跡名	遺跡形態	所在地	時期	録	鉄・鋤先		備考	図番号	報告書
						方形刃先	U字形刃先			
1	後曾木6号	箱	北方町大字子	6c代	1	1				⑤
2	南方4号墳	円	延岡市天下町	5c代		1				⑥
3	上ノ坊古墳	円	延岡市富美山町	-	1					⑦
4	元地原5号	地	西都市大字上三財	5c後半		1			4-4	⑧
5	土器田東2号	横	佐土原町大字下那珂	7c前半~中葉	1				2-14	⑨
6	蓮ヶ池8号	横	宮崎市大字芳土	7c中葉	1				2-13	⑩
7	池内B7号	横	宮崎市池内	7c前半		1			4-15	⑪
8	下北方4号	地	宮崎市下北方町	6c前半		1			4-14	⑫(図)
	下北方5号	地		5c後半		3			2-8・9・10	⑬
9	下北方6号	地	宮崎市下北方町	6c代		1				⑭
	生目8号	地		5c中葉		1		9-1トレンチ	2-11	⑮
10	木脇塚原1号	地	国富町大字木脇	5c前半		1		西ノ免A号	4-1	⑯(図)、⑰
	木脇塚原3号	地		5c後半~6c初頭		?		西ノ免2号		⑱
11	本庄11号	地	国富町大字本庄	6c後半		1		宗仙寺9号	4-13	⑲
	本庄12号	地		6c後半		1		宗仙寺10号	4-11	⑳
	本庄33号	地		6c代		1		地藏寺1号		㉑
12	飯盛1号	地	国富町大字須志田	5c後半~6c代		1		4-12	㉒、㉓、㉔(図)	
13	六野原5号墳	円	国富町大字八代北保	-		1				㉕
	六野原6号墳	円		5c後半				三叉鉄1	3-10	㉖
	六野原9号墳	円		5c代		2	1		2-6・7、3-2	㉗
	六野原1号	地		5c後半		1				㉘
	六野原8号	地		5c中葉			1		4-10	㉙
	六野原10号	地		5c後半			1		4-8	㉚(図)、㉛
14	大坪1号	地	国富町大字八代南保	5c末		1		4-7	㉜、㉝(図)	
15	市の瀬2号	地	国富町大字深年	5c末~6c代		1			4-6	㉞
	市の瀬5号	地		5c末~6c代		1			4-9	㉟
16	井水1号	地	国富町大字八代水保	6c前半		1			2-12	㊱
17	中迫1号	地	綾町大字北保	5c後半~末		1			4-1	㊲
18	原村上1号	地	高崎町大字縄瀬	5c後半~6c前半		1		横尾谷、木製柄が残る		㊳
	築池49-1号	地		5c代		1			3-7	㊴
20	大萩1号	地	野尻町大字三ヶ野山	6c前半		1		34-1号	2-4・5	㊵
	大萩3号	地		5c後半		1		B-2号(旧3号)	4-2	㊶(図)
	大萩36号	地		6c前半		1			2-3、4-3	㊷
21	立切65号	地	高原町大字後川内	6c前半~中葉		1			4-5	㊸
	日守9号	地		5c中葉		1			3-6	㊹
22	新田場6号	地	高原町大字後川内	5c前半		2		55-2号	3-3・4	㊺
	新田場7号	地		5c中葉		1		62-4号	3-9	㊻
23	新田場7号	地	小林市大字真方	5c中葉~後半		1		62-5号	2-1、3-5	㊼
	新田場9号	地		5c代		1		62-7号	2-2、3-8	㊽

地下式横穴墓の名称に関しては、九州前方後円墳研究会編2000『九州の横穴墓と地下式横穴墓』に従う。

遺跡形態 箱：箱式石棺、円：円墳、地：地下式横穴墓、横：横穴墓

## 西都原あるいはえびの市真幸出土の 三角板鋌留短甲

吉村 和昭

### 1 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館には西都原古墳群、あるいはえびの市真幸出土とされる三角板鋌留短甲が所蔵されている。この短甲は、考古博物館設立以前、後胴が「えびの市真幸出土」として宮崎県総合博物館に収蔵（宮崎県総合博物館1982 98頁）され、一方、前胴は西都原古墳群出土として総合博物館の分館である西都原資料館に、1968（昭和43）年の設立以来、展示されていた。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館において、特別展『隼人—古墳時代の南九州と近畿』を企画・担当したことをきっかけとして、筆者は1991年以来、宮崎県出土の甲冑について網羅的に観察を進めてきた。そうした中で、1992年11月18日、西都原資料館において、今回報告する三角板鋌留短甲の前胴を観察する機会を得た。観察を進めていくうちに、細部のあり方、風合が、以前どこかで見たと同じだと感じ始めた。そしてすぐにその同じと思えたものが、総合博物館にある「えびの市真幸出土」とされる三角板鋌留短甲の後胴であることに気づいた。そこでこのことを関係者に告げ、両者を付き合わせるようお願いしたところ、すぐに対応して頂き、やはり両者が同一個体であることが確認されたのである。そして、そのことは翌年に宮崎で開催された第33回埋蔵文化財研究会『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』の資料集にも反映（北郷・長津・東1993 250頁）された。

別々の出土地とされていた短甲の前胴と後胴が同一個体であるとわかり、（筆者以前にも気づいていた研究者がおられたのかもしれないが）筆者は一時、新発見をした気分になっていた。しかしながら、そのような妄想はすぐに崩れることとなった。この短甲の写真が前胴・後胴とも揃ったかたちで掲載されている戦前の文献二つを見出したからである。その文献は、『宮崎縣史蹟調査報告』第五輯（宮崎県1930）と、末永雅雄著『日本上代の甲冑』（末永1934）である。ただし、ここにはまだ問題が残っている。前者はこの短甲を「西都原215号墳出土」としているのに対し、後者は「日向国真幸村出土」としているのである。

それでは、この三角板鋌留短甲はいったいどちらから出土したのであろうか。またいつから前胴と後胴が別々に扱われるようになったのだろうか。本稿では以下、まず短甲そのものの観察所見を述べ、続いて出土地の問題について検討をおこなっていくこととしたい。

### 2 短甲の観察

右前胴開閉式の三角板鋌留短甲である。短甲は現状で、右前胴が裾板の下半と引合板の裾部を欠失しており、さらに押付板は上端の大半が覆輪孔を境に欠損している。左前胴では左脇付近で長側第3段の地板と裾板が欠損している。また後胴は下半、長側第2段から下が失われている。後胴の

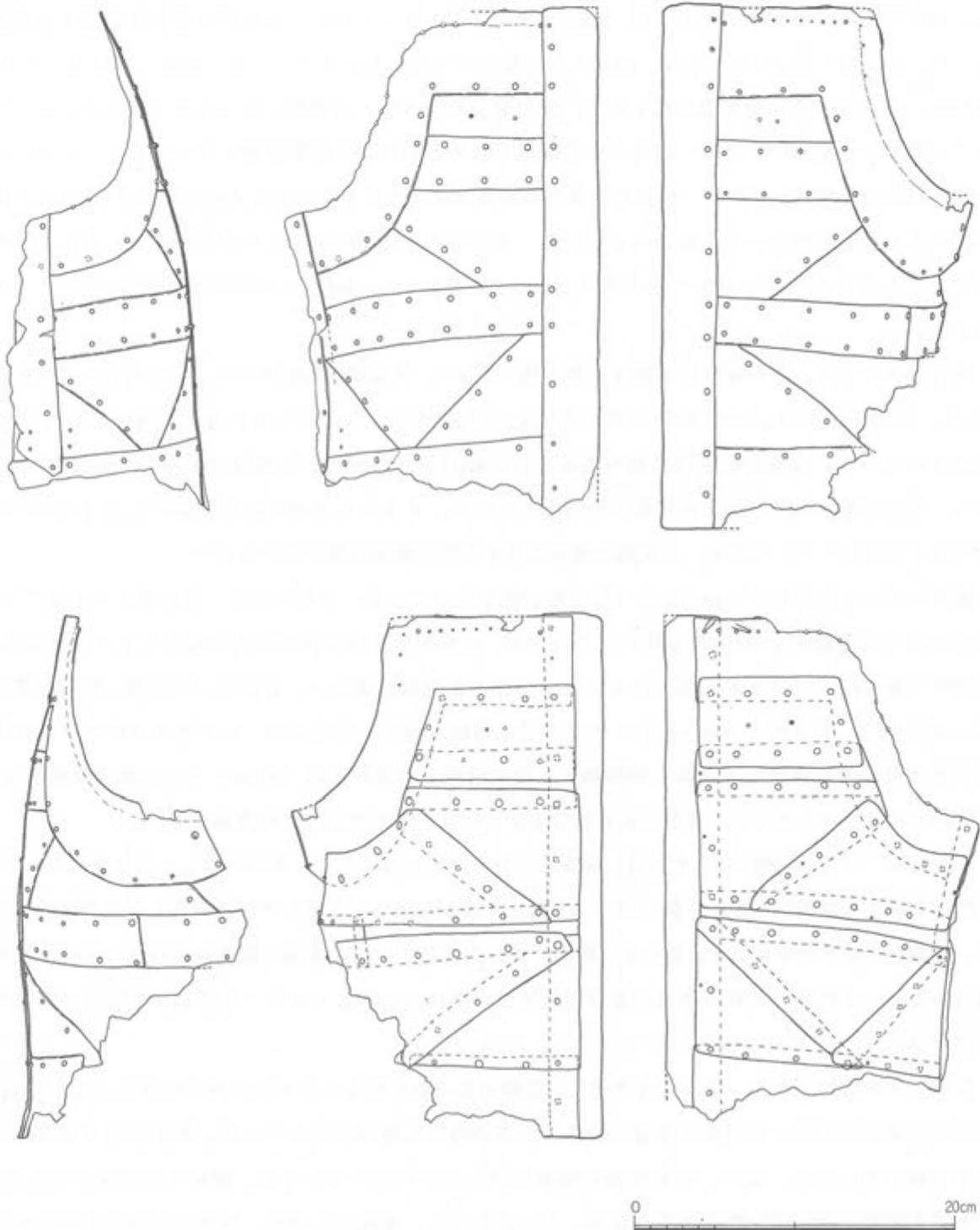


図1 三角板鉄留短甲前胴実測図 (S=1/4)

下部が欠失しているものの、前・後胴7段構成とみて大過ない。このように各所で欠損があるものの、遺存部分の保存状態は良好で、帯金・地板の構成、鉄のあり方などをはっきりと観察することができる。なお、前胴、後胴とも表面にパラフィンが塗布されている。

地板の三角板の配列は、小林分類のA型(小林1975 39頁)である。ただし前胴の豎上第2段については、左右とも三角板で細分されず、長方形の地板1枚からなる。なお、それ以下の地板枚数

は、右前胴では、長側第1段で2枚、同第3段で3枚となっている。左前胴は後胴と接続する脇部までで、長側第1段が2枚である。同第3段は脇部で欠損しているが、2枚が遺存している。一方、後胴は、失われている長側第3段を除き、豎上第2段が3枚、長側第1段が5枚で構成される。なお、左前胴から後胴にかけて一連をなす長側第3段の地板は、左前胴で遺存する2枚や、上段、長側第1段の地板配列からみて（脇部に小さな鉄板を介在させるといったことがない限り）、7枚で構成されるものと推測される。以上のことから、通有の三角板鋌留短甲であるといえる。また、地板の重なりも通有で、左右両側いずれも後に向かって内重ねされ、各段とも後胴中央の地板がもっとも内側となる。

帯金については、その幅は右前胴豎上第3段が3.6cm、長側第2段が3.1cm、左前胴豎上第3段が3.7cm、長側第2段が3.4cm、後胴は豎上第3段が3.5cmを計り、いずれも3cm台の幅の狭いものが使用されている。長側第2段は左脇やや前寄り細分されており、後胴側の帯金が内側に重なる。なお、帯金縦断面の形状は、ほぼ長方形を呈している。すなわち表面と地板に接する面（内面）の縦の長さは変わらず、外見上、表面側と地板に接する側の稜線位置は変わらない。

鋌はいずれも鋌頭径が4mmの小さなものが使用されている。帯金と地板、地板同士の接続では、各鋌の芯々間距離は3cm前後と狭い。そのため、前胴の豎上第3段で左右前胴とも上・下各3鋌、後胴豎上第3段で上・下各12鋌であるなど、全体に使用鋌数は多い。引合板・押付板・地板、引合板と地板2枚、引合板・地板・裾板という3枚の鉄板が重なる箇所では、いずれも3枚すべてを貫通させて鋌が打たれている。また両前胴ともに引合板と長側第2段（帯金）下辺の接続位置では、三角板の地板2枚も重なり、合計四枚が重なるが、鋌はその四枚すべてを貫通している。

引合板は、左右とも幅3.5cmである。蝶番板は右前胴脇だけでなく、後胴右脇にも装着されている。前胴側の蝶番板は後胴に接する側の辺と、上端・下端が欠損し、さらに下半は剝離しかけた状態である。後胴側の蝶番板は幅2.9cmを計る。蝶番金具は失われている。前胴の蝶番板下部には縦に2孔が見られるが、それ以外の蝶番金具装着想定箇所はいずれも欠損しており、金具形状を特定する決め手がない。

覆輪は革組覆輪である。遺存状況は悪く、後胴右脇の押付板上にわずかに残る程度である。なお、左右両前胴の引合板と押付板の接続部分では、引合板にも覆輪が及んでいる。後胴右脇でも蝶番板上に覆輪が見られる。また、右前胴脇の蝶番板は上辺が欠損しているが、覆輪孔の痕跡が見られ、こちらも覆輪が及んでいたことがわかる。このことから、覆輪は引合板、蝶番板が装着された後に施されたと考えられる。

ワタガミ緒孔は、前胴では左右とも豎上第2段に横方向に各1対、後胴では同じく豎上第2段に左右に各1対と、豎上第3段中央に縦方向に1対が見られる。なお右前胴豎上第2段のワタガミ緒孔のみは、1対の穿孔の間隔が2.7cmと広がっている。腰緒孔は右前胴長側第3段の右脇で縦方向に1対が確認できるが、左前胴はこの部分の地板が欠損しているため確認できない。

ところで、内面を観察すると、所々に直径2mm弱の穿孔が確認できる（図版2-3・4）。X線写真で見ると同様の穿孔が前胴・後胴ともに多数存在していることがわかる<sup>1)</sup>（図版3・4。図版4-4

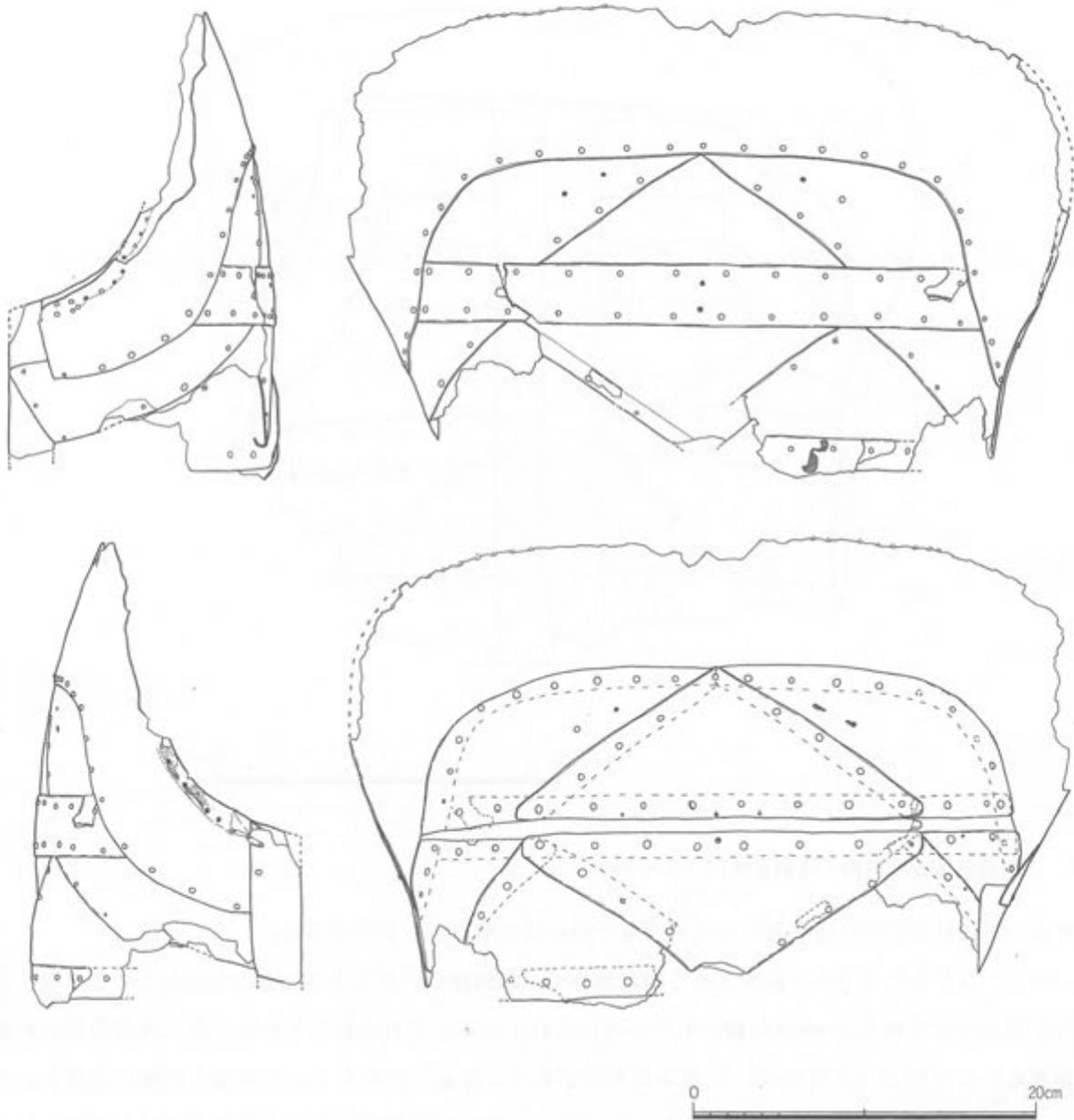


図2 三角板鉚留短甲後胴実測図 (S=1/4)

～6に部分拡大)。これらの穿孔はいずれも外面にはなく、内面にのみ見られる。右前胴において引合板と接続する位置の縦上第3段(帯金)上に穿たれている1カ所を除けば、いずれも地板に穿孔している。そして、その下に重なる鉄板には孔が及んでいない。穿孔は地板と押付板の重なる位置で1カ所見られるほかは、いずれも地板と引合板、地板と帯金の重なる位置で見られる、鉚孔の位置と比較すると、いずれも地板の端近くに穿たれ、鉚孔の並ぶラインに乗ることはほぼない。上述のように、これらの穿孔は、重なる鉄板を貫通することではなく、内側の1枚のみに見られ、鉚が抜け落ちた孔では決してない。また、穿孔位置もあまりにも鉄板の端に近く、鉚を打つことを意図して開けたもの、あるいは鉚孔の穿孔位置を誤り、開け直したものであるとも考えにくい。いずれに

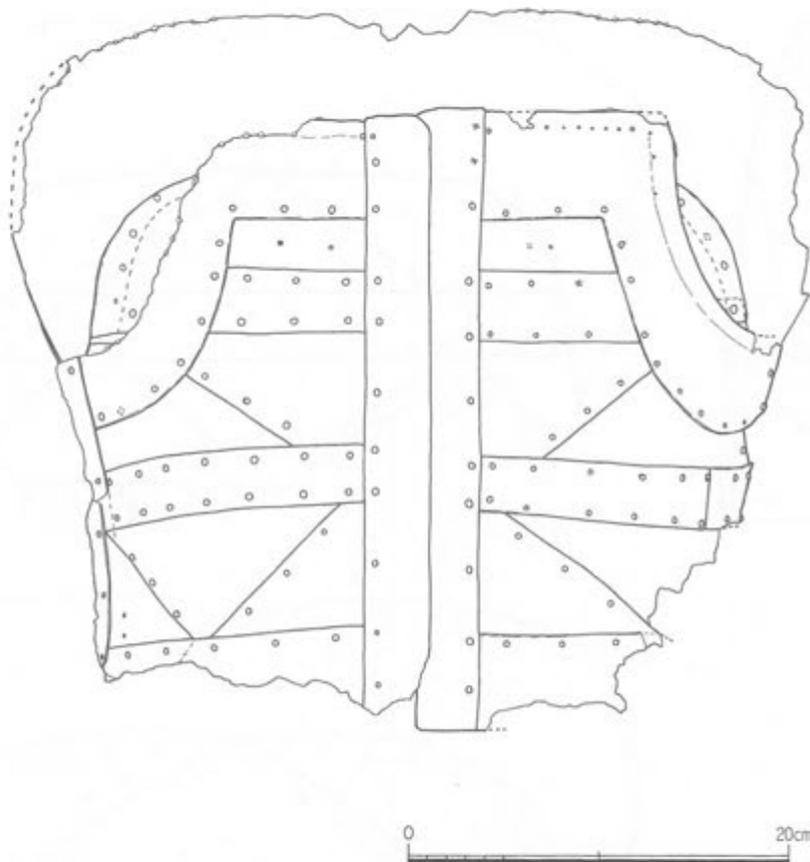


図3 三角板鉾留短甲前胴・後胴合成図 (S=1/4)

せよ、何の目的でこれほど多くの孔を穿ったのかは判断に苦しむ所である。

以上、見てきたように、使用される鉾留数は多く、鉾留頭径はいずれも4mmの小さなものである。さらに帯金はいずれも3cm台の細いものが用いられている。これらのことからこの三角板鉾留短甲はあきらかに多鉾式(吉村1988)に属するものである。なお、分離している前胴と後胴を合成し、本来の状態に復元したのが第3図である。復元高は、押付板の覆輪孔より上の欠損部分を考慮したうえで、約39cmとなる。

### 3 出土地の検討

#### (1) 出土地が別々となったのは何時からなのか？

本来、同一の三角板鉾留短甲の前胴と後胴が、いつから別々の出土地からのものとされるようになったのだろうか。現在、宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されているこの短甲は、戦前においては宮崎神宮徴古館に収蔵されていたものであり、これが1951(昭和26)年に神宮徴古館の建物を借用して開館した県立博物館に、さらにこれが改組され、1971(昭和46)年に開館した宮崎県総合博物館へと受け継がれてきたのである。

短甲本体に残された記録からまず見ておきたい。現在、短甲本体には収蔵シールが残っている。

後胴内面には図書の分類ラベルのようなシールが貼られ、インクで「671真幸」と書かれている。一方、左前胴内面には青い枠線に項目が印刷された収蔵シールが貼られている(図版2-5)。ここには「品名：短甲、臺帳トノ合番號：第六七二號一、発見場所傳來：西都原、奉納出品者名：(空欄)、所有者名：徴古(館? = 破れ、切れている)」と書かれている。また右前胴内面にも左前胴と同じシールが貼られているが、下半が破れており、印刷された項目の部分しか残っていない。前胴に貼られたものは、宮崎神宮徴古館のシールである。一方、後胴のものは明らかに徴古館のものより新しく、シールそのものも戦後のもので間違いなく、博物館所蔵となって以降に貼られたものである。

次に、収蔵品台帳の面から見ていきたい。はじめにも書いたように、宮崎県総合博物館の収蔵品目録には、後胴だけがえびの市真幸出土として掲載され、一方の前胴はこの目録が作成される以前から西都原出土とされ、1968(昭和43)年の開館時から西都原資料館に置かれていた。従って、さらにさかのぼって総合博物館、そして前身の県立博物館の収蔵品台帳を調べてみた。複数の台帳が存在したが、そのいずれにおいても、すでに前胴は西都原、後胴はえびの市真幸(あるいはその前身のひとつである真幸町)出土とされていた。そこで、神宮徴古館時代の目録や台帳がないか捜していたところ、大場磐雄が昭和14年8月に作成した調査票(図4)と、1941(昭和16)年刊行の『徴古館陳列品解説目録』(宮崎神宮1941)が残されていた。なお、前者は現在までに入手したなかでもっとも古い資料台帳である。

それでは、残された台帳類のなかでもっとも古い、大場磐雄の調査票について見ていきたい。当該三角板鋳留短甲については、六七一(図4右)と六七二(同左)の2枚の調査票があり、「名稱」以下いくつかの項目が記入されている。なお両調査票とも「備考」には昭和十四年八月五日という作成日が記入されている。それぞれの調査票の「内容」の項を見ると、六七一(短甲背面上部半部ヲ残セリ、三角形鐵板ヲ矧綴スル式ニシテ表面ニ鋳留ノ瘤アリ。パラフィン塗り)、六七二(短甲胸部残片ニシテ、鐵板ヲ矧綴トセルモノ、表ニ鋳留アリ左右同型、下部缺損。パラフィン塗り)とあり、すでに前胴と後胴が別々に記録され、この時点でパラフィンも塗られていることがわかる。さらに「発見地」の項は六七一(後胴)が「真幸村」、六七二(前胴)が「西都原」と書かれている。また六七一(後胴)の「所有者」の項には「三浦敏寄託」と記されている。

ここに記された番号は、短甲に貼られているシールの番号と一致しており、シールの番号がいずれも神宮徴古館時代の収蔵番号であることが確認できた。なお、右前胴のシールは「第六七二號一」とある。調査票には「員数：二」とあることから、シールが破れた左前胴が「第六七二號二」となるのであろう。

このようにこの調査票が書かれた1939(昭和14)年8月5日の段階ではすでに前胴と後胴が別の出土地からのものとされているのである。そして同時にこれが、出土地が別となっている最初の記録である。なお、紀元2600年事業の一環として1940(昭和15)年に新しい建物となった神宮徴古館が、その翌年に刊行した『徴古館陳列品解説目録』には、番号も出土地も大場磐雄調査票を踏襲し、前胴が児湯郡西都原出土、後胴が西諸縣郡真幸村出土として掲載されている(宮崎神宮1941 64頁、写真図版)。

備考	所有者	発見地	年代	寸法	品質	形状	員数	名称	類別	番號
	昭和十四年八月五日	西都原	上代の	白銅の板、長さ約10cm、幅約5cm、厚さ約0.5cm、表面に刻印あり	鉄製	短甲	二	短甲残片		
短甲の内部に刻印あり、その内容は「大分県立宮崎神社」の文字と見られる。また、短甲の表面には「大分県立宮崎神社」の文字が刻印されている。									類別	番號
									六七一	官物大社宮崎神社

備考	所有者	発見地	年代	寸法	品質	形状	員数	名称	類別	番號
	昭和十四年八月五日	三浦 敏寄托	真幸村	上代の	鉄製	短甲	一	短甲残片		
短甲の内部に刻印あり、その内容は「大分県立宮崎神社」の文字と見られる。また、短甲の表面には「大分県立宮崎神社」の文字が刻印されている。									類別	番號
									六七二	官物大社宮崎神社

図4 昭和14年大場磐雄作成の調査票（宮崎県総合博物館蔵）

大場磐雄が宮崎神宮徴古館の所蔵品を調査したのは、内務省神社局考証課に籍を置いていたからだが、この時の調査について、年譜（大場磐雄先生記念事業会編1975）を見ると、昭和十四（1939）年の項には、「九州廻遊調査旅行。宇佐神宮・佐賀関速吸日女神社・宮崎神宮徴古館調査・西都原古墳群・霧島神宮・熊本・高良山神社・太宰府神社・宮地嶽神社等を歴訪して帰勢（七月二三日～八月二一日）」の一文がある。この時の旅行は約1ヶ月だが、大分、宮崎、鹿児島、熊本、福岡の各県を巡っており、その中で神宮徴古館での調査に掛けられた時間は多くてせいぜい半月程度と思われる。その中で神宮徴古館の所蔵品全般について調査したわけで、この短甲だけに時間を費やし、さらに出土地に関する考証をしたとは考え難い<sup>3)</sup>。さらに、調査票をみると、いくつかの疑問点が湧いてくる。まず六七一、六七二号という番号が「番號」の項には書かれず、「舊號」の項に記入されている。さらに「名稱」の項には別稱・舊稱の小項目があり、六七一号は「名稱：短甲残片、舊稱：鍔」、六七二号は「名稱：短甲残片、舊稱：短甲」と書かれている。これらのことは、この調査票作成にあたって参照した、さらに古い台帳の存在を想起せしめる。

(2) 西都原出土とする文献

次にこの三角板鋳留短甲を西都原古墳群出土とする記録について見ていきたい。前胴・後胴とも西都原古墳群出土としているのは、文頭にも挙げた通り、1930（昭和5）年刊行の『宮崎縣史蹟調査報告』第五輯である。ここではこの短甲を西都原215号墳出土とし（宮崎県1930 17頁）、図版には前胴・後胴揃った写真を掲載している（同 第六図）。実は、この記録はこの短甲に関する最初の記録である。ただし、だからといって出土地の問題が解決したわけではない。

同報告の本文中には大正元年一月に発掘調査された古墳から短甲、頸甲が出たと記され（16頁）、さらに代表的古墳と出土品を示すとする表（16・17頁）には、215号墳の項に、鉄甲一領（短、短刀五、土器類発見（挿図第六）と記されている<sup>4)</sup>。

本文中の甲冑出土古墳の記述と表の215号墳の項を比較すると、古墳の規模や出土遺物の点で内容に相違が見られる。本文には、この古墳には円筒埴輪列や周濠があると書かれており、位置に関する記述や、短甲・頸甲が出土したとされる点からも、215号墳について記述しているものとは考えにくい。記述に混乱が見られる<sup>5)</sup>ものの、1912（大正元）年12月から翌年1月におこなわれた第1次調査で発掘された、旧111号墳（現170号墳）について述べているものと考えられる。

西都原215号墳<sup>6)</sup>は宮崎県立妻高校のグラウンド内に位置している。この古墳は大正年間の一連の学術調査において調査はなされていないので、表に記された出土遺物というのは不時発見によるものだろうか。ただ、この古墳が立地する段丘中段域には、今のところ5世紀にさかのぼる古墳や地下式横穴墓は確認されておらず、ここから三角板鋳留短甲が出土したということを知るには躊躇を覚える。またこのほかにも、この西都原古墳群に関する報告の中には出土地についての混乱する記事<sup>7)</sup>が見られ、やはりそのまま信用することはできないのである。

### （3）えびの市真幸出土とする文献

えびの市真幸出土とする最初の文献は、末永雅雄著『日本上代の甲冑』である。ここには本文中の記述はないが、図版中に各地の三角板鋳留短甲の一例として写真が掲載されている（末永1934図版第26）。前胴と後胴の両方が掲げられ、「日向國真幸村出土 宮崎神宮蔵」と書かれている。この写真は先に挙げた『徴古館陳列品解説目録』に掲載されている写真とは明らかに別のものである。これが、末永自らが撮ったものなのか、あるいは神宮から提供されたものなのかはわからない。末永が宮崎でこの資料を見ていたとすれば何時なのだろうか。略年譜（末永1990）によれば、『日本上代の甲冑』が刊行された1934（昭和9）年以前に九州を来訪した記録は、1932（昭和7）年1月の福岡県月の岡古墳の調査だけである。ただし、宮崎を訪れたかどうかはわからない。一方、『考古ものがたり』には1930（昭和5）年1月の約1月に四国、中国、九州の資料調査に出かけた（末永1976 29頁）<sup>8)</sup>ことが書かれており、その時に調査した可能性はある。しかし、実際に調査に赴いていたとしても、目的は短甲そのものの調査であり、出土地について自ら考証したわけではなく、教えられた通りとしている可能性が高いように思われる。ところで、1930年というのは前項で掲げた『宮崎縣史蹟調査報告』第五輯の刊行された年である。もしこの年に見たものとすれば、ほぼ同時期に出土地について別の見解が存在したことになる。

### （4）それではどちらから出土したのか？

それでは問題としている短甲はいったい、どちらから出土したものであろうか。ここでは上記の検討をもとにもう少し考えていきたい。

まず、この三角板鋳留短甲は、その遺存状態の良さからみて、西都原、えびの市真幸のいずれから出土したとしても、地下式横穴墓の副葬品である可能性が高いように思われる。

西都原出土だとすると、甲冑が出土した地下式横穴墓の調査は戦前には見られないので、やはり

不時発見によるものと考えられるだろう。ただ、上述のように報告自身そのまま信用しがたい部分がある。また大正年間に存在した西都原史蹟研究所と宮崎神宮徴古館のあいだでは遺物の往来があったようであり、そのなかで出土地が西都原になったと考えることもできる。

一方、えびの市真幸だとすると、その出土地は島内地下式横穴墓群であると考えられる。中野和浩氏は『島内地下式横穴墓群』のなかで、昭和8年の鉄塔工事の際に発見されたA号墓から出土したとされる短甲が、今回報告した短甲ではないか（中野編2001 4頁）とされている。しかし、今回報告の短甲は昭和5年の『宮崎縣史蹟調査報告』にはすでに掲載されており、その可能性は考えられない。ところで『島内地下式横穴墓群』には1933（昭和8）年に真幸村から県に提出された公文書<sup>9)</sup>の抜粋が掲載されており（同 6頁表1）、このなかの3号には「台地上造林中にあり。墳形稍破壊され、南方より玄室に向て発掘の跡あり。20年程以前の発掘の際、鏝表れその品は宮崎徴古館に保存あるよし。」とある。これが今回報告の短甲である可能性があるようにも思われる<sup>10)</sup>が、今のところ決定できる証拠はない。

ここで大場磐雄調査票に立ち返ってみたい。六七一号（後胴）には「三浦敏寄託」とある。三浦敏は言うまでもなく、「遺跡遺物地名表」の作成や、西都原古墳群発掘調査への参加などで知られる、明治から大正にかけて宮崎県の考古学研究において活躍した人物であるが、えびの市域の研究史の中では登場してこない<sup>11)</sup>。上記の公文書の記録にも彼の名は登場しない。短甲が三浦敏の寄託であるとする、出土地は真幸より西都原のほうが妥当のようにも思える。

最後に、もう一つの可能性を挙げておきたい。この短甲がどちらからの出土であるかは、さておき、徴古館には本来、西都原出土の短甲と、真幸村出土の短甲の両方があり、その後、その片方が徴古館から運び出されたが、台帳上には残されたままとなった。その結果、大場磐雄が調査票を作成する際に、その残された台帳を重視したため、三角板鋌留短甲が前胴と後胴に出土地が分かれてしまったというものである。やや憶測が過ぎるかもしれないが、可能性として排除しきれないものと考え<sup>12)</sup>。

以上のように、出土地について様々な可能性を考えてきたが、いずれ場合も疑問点が残り、現段階での決定は難しいと言わざるを得ない。

#### 4 まとめ

以上、三角板鋌留短甲そのものの検討、さらにその出土地に関する考証を進めてきた。三角板鋌留短甲は、前・後胴7段構成、右前胴開閉式であり、多鋌式に属するものである。その細部のあり方からみて、多鋌式のなかでも古く位置づけることができよう。一方、出土地に関しては、西都原であるのか、あるいはえびの市真幸であるのか結論を得ることはできなかった。

ところで、この短甲自体はどちらの出土であっても、宮崎県内出土の鋌留短甲のなかでは古く位置づけることができる。上述のようにこの短甲は地下式横穴墓から出土したのものと考えるのが妥当と思われる。これまでのところ甲冑を出土する地下式横穴墓は、少鋌式期の5世紀後葉・末に集中している（吉村2003 164頁）。共伴遺物が不明であり、出土した地下式横穴墓の年代を決定するこ

とは難しいが、もしこの短甲がその製作時期と同時期に副葬されたものとするれば、上記の評価は変わる事となる。そして、当然、西都原出土であるのと、えびの市真幸出土であるのとでは、その意味は大きく異なってくる。

西都原古墳群内の地下式横穴墓からの出土であった場合、これまで群内で唯一の甲冑出土地下式横穴墓であった西都原4号地下式横穴墓（日高1958）に次ぐものとなる。同地下式横穴墓では少鋳式（吉村1988）の横矧板鋳留短甲2と横矧板革綴短甲が出土しており、5世紀末の築造と考えられる。今回報告した短甲は多鋳式であり、型式的にはさかのぼるものである。また短甲の製作時期と地下式横穴墓の築造時期が同時期ならば、西都原古墳群内の地下式横穴墓としては最古となり、宮崎平野部の甲冑出土地下式横穴墓の中でも、国富町木脇塚原A号地下式横穴墓（田中1977）とともに5世紀中葉までさかのぼりうる事例<sup>13)</sup>となる。

一方、えびの市真幸、すなわち島内地下式横穴墓群出土であった場合についてみていきたい。同群ではこれまで、甲冑としては76号地下式横穴墓（竹中・大西2000）で三角板革綴衝角付冑が出土しているのがもっとも古く、短甲に限れば、3号地下式横穴墓（栗原1967）の三角板鋳留短甲が多鋳式であり最古であった。ただし、前者は少鋳式の横矧板鋳留短甲との共伴であり、後者も共伴する鉄鏃が圭頭式を除けば長頸鏃であることから、地下式横穴墓自体は少鋳式期の築造と考えられるものである（吉村2003、162頁）。今回の短甲は型式的には3号地下式横穴墓出土のものと並ぶものである。そしてもし、製作時期と副葬時期に大差がなければ、甲冑出土地下式横穴墓としては、やはりもっとも古いもののひとつとして位置づけられる。

今回、出土地の問題について解決することはできなかったが、可能な限りの検討を進めたつもりである。ただ、先述したように、大場磐雄調査票以前の台帳が存在した可能性が考えられる。一方、末永雅雄の資料は奈良県立橿原考古学研究所に所蔵されており、現在もその整理が進められている。そのなかにこの短甲の出土地を明らかにしうる記録が含まれている可能性が全くないわけではない。この問題については今後も引き続いて検討していきたい。

## 謝 辞

長らく前胴・後胴が別々に保管されていたこの三角板鋳留短甲が同一個体であることを確認した後、総合博物館と西都原資料館において実測をさせて頂きました。しかし、いずれ公表しようと考えながら、図面は眠ったままとなっていました。今回、以前の実測図を見直し、さらに不足分を書き足したうえで報告させて頂きました。このたび、資料の所蔵元である宮崎県立西都原考古博物館の研究紀要という、発表するのにもっとも相応しい場を頂戴したことに深く感謝申し上げます。

なお、十分な検討をしたつもりではありますが、重大な抜け落ちに気付いていない可能性を否定しきれません。地元研究者の皆様に御叱正を請う次第です。

本稿をまとめるにあたり、以下の方々に御教示、御指導を賜りました。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

石川悦雄、石野博信、木下 亘、小林謙一、近藤 協、茂山 護、田中 茂、塚本敏夫、永友良典、

中野和浩、東 憲章、日高 慎、藤沢正明、北郷泰道。

なお、写真撮影を西都原考古博物館・東 憲章氏に、X線撮影を同じく日高敬子氏にお願いしました。また、挿図、図版の作成にあたって、垣内喜久子、鍵谷純子、平山貴子、向山千恵子の各氏の援助を得ました。

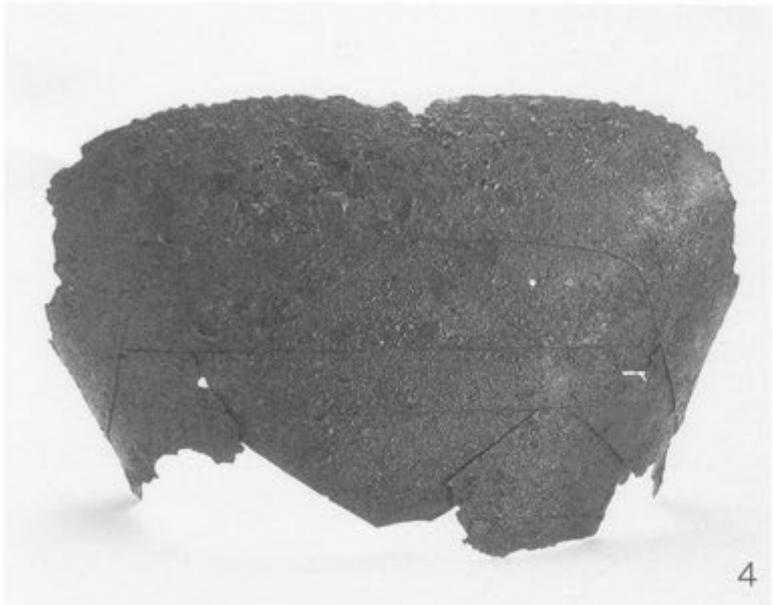
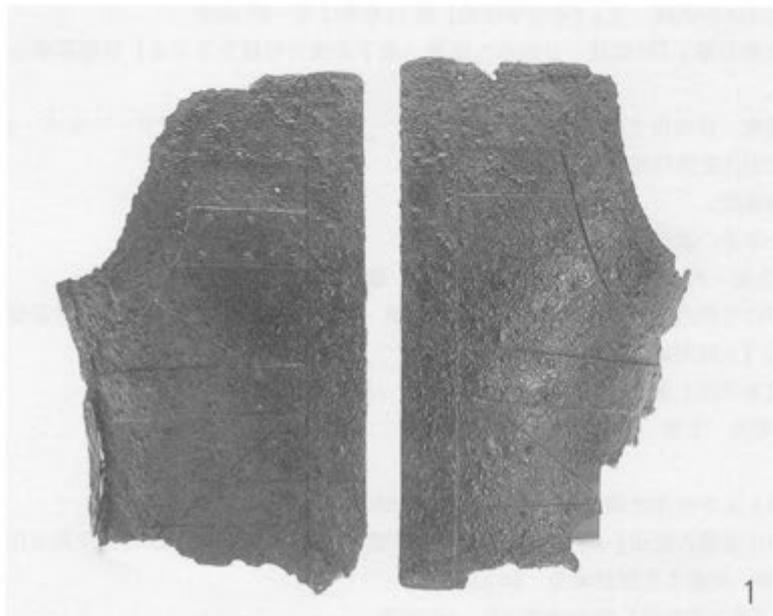
- 註 1) X線写真では覆輪や穿孔が多数見えるが、実測図では内面図で表現した鉄板の重なりなど一部を除き、肉眼観察できたもののみを表現し、あえてそれ以上には付加していない。
- 2) 宮崎県立総合博物館永友良典氏にお世話頂いた。
- 3) 大場は1934(昭和9)年にも宮崎神宮徴古館の調査に訪れている。年譜(大場磐雄先生記念事業会編1975 17頁)には「(1月)1日阿蘇神社より高千穂に向う。2日高千穂附近調査。3日西都原古墳群、都万郷土館を経て宮崎に一泊。4日宮崎神宮徴古館調査、5日鹿児島図書館より熊本を経て6日帰京。」とある。1月5日に鹿児島から熊本まで行動していることからすれば、1月4日の宮崎神宮滞在はせいぜい半日であり、詳しい調査を行ったとは考え難い。
- 4) 鉄甲一領のうしろの括弧は後の「)」が抜けているが、原文のままである。
- 5) 大正元年1月の発掘調査とあるが、この時期発掘調査は行われておらず、大正元年12月～翌年1月の誤りであろう。また出土遺物の中には歯牙が含まれるが、これは旧110号墳(現169号墳)と混乱しているものと見られる。
- 6) この古墳番号は西都原古墳群の新番号においても変更はない。
- 7) 石川悦雄氏のご教示によれば、図版の第6図の下の写真(報告では番号が抜けている)には、西都原第二號発見徴古館蔵として、2面の漢式鏡が載せられているが、下に写っている鏡は、伝住吉村横穴群(蓮ヶ池横穴群)出土として知られている(富岡1919)、(後藤1926)ものである。
- 8) 「昭和五年の正月に、私は四国、中国、九州あたりの資料探訪に出かけました。五日の朝家を出て、一か月ほど回りました。」とある。
- 9) 西諸県郡真幸村長田代徳二 昭和8年8月26日付 公文書第874号 宮崎県学務部長宛
- 10) 中野和浩氏は、この記述を現在東京国立博物館に所蔵されている小札鉄留衝角付冑と横板鉄留短甲が出土した島内1号墓に関するものと考えられている。ただし、この公文書の記述では、大字島内小字平松、所有者は岩崎泰蔵となっているのに対し、東京国立博物館の記録では出土した場所は大字島内小字杉ノ原(東京国立博物館1956 173頁)、所有者は上村優雪(本村1982 41頁)とされており、異なる点もある。
- 11) 北郷泰道氏、中野和浩氏のご教示による。
- 12) 中野氏が考えられるように、註9公文書に記述される3号が島内1号墓とすると、東京国立博物館にある甲冑は、宮崎神宮徴古館を経由して東京国立博物館へ収蔵されたこととなり、この想定が正しい可能性がある。ただし、東京国立博物館の日高 慎氏のご教示によれば、1号墓出土甲冑の収蔵経緯は「明治39(1906)年6月、宮崎県より購入」とのことであり、宮崎神宮、宮崎神宮徴古館の名前は出てこない。
- 13) 木脇塚原A号地下式横穴墓では長方板革綴衝角付冑・三角板革綴短甲が出土しており型的には地下式横穴墓出土最古となる(小林1979)が、頸甲には鉄による補修があり(東1993)、地下式横穴墓の築造年代自体は五世紀中葉以降となる。

## 参考文献

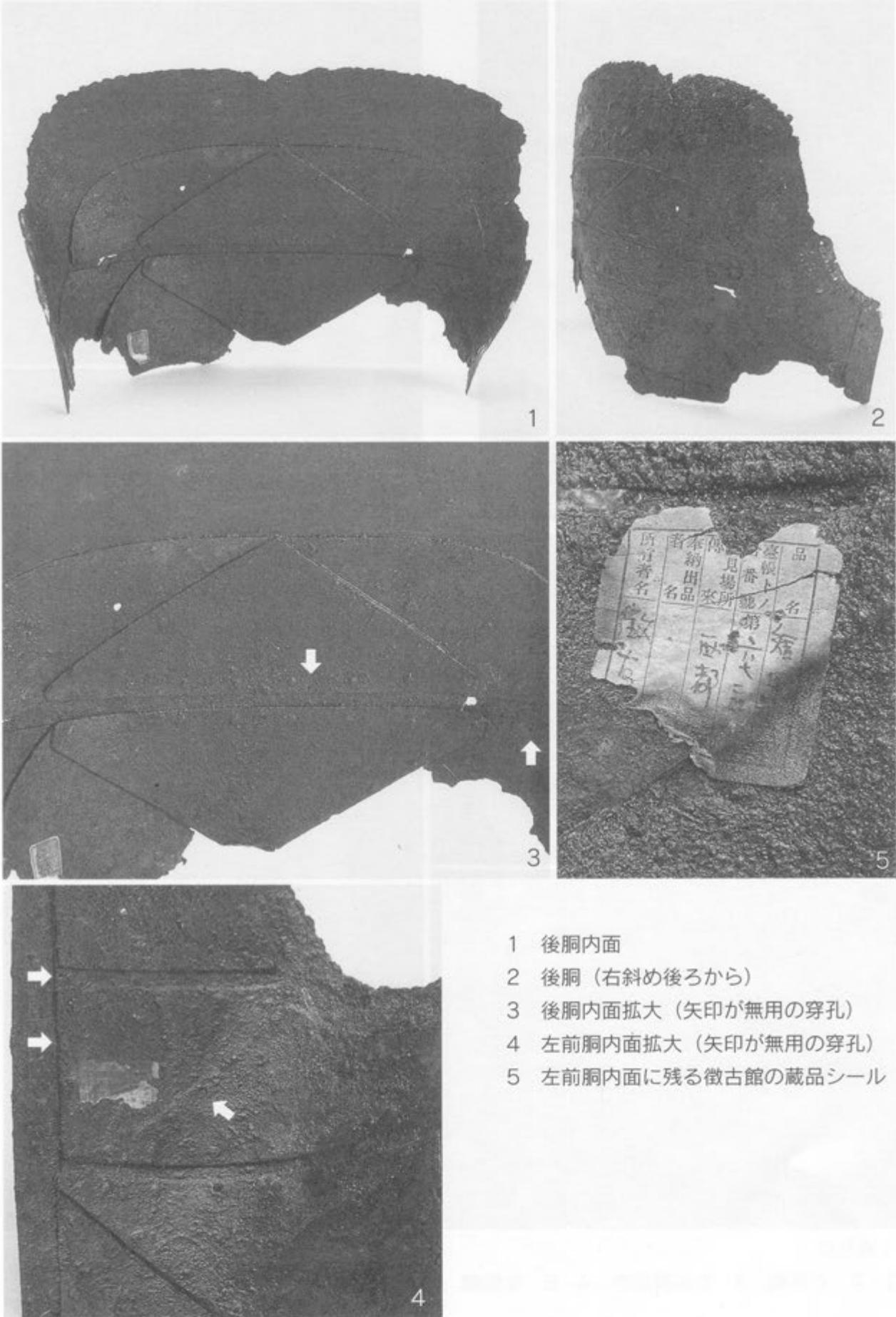
- 石川恒太郎 1968『宮崎県の考古学』 吉川弘文館
- 石川恒太郎 1983「三浦 敏」『宮崎県大百科事典』 宮崎日日新聞社
- 岩切悦子 1983「瀬之口伝九郎」『宮崎県大百科事典』 宮崎日日新聞社
- 大場磐雄先生記念事業会編 1975『樂石 大場磐雄先生略年譜并著作目録』
- 面高哲朗 1997「後章 本県の考古学上の諸問題と展望 第1節 本県の考古学研究の回顧と展望 4 古墳時代」『宮崎県史 通史編』原始・古代I 宮崎県 630-649頁
- 栗原文蔵 1967「えびの町真幸島内地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第12号
- 後藤守一 1926「漢式鏡」 雄山閣

- 小林謙一 1975「甲冑製作技術の変遷と工人の系統 下」『考古学研究』第21巻第2号 37-49頁
- 小林謙一 1979「地下式横穴の甲冑と大和政権」『特別展 日向の古墳展—地下式横穴の謎をさぐる』宮崎県総合博物館 38-39頁
- 白石太一郎・設楽博己編 1994「共同研究 日本出土鏡データ集成2—弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』 岡書院
- 末永雅雄 1976『考古ものがたり —学徒の研究史—』読売新聞社
- 末永雅雄 1990「略年譜」『遺跡調査と大和・河内』末永雅雄著作集第5巻 雄山閣
- 竹中正巳・大西智和 2000「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群76・77・78・79・87・88・89・90・91号墓発掘調査概報」『人類史研究』第12号
- 田中 茂 1977「国富町塚原地下式横穴A号出土遺物」『宮崎考古』第3号 14-21頁
- 東京国立博物館 1956『収藏品目録』（考古 土俗 法隆寺献納宝物）
- 富岡謙三 1919『古鏡の研究』
- 中野和浩編 2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集 えびの市教育委員会
- 東 憲章 1993「南九州における甲冑出土古墳の様相」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』（第33回埋蔵文化財研究会資料）第1分冊 埋蔵文化財研究会 44-51頁
- 日高正晴 1958「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻第4号 16-33頁
- 北郷泰道・長津宗重・東 憲章 1993「宮崎県」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』（第33回埋蔵文化財研究会資料）第2分冊 埋蔵文化財研究会 210-251頁
- 宮崎県 1930「西都原古墳群」『宮崎縣史蹟調査報告』第5輯 児湯郡之部
- 宮崎県総合博物館 1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』考古・歴史資料編
- 宮崎県総合博物館 2002『50年のあゆみ』
- 宮崎神宮 1941『徴古館陳列品解説目録』
- 本村豪章 1982「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』第16号 9-197頁
- 吉村和昭 1988「短甲系譜試論—鋌留技法導入以後を中心として—」『榎原考古学研究所紀要「考古学論攷」』第13冊 23-39頁
- 吉村和昭 2003「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』学生社 159-168頁

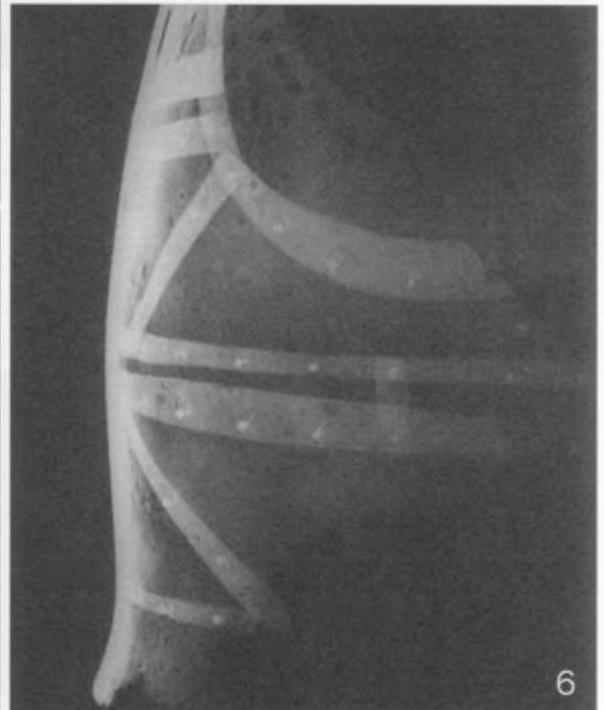
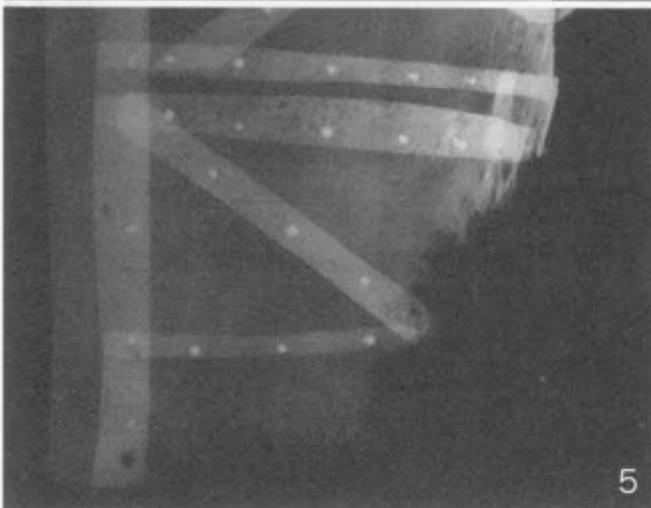
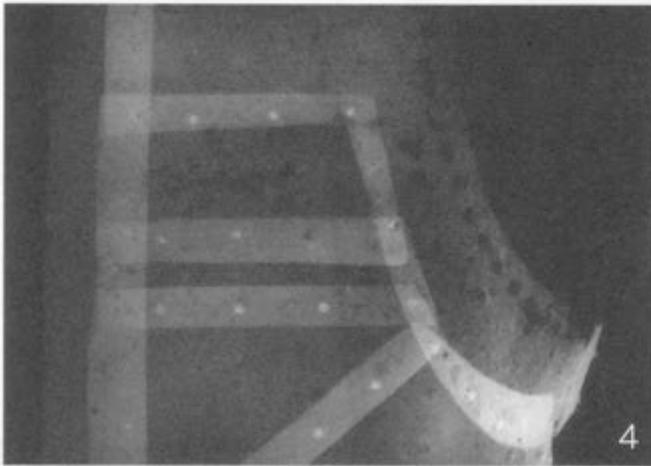
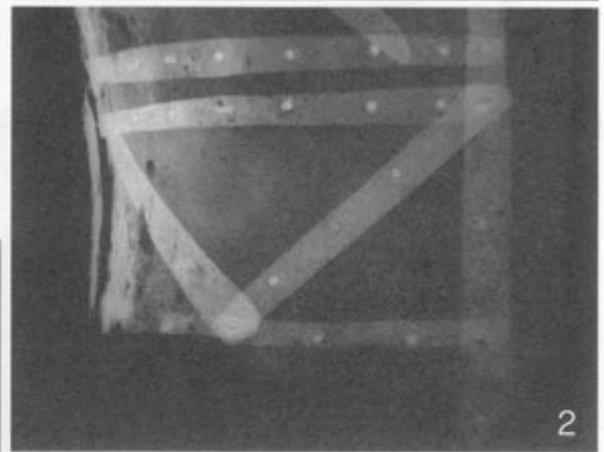
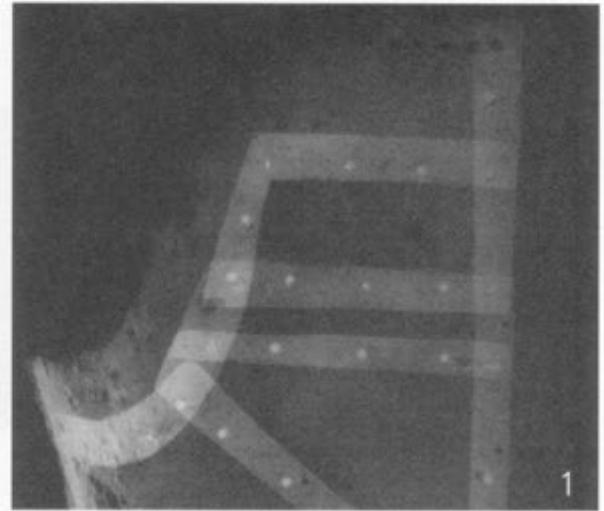
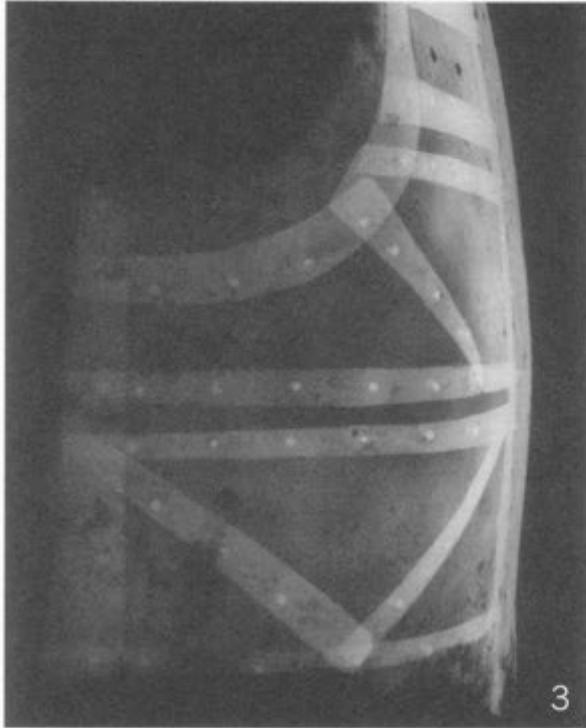
図版  
1



- 1 前胴外面
- 2 前胴内面
- 3 右前胴（斜め前から）
- 4 後胴外面

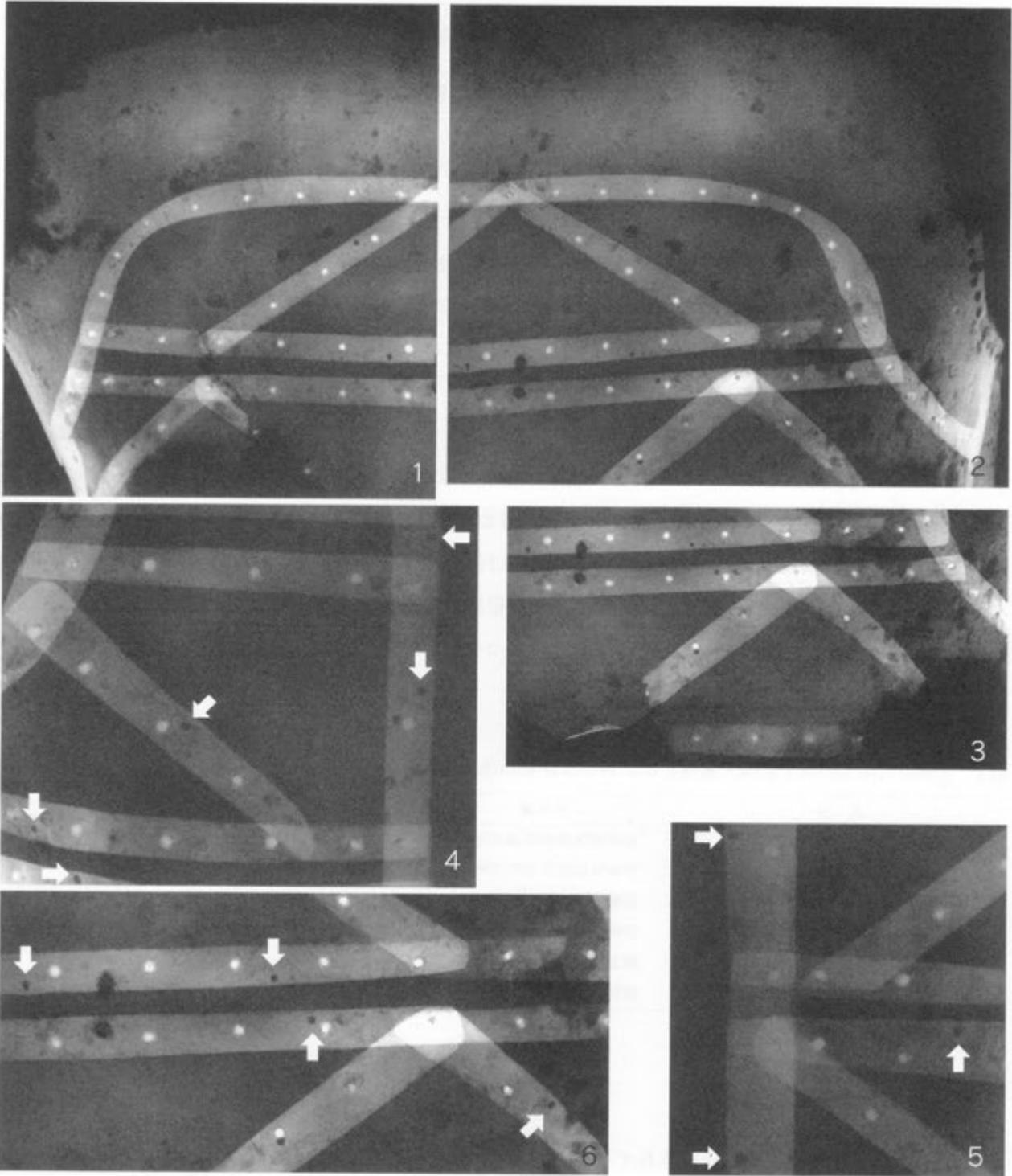


図版  
3



X線写真

1・2 右前胸、3 右前胸側面、4・5 左前胸、6 左前胸側面



X線写真

1~3 後胴、4 右前胴部分、5 左前胴部分、6 後胴部分 (4~6の矢印は無用の穿孔)

## 風習的抜歯の疑われる地下式横穴墓出土人骨の追加例

—宮崎県都城市下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨—

竹中 正巳、高橋 由香

### 1 はじめに

西日本出土の古墳時代人骨、103例中24例に抜歯痕が検出され、抜歯の目的として中小豪族の相続儀礼に伴う服喪抜歯の可能性が提示されている（土肥・田中1988）。土肥・田中は、先人の報告した愛媛、徳島、奈良、群馬、千葉の例を加えて、古墳時代の抜歯風習は日本列島の広範囲に及んでいたと考えている。

古墳時代の南九州の地下式横穴墓分布域でも、現在までに風習的抜歯の疑われる人骨が6例報告されている（表1）。しかし、その抜去部位は一定しておらず、古墳時代の南九州の地下式横穴墓分布域に確実に抜歯風習が存在していたのか断定するには、抜歯例がまだ少ない。

2004年7月、宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されている地下式横穴墓から出土した古墳時代人骨に風習的抜歯が疑われた。本稿では、その人骨が意図的な抜歯例であるのか鑑別を行い、古墳時代の南九州の地下式横穴分布域における抜歯風習について若干の考察を行ったので、その結果を報告する。

表1 古墳時代南九州地下式横穴墓分布域における風習的抜歯の疑われる人骨

人 骨	所在地	性別・年齢	抜歯部位	文 献
旭台地下式横穴墓群7号墳7号人骨	宮崎県西諸県郡高原町	女性・壮年	2	松下・野田（1983）
大萩地下式横穴墓群A-C区3号墳1号人骨	宮崎県西諸県郡野尻町	女性・壮年	2 2	松下（1984）
大萩地下式横穴墓群37号墳2号人骨	宮崎県西諸県郡野尻町	女性・若年	5	松下（1984）
飯盛地下式横穴墓群2号墳人骨	宮崎県東諸県郡国富町	男性・壮年	2	土肥・田中（1988）
新富東横間地下式横穴墓群3号墳人骨	鹿児島県肝属郡高山町	女性・熟年	4	土肥・田中（1988）
北後田古墳群地下式横穴2号墓人骨	鹿児島県肝属郡高山町	女性・壮年	4 4	竹中ほか（1993）

### 2 資料および方法

県立西都原考古博物館に収蔵されている人骨資料の内、風習的抜歯が疑われる人骨は、宮崎県都城市下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓から出土した性別不明の壮年人骨である。下川東牧ノ原地下式横穴墓群（図1）は現在までに26基が調査されており、2号墓から出土した骨鏃8本が注目を集めている（宮崎県1993）。16号墓は、平入りで、人骨は南頭位の1体のみが遺存していた。人骨の保存状態はよくない。副葬品は鉄剣が1本、鉄鏃が2本遺存していた。

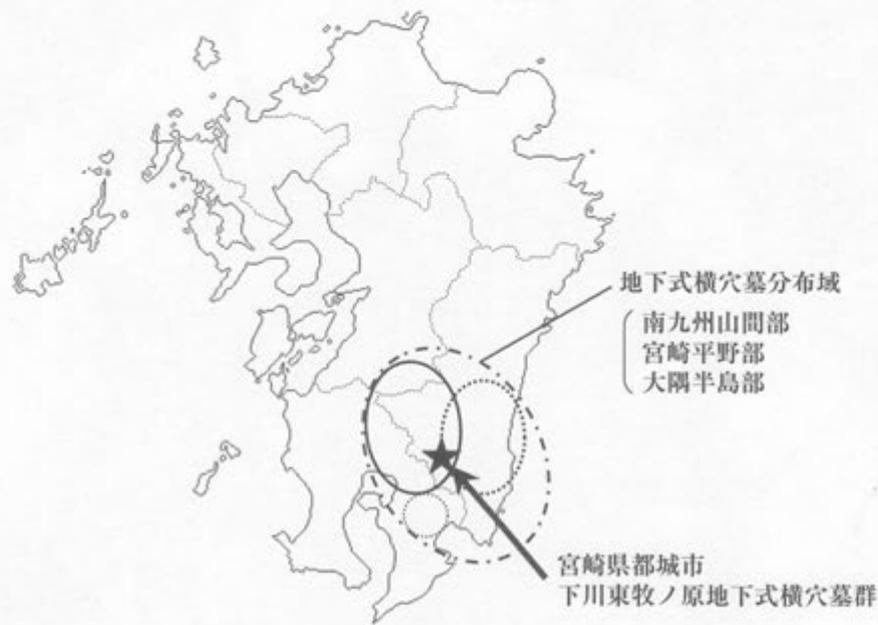


図1 人骨出土遺跡の位置

下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓人骨の歯は、上顎しか遺存していない（図2）。

\*  
 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 ○    \* : 歯根のみ残存    ○ : 歯槽解放

歯式は上記の通りである。上顎右第1小白歯は歯根のみが残存し、本歯の歯冠があったスペースは狭まっている（図2）。本人骨の上顎右第1小白歯部に残る歯根は、意図的に抜歯され、歯根だけが抜歯時の偶発的事故により残存した可能性が考えられる。この上顎右第1小白歯部について、肉眼観察とX線写真撮影を行い、遺存している歯根が抜歯操作時の事故により残存したものか、病的または先天的要因（う蝕による歯冠崩壊、永久歯萌出に伴い吸収されずに残った残存乳歯根、歯牙腫などの歯原性腫瘍）により残存したものか鑑別を行った。

### 3 結果および考察

#### (1) 抜歯の鑑別

図2、図3、図4から明らかな様に、上顎右第1小白歯の歯冠が欠如しており、上顎右の犬歯と第2小白歯の間の距離は2mm弱しかない。上顎右第1小白歯と隣接していた犬歯と第2小白歯は回転変位している。同犬歯と上顎右側切歯は接していない。また、上顎右第1小白歯部の舌側の歯槽はやせている。

風習的抜歯を疑う場合には、先天性欠如、埋伏、外傷や病的脱落との鑑別が必要である（大多和1983）。上顎第1小白歯の先天性欠如の頻度は0.22%と他の歯に比べ低い（住谷1959）。外傷は一般に

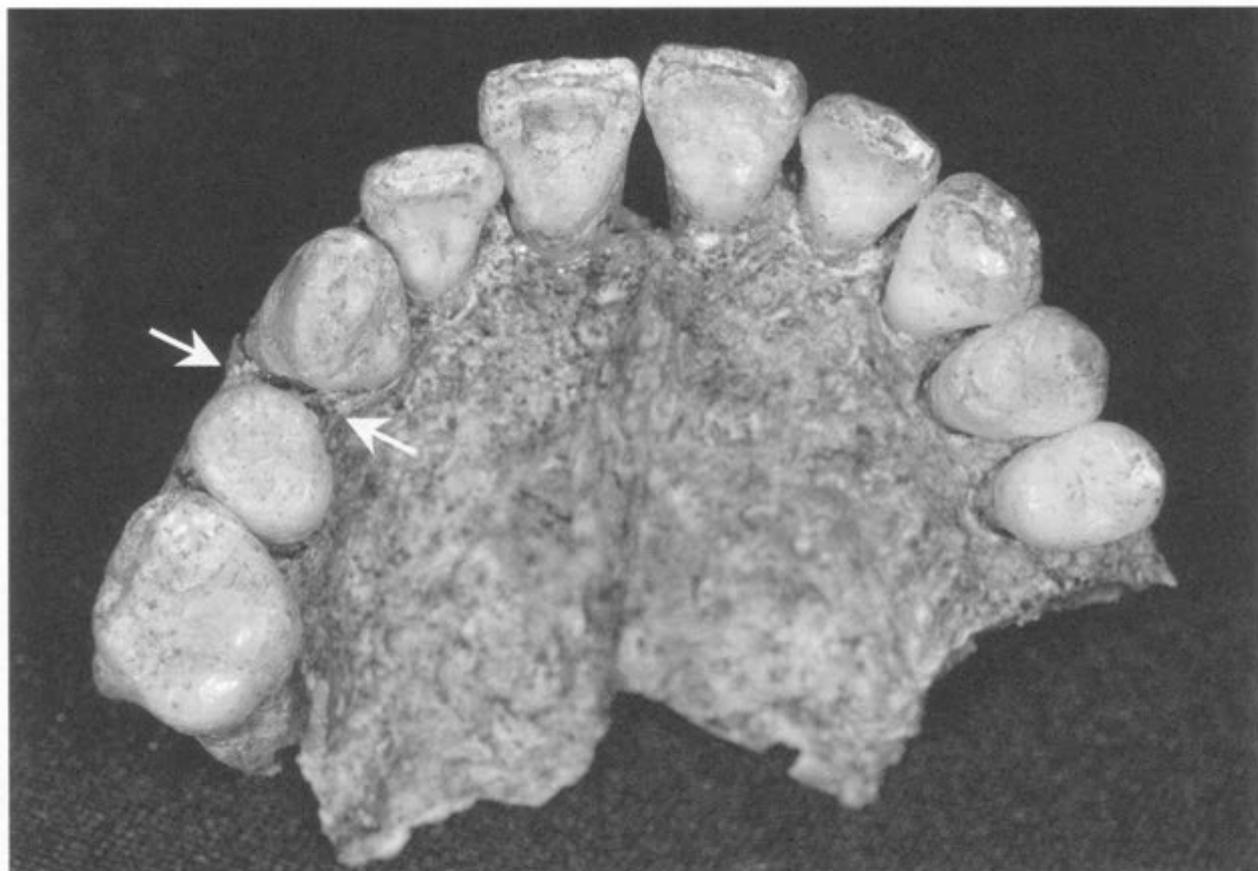


図2 風習的抜歯の疑われる地下式横穴墓出土土人骨の追加例  
下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土土人骨（性別不明・壮年）

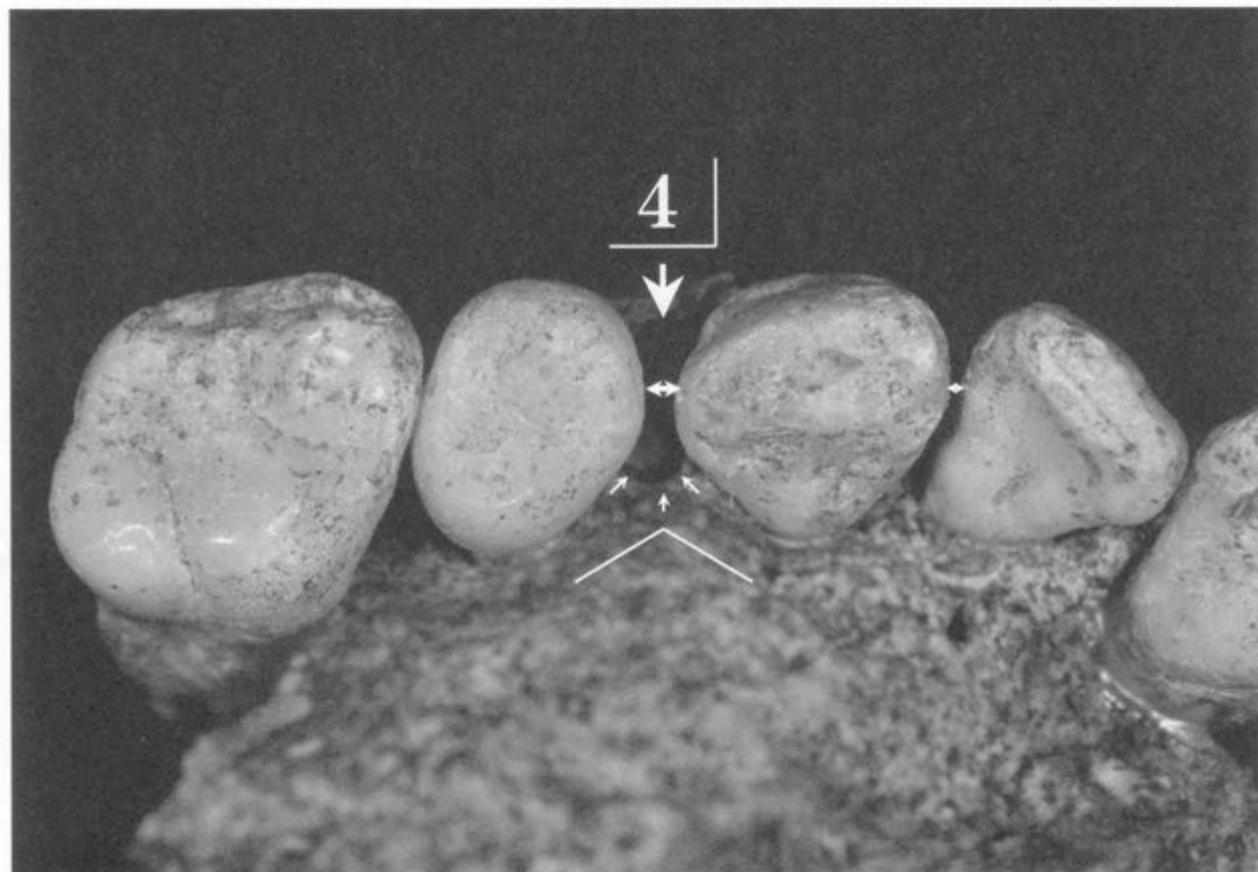


図3 抜歯部位：上顎右第1小臼歯  
下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土土人骨（性別不明・壮年）

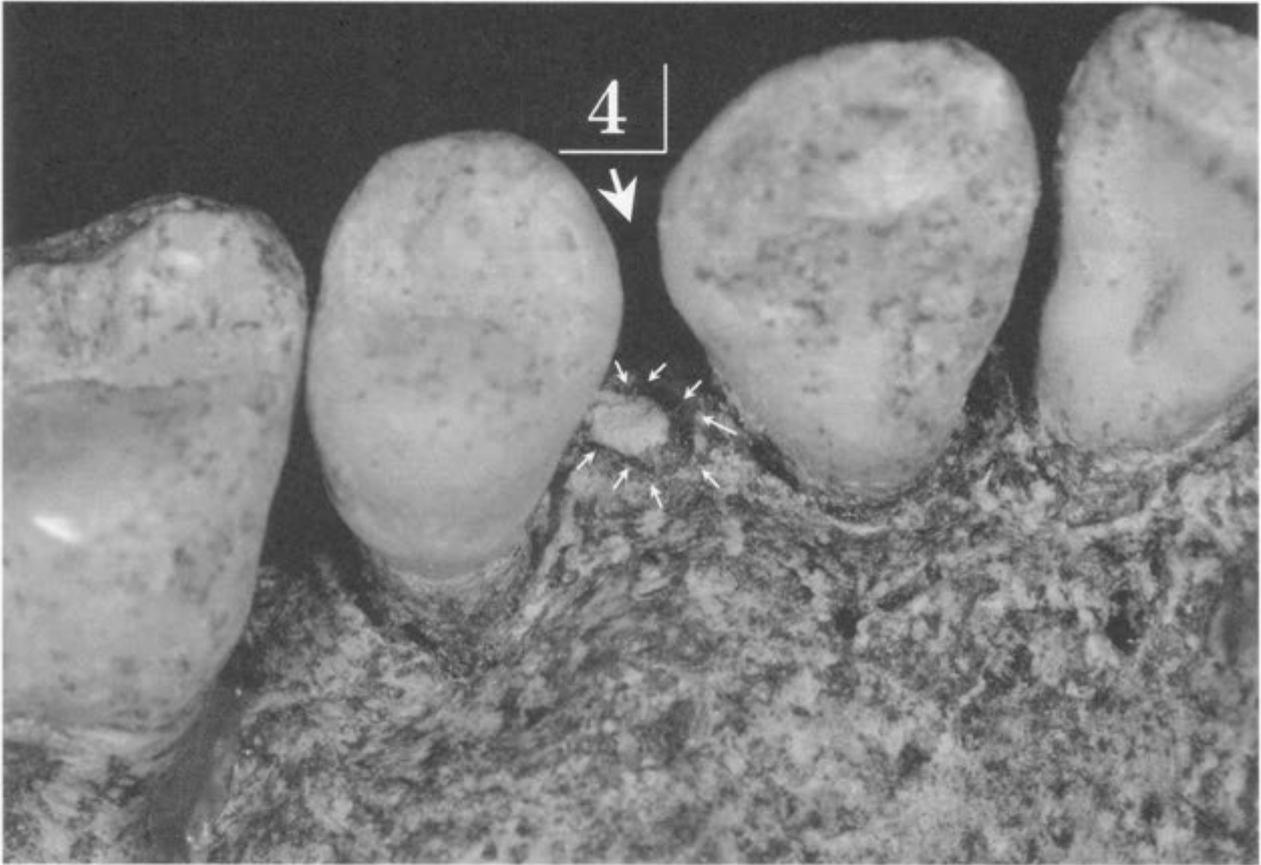


図4 抜歯歯槽部拡大写真：上顎右第1小臼歯破折歯根が露出  
下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨（性別不明・壮年）

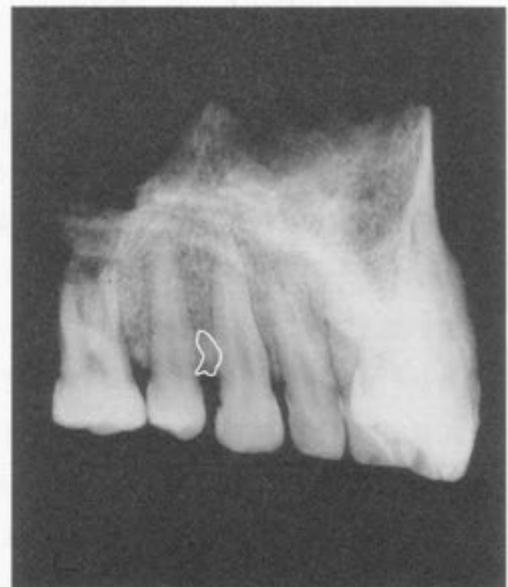
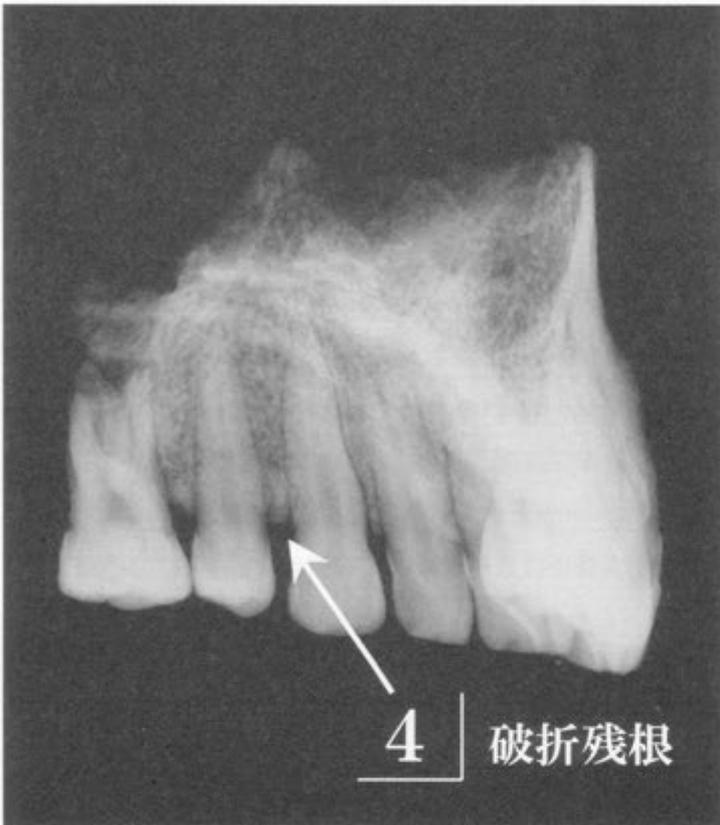


図5 抜歯部位のレントゲン写真：上顎右第1小臼歯の歯根残存  
下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨（性別不明・壮年）

前歯部に多い。また、遺存する他の歯槽を含め、歯周病の痕跡は見当たらない。う蝕による歯冠崩壊も考えられない。

上顎右第1小白歯の歯槽上縁には円状の硬組織の断面（直径約3mm弱）が露出している（図3・4）。X線写真撮影を行ったところ、屈曲した歯根であることが確認できた（図5）。この歯根が第1乳白歯の残存歯根である可能性も考えなければならないが、乳歯根であれば、永久歯の萌出にともなって、当然、歯根が吸収された跡が残るはずである。しかし、上顎右第1小白歯部の歯槽上縁に露出している歯根に吸収された痕跡は認められない。したがって、この歯根は、上顎右第1小白歯（永久歯）の歯根であると考えられる。

現代の歯科治療においても、歯根の屈曲や湾曲、多根歯、根尖細長、歯根分岐開大などの場合、抜歯は非常に難しいと言われている（石川1979）。また、風習的抜歯の際に、破折した歯根は根尖部だけの極めて小さいものが多く、歯槽上縁近くに押し上げられていくことが明らかにされている（島・鈴木1968、Pietrusewsky and Douglas 1993、Takenaka et al. 2001、竹中ほか2002）。

以上のことから、生前、上顎右第1小白歯に意図的抜歯が施され、根尖まで完全にうまく抜けずに歯根が折れ残り、その歯根は歯槽骨改造によって歯槽上縁まで押し上げられたと考えられる。

## （2）地下式横穴分布域における抜歯風習

地下式横穴墓は現在の宮崎県南部から鹿児島県大隅半島にかけての地域に分布する（図1）。この墓制は、在地の人々が営んだ墓制と考えられている。地下式横穴墓の分布域の中でも南九州山間部の地下式横穴墓は調査例が多く、多数の保存良好な人骨が出土している。それに比べると、宮崎平野部や大隅半島のそれは調査例が少なく、人骨の出土数も少ない。

古墳時代の南九州を特徴づける墓制である地下式横穴墓から出土した抜歯人骨の数は、南九州山間部から出土した人骨が3例、宮崎平野部から出土した例が1例、そして大隅半島から出土した人骨が2例の6例であった（表1）が、本例が加わり7例となった。本例が出土した地域は宮崎平野部と南九州山間部の境界にあたる。

多数の人骨が出土している南九州山間部に比べ、宮崎平野部や大隅半島は出土人骨数の割に抜歯人骨の割合が高い。南九州山間部で抜歯人骨の割合は、ほぼ0%に近い。土肥・田中によれば、古墳時代の抜歯は上顎第1小白歯または上顎側切歯の片側性抜歯が多く、抜歯回数は1回、施行年齢はほぼ成年期と推定されている。抜歯の目的としては、中小豪族の相続儀礼にともなう服喪抜歯の可能性が提示されている。南九州山間部から出土した人骨の抜歯対象歯は下顎側切歯や下顎第2小白歯であり、古墳時代の抜歯に多い抜歯部位ではない。これらのことから考えると、古墳時代の南九州山間部には抜歯風習が存在したとは言えない。現在の所、地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島には抜歯風習が存在した可能性が高いと考える。

縄文時代後晩期の日本列島本土では、成人、結婚、服喪など人生儀礼として風習的抜歯が盛んに行われ、上顎左右の犬歯と下顎の前歯がよく抜歯された。鹿児島県垂水市柊原貝塚から出土した縄文後期の人骨は上顎左右の犬歯が抜歯されており、縄文時代後期には、南九州にまで抜歯風習が伝

播していた(峰他1999)。古墳時代の抜歯風習は、縄文時代や弥生時代の風習的抜歯とは、抜歯の部位や抜歯の意義が異なる(土肥・田中1988)。地下式横穴墓分布域の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島の抜歯例をみても、縄文・弥生期とは異なり、古墳時代の新たな抜歯風習の抜歯部位と同じである。

地下式横穴墓も、副葬品や埋葬様式、埋葬儀礼などから考えると、古墳文化の影響を受けている。地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島は前方後円墳が存在する。前方後円墳と地下式横穴墓群との関係は、宮崎平野や大隅半島の平野部から内陸部に向かうにつれ疎遠になっていく(北郷1986)。前方後円墳は、南九州山間部には認められない。このような脈絡から考えると、新たな意味の抜歯風習が古墳時代の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島に伝播していて、これらの地域の地下式横穴墓を営んだ人々が風習的抜歯を行っていたとしても不思議ではない。

本稿の要旨は、第58回日本人類学会大会(2004年11月、長崎大)において発表した。

## 引用文献

- 土肥直美・田中良之 1988 「古墳時代の抜歯風習」『日本民族・文化の生成1』六興出版 197-215頁
- 北郷泰道 1986 「南境の民の墓制」『えとのす』31 108-122頁
- 池田次郎・茂原信生 1975 「青島貝塚の縄文人骨について」『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告』宮城県南方町 155-187頁
- 石川武憲 1979 「いわゆる難抜歯、歯界展望」『別冊 抜歯の臨床』医歯薬出版 255-263頁
- 松本彦七郎 1929 「陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』7 1-65頁
- 松下孝幸 1984 「宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨」『宮崎県文化財調査報告書』27 53-111頁
- 松下孝幸・野田耕一 1983 「宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨」『宮崎県文化財調査報告書』26 78-107頁
- 峰和治・小片丘彦・竹中正巳 1999 「垂水市柗原貝塚出土の縄文時代人骨—平成9年度調査—」『柗原貝塚(平成9・10年度調査)』122-135頁
- 宮崎県 1993 「宮崎県史」資料編 考古2 宮崎県
- 大多和利明 1983 「広田弥生人の所謂風習的抜歯 特にその抜歯痕の検討」『九州歯科学会雑誌』37 588-600頁
- Pietrusewsky M. and Douglas M. T. 1993 Tooth ablation in old Hawaii. *J. Polynesian. Soc.*102, 255-272.
- 島五郎・鈴木誠 1968 「ハワイ諸島人の抜歯について」『日本民族と南方文化』平凡社 41-60頁
- 住谷靖 1959 「日本人における歯の異常の統計的観察」『人類学雑誌』67 215-233頁
- 竹中正巳・緒方重光・我那覇生純 2002 「縄文時代における風習的抜歯操作失敗の追加例」『鹿児島大学医学部保健学科紀要』12(2) 31-34頁
- Takenaka M. Mine K. Tsuchimochi K. and Shimada K. 2001 Tooth removal during ritual tooth ablation in the Jomon period. *Bulletin of Indo-Pacific Prehistory Association* 21, 49-52.
- 竹中正巳・小片丘彦・峰和治・佐熊正史 1993 「風習的抜歯の疑われる古墳時代若年女性人骨」『人類学雑誌』101 483-489頁

## 宮崎市阿波岐原出土の瀬戸内系土器

東 憲章・柄本 久子

### 1 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館の開館に合わせ、県総合博物館に収蔵されていた考古資料の多くを考古博物館へ移管した。その中に含まれていた瀬戸内系弥生土器（壺）について紹介する。この土器は、瀬戸内系弥生土器の完形品として、一部の研究者には知られていたものの、これまで実測図や写真等は公表されておらず、今回新たに実測と撮影を行ったものである。

### 2 宮崎市阿波岐原出土の土器（第1図）

中型壺である。口径7.4cm、器高17.8cm、底径7.4cm。短く外反する口縁部は端部が上下に拡張され、3条の凹線が施される。胴中に最大径を持ち、器面調整は、胴上半部は縦方向のハケ目、下半部は横方向のヘラミガキで、底部から胴下位には縦方向に丁寧なナデ（あるいはミガキ）が見られる。頸部内面にはシボリ痕が残る。

焼成は良好で、器壁は約5mm前後と薄手である。胎土には3mm以下の半透明粒、2mm以下の白、黄白、灰、褐、黒褐色の砂粒を多く含んでいる。色調は、外面は灰黄（2.5Y7/2）～にぶい黄橙（10YR7/3）で、内面もほぼ同色調である。

胴下半部には、焼成後に意図的に穿たれた径約2cmの孔が見られる。

器形、口縁端部の凹線文、器面調整の特徴などから、伊予地域に特徴的な壺と見られ、第IV様式（中期後葉）に位置づけられる。

土器本来のものではないが、胴上部に「阿波岐原」の墨書きが見られる。発見者あるいは前所有者が、出土地を記したものと思われる。

戦前の宮崎神宮徴古館の収藏品目録（大場磐雄氏作成）に当土器の記載はなく、宮崎県立博物館（県総合博物館の前身）の目録（瀬ノ口伝九郎氏作成）には記載が見られる。しかし、品名、形状・寸法、年代、発見地等は明記されているものの、受理次第については空白であり、出土及び収蔵に至る経緯は不明である。

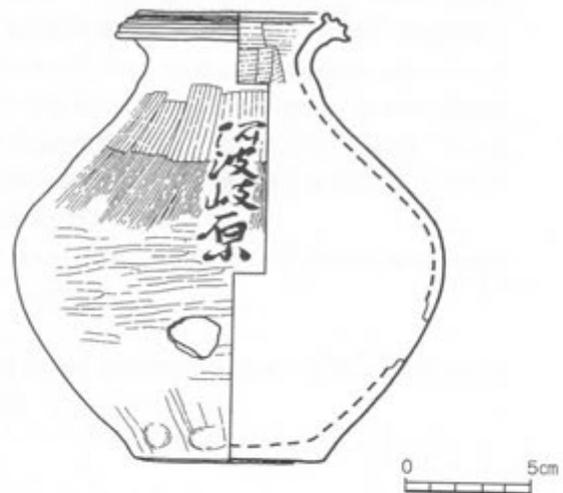


図1 宮崎市阿波岐原出土瀬戸内系土器（S=1/4）

### 3 宮崎県内出土の瀬戸内系土器 ～まとめにかえて～

県内出土の瀬戸内系土器のうち、詳細が明らかなものを表1にあげた。

その分布は、延岡市、西都市、新富町、宮崎市、国富町、田野町、都城市と、日向灘沿岸の平野部及びその隣接地で、九州東海岸沿いに分布域を拡げたことが窺える。

県内出土の瀬戸内系土器は、伊予東～中部における第IV-2、3様式に位置づけられ、中期後葉に限定される。また、それぞれの土器が遺跡内に数個体のみと客体的存在である。その胎土を見ると、在地形式のものが砂粒や小礫等の混和材を多く含むのに比して、明らかに精良な胎土と灰白色に近い明るい色調であることに差異が認められる。

器種は、高坏と壺に限定され、高坏脚部の矢羽根透しは、一段と二段のものが見られるが全て未完通である。

国富町上ノ原遺跡出土の高坏は、退化が著しく、もはや矢羽根透しとは呼べない縦位の刻線となっている。

西都市松本原遺跡出土の高坏は、内面隆起帯を持つ水平口縁で、口縁帯に4つの円孔を有する。細沈線に区切られた二段の矢羽根透しを持ち、脚端部にヘラ状工具による綾杉状の刺突が施される。

南九州の弥生土器が、前期以降の広域形式から、より地域的な特徴を示す形式を成立させる背景の一つとして、他地域の土器文化との接触とそれに伴う在来形式の変容が想定される。九州東南部の宮崎平野部においては、下城式系土器の南下によってその影響を色濃く受けた中溝式土器の成立をみる。その契機は、瀬戸内系土器のうち伊予地域第IV様式の九州東岸地域への流入であり、中期後半の時期であろう。



#### 参考文献

- 石川悦雄 1983 「日向における外来系土器の伝播とその地域性（I）－瀬戸内・畿内系土器の流入と展開－」『研究紀要』No.9 宮崎県総合博物館
- 桑畑光博 2000 「中溝式系土器の検討」－宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて－『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会
- 中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会

表1 宮崎県内出土瀬戸内系土器

出土地・遺跡	器種	施文・特徴
延岡市三須	高坏	凹線文、刺突、矢羽根透し（二段）、細沈線
西都市松本原遺跡	高坏	水平口縁、円孔、刺突、矢羽根透し（二段）、細沈線 凹線文
同	高坏	細沈線、矢羽根透し（一段）、凹線文
同	高坏	短脚、細沈線、矢羽根透し（一段）、凹線文
新富町新田原遺跡SA4	壺	凹線文
同 SA6	壺	凹線文
同 SA6	高坏	細沈線、矢羽根透し（二段）、凹線文
新富町鬼付女西遺跡B	壺	凹線文
宮崎市阿波岐原	壺	凹線文
宮崎市元村遺跡	高坏	凹線文、矢羽根透し（二段）、細沈線、刺突
宮崎市中岡遺跡	高坏	矢羽根透し（一段）、細沈線、凹線文
宮崎市保寿庵遺跡	高坏	矢羽根透し（一段）、細沈線、凹線文
国富町上ノ原遺跡	高坏	矢羽根透し（一段）、凹線文
同	高坏	矢羽根透し（一段）、凹線文
同	高坏	凹線文（脚部不明）
田野町内（詳細不明）	壺	凹線文
都城市池ノ友遺跡	壺	凹線文

## 韓国内出土馬具類集成

北郷 泰道

宮崎県立西都原考古博物館では、2004(平成16)年10月9日(土)から12月12日(日)の間、『それでも騎馬文化はやって来た』と題して特別展を開催した。また、10月10日(日)には、西谷正氏(伊都国歴史博物館館長・九州大学名誉教授)の基調講演と、韓国からの金斗喆(釜山大学校助教授)・柳昌煥(慶尚大学校博物館学芸研究士)・李尚律(釜慶大学校博物館学芸研究官)の各氏に、千賀久氏(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館主幹)と当館東憲章を交え、シンポジウムを開催した。今回、近年蓄積著しい韓国考古学資料の中で、馬具類を取り上げることにしたのは、日向の地が、馬生産を含め騎馬文化受容に関しては、重要な役割を演じた地域であることを考えてのテーマ設定であった。

韓国内の馬具類については、特に金斗喆・柳昌煥・李尚律氏などによって精力的に調査研究が進められ、枠組みが整理されている。しかし、その一方で、金氏や李氏と成正鏞氏とでは、年代観に大きな違いがあり、またいずれも千賀氏の示す年代観とも必ずしも整合性を持つものではない。こうした年代観の違いは、馬具類に限ったことではないが、宮代栄一氏の指摘<sup>1)</sup>を踏まえつつ、さらに異なる次元を含み、大きくは史の変遷の理解と深く関わることであり、「もの」論の範囲を超えた論議の土俵の整理が必要と考えられる。

特別展開催にあたり、貸出を受ける資料選定のため、基礎となる韓国内出土の馬具類の一覧を作成した。手続き上の必要性から進めた作業であるが、それなりの基礎資料の確認にはなった。国内においてもそうであるが、膨大な史資料を前に、報告書に逐一当たることも相当に時間を費やすことから、孫引き等が目立ち、ましてや原資料を確認することも覚束ない現状を目の当たりにすることが多くなり、原点に立ち戻る必要をいろいろな局面で感じるようになった。ましてや、日韓相互の資料の共有化が進んでいるとは言え、まだ十分に韓国内で刊行された報告書の一つ一つについて目を通すことも困難な現状である。そうしたことから、蓄積著しい韓国の考古学事情に追いつくことができているか否かは別にしても、今後馬具類の研究を進めるに当たって、まず出発となる基礎資料の確認のため、幾らかは省力化ができ、次の調査研究の段階に精力を注ぐための検索等には役立つことがあるかもしれないと思い、集成した馬具類の一覧表と、報告書及び図録等の一覧表を資料として提供するものである。なお十分ではないが、特別展段階までに確認し得た資料に、最終的には、追加・補足等を加え、各種の特別展や企画展の図録掲載ばかりではなく、可能な限り原資料となる報告書による確認を進め、整理を行った。

一覧表作成にあたり、鉸具は大なり小なりそれぞれ伴っているが、馬具類として認定できるか否かの判断もあるため、一部の特記すべき特殊な鉸具以外は、一々掲載していない旨お断りしておく。一方、韓国内では雲珠といわれる辻金具を一括して、雲珠に分類することが多いが、一覧表では分けて表記している。また、最終的に、特に古い年次の報告書に目を通すことができなかつたものが

ある。それらについては、李蘭暎・金氏<sup>2)</sup> 及び姜裕信氏<sup>3)</sup> の文献目録を参照し、文献一覧表の最後に参考として上げている。

報告書確認等については、吉村和昭・山田隆文氏をはじめとして奈良県立橿原考古学研究所の皆さんにお世話になった。記して感謝を申し上げたい。

- 註 1) 宮代栄一 1996「古墳時代における馬具の暦年代—埼玉稲荷山古墳出土例を中心に—」『九州考古学』第71号 九州考古学会  
 2) 李蘭暎・金斗喆 1999「韓国の馬具」馬文化研究叢書Ⅲ 韓国馬事会馬事博物館  
 3) 姜裕信 1999「韓国古代の馬具と社会」學研文化社考古學叢書21 學研文化社

表1 馬具類一覧表

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ	
1	慶州市	天馬塚	轡鏡板(心葉形)	報-6	P.131・132	
2	〃	〃	鞍金具	〃	P.121・123	
3	〃	〃	鞍褥	〃	P.126	
4	〃	〃	杏葉	〃	P.129・130	
5	〃	〃	鐙	〃	P.127~129	
6	〃	〃	雲珠	〃	P.133・135	
7	〃	〃	魚尾形環洛付雲珠	〃	P.134	
8	〃	〃	辻金具	〃	P.135	
9	〃	〃	金銅装亀形三葉裝飾具	〃	P.136	
10	〃	〃	馬鐸	〃	図面25・26	
11	〃	金冠塚	馬鐸	図-2	P.99	
12	〃	〃	鈴	〃	〃(一括)	
13	〃	〃	三環鈴	〃	〃	
14	〃	〃	四環鈴	〃	〃	
15	〃	〃	雲珠(貝製あり)	〃	P.100	
16	〃	皇南大塚・皇南洞	第98号古墳・南墳副塚	透彫金銅板被玉蟲装鞍・付属具	報-(5)・35	図版261・262・267
17	〃	〃	〃	透彫銀板被鞍・付属具	〃(注:図面あり)	図版262・263・267
18	〃	〃	〃	木心黒漆鞍	〃	図版264・265
19	〃	〃	〃	木心鉄製鞍	〃	図版266・268
20	〃	〃	〃	鐙(玉蟲装)	〃	図版268
21	〃	〃	〃	鐙	〃	図版269~272
22	〃	〃	〃	轡(鏡板)	〃	図版273~275
23	〃	〃	〃	杏葉(心葉形・魚尾形)	〃	図版276
24	〃	〃	〃	雲珠	〃	図版278・279
25	〃	〃	第98号古墳・北墳	木心透彫金銅装鞍	報-35	P.111
26	〃	〃	〃	轡(鏡板)	〃	P.111・112
27	〃	〃	〃	馬鐸	〃	図面19・20
28	〃	〃	〃	鐙	〃	図面21
29	〃	〃	〃	杏葉(魚尾形)	〃	P.113
30	〃	〃	〃	雲珠	〃	図面22・24
31	〃	〃	〃	裝飾具 ほか	〃	P.114・115
32	〃	味鄒王陵・鷄林路	14号墳	杏葉(棘葉形)	図-2	P.100
33	〃	〃	〃	雲珠	〃	〃
34	〃	味鄒王陵 第7地区古墳群	第3号墳	雲珠	報-10	P.64・65
35	〃	〃	〃	杏葉	〃	〃
36	〃	〃	〃	轡	〃	〃
37	〃	〃	〃	鐙	〃	〃
38	〃	〃	〃	心葉形垂飾付鈎具	〃	〃
39	〃	〃	第4号墳	杏葉	〃	P.68
40	〃	〃	〃	雲珠	〃	〃
41	〃	〃	〃	轡	〃	〃
42	〃	〃	第5号墳	雲珠	〃	P.74
43	〃	〃	〃	鐙	〃	〃
44	〃	〃	〃	轡	〃	〃

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ	
45	〃	〃	杏葉	〃	〃	
46	〃	〃	鞍金具	〃	P.73	
47	〃	第7号墳(積石木槨)	轡	〃	P.81	
48	〃	味都王陵 前地域 A地区	第3号墳 第1墓槨	〃	P.185・186	
49	〃	〃	杏葉	〃	P.185・186・188	
50	〃	〃	雲珠	〃	P.188	
51	〃	〃	第3号墳 第2墓槨	〃	P.211	
52	〃	〃	轡	〃	〃	
53	〃	〃	轡	〃	〃	
54	〃	〃	雲珠	〃	〃	
55	〃	皇吾里	4号墳	杏葉(心葉形)	〃	P.213
56	〃	〃	轡	報-2	図版24	
57	〃	〃	轡	〃	〃	
58	〃	〃	轡	〃	〃	
59	〃	〃	雲珠	〃	〃	
60	〃	〃	馬鈴	〃	〃	
61	〃	皇南里	第1墓槨	轡	〃	P.38
62	〃	〃	第2墓槨	杏葉(心葉形)	〃	P.43
63	〃	月城路古墳群	夕-6号墳	杏葉(心葉形)	報-26	P.415
64	〃	〃	〃	辻金具	〃	〃
65	〃	〃	〃	轡	〃	P.417
66	〃	〃	〃	轡	〃	〃
67	〃	〃	鞍金具	〃	P.418	
68	〃	〃	轡	〃	P.50	
69	〃	陸城洞古墳群 II	カ-1号墳	轡	報-79	P.21
70	〃	〃	2号木槨墓	轡	〃	P.67
71	〃	〃	46号木槨墓	轡	〃	〃
72	〃	路西里	壺杆塚	鞍金具	報-1	図版37・38
73	〃	〃	〃	轡	〃	図版39・40
74	〃	〃	〃	辻金具	〃	図版41
75	〃	〃	〃	馬鈴	〃	図版42
76	〃	〃	〃	杏葉(心葉形)	〃	図版43
77	〃	〃	銀鈴塚	鞍金具	〃	図版52
78	〃	〃	〃	雲珠	〃	〃
79	〃	〃	〃	轡	〃	〃
80	〃	〃	〃	杏葉(魚尾形)	〃	図版53・54
81	〃	〃	〃	轡(鏡板)	〃	〃
82	〃	路東里	四号墳(木棺・本槨)	杏葉	報-63	P.60
83	〃	〃	〃	轡	〃	〃
84	〃	〃	四号墳(副葬槨)	鞍金具	〃	P.94
85	〃	〃	〃	馬鈴	〃	P.95
86	〃	〃	〃	三環鈴	〃	〃
87	〃	〃	〃	轡	〃	〃
88	〃	〃	〃	雲珠	〃	P.96・97
89	〃	〃	〃	杏葉(魚尾形)	〃	P.98・99
90	〃	栗洞1108番地古墳群	10号墳	轡	報-62	P.19
91	〃	〃	〃	轡	〃	〃
92	〃	〃	〃	轡	〃	〃
93	〃	吾琴里古墳群	1-1号石槨	轡	報-81	P.42
94	〃	〃	〃	轡	〃	P.43
95	〃	舍羅里遺跡	130号墓(木槨墓)	轡	報-73	P.50・52
96	釜山市	福泉洞古墳群	10号墳	鏡板(T字文形)	図-4	P.100
97	〃	〃	〃	馬骨	〃	P.103
98	〃	〃	〃	鞍金具	図-10	P.102
99	〃	〃	〃	馬鈴	図-4	P.93
100	〃	〃	15号墳	杏葉(魚尾形)	〃	P.97
101	〃	〃	21号墳	轡	〃	P.94
102	〃	〃	23号墳	轡(丁字形)	図-4	P.102
103	〃	〃	35・36号墳	杏葉(心葉形)	〃	P.96
104	〃	〃	111号墳	轡	図-10	P.102
105	〃	〃	1号墳	杏葉(瓢形)	図-4	P.98
106	〃	〃	〃	轡(内湾楕円形)	〃	P.102
107	〃	〃	〃	轡(内湾楕円形)	〃	P.102
108	〃	蓮山洞	8号墳	杏葉片(剣菱形)	〃	P.97
109	〃	〃	〃	杏葉片(剣菱形)	〃	P.97
110	〃	杜邱洞 林石遺跡	5号墳	轡(心葉形)	報-22	P.44

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ
106	"	"	杏葉(棘葉形)	"	P.45
107	"	"	雲珠	"	"
108	"	"	辻金具	"	"
109	高州市	新興里古墳群	57号土墳墓	轡	報-48 P.175
110	"	"	"	鍔	" P.177
111	"	"	1号石槨墓	轡	" P.235
112	"	"	17号石槨墓	轡	" P.260
113	"	"	28号石槨墓	轡	" P.298
114	"	"	29号石槨墓	轡	" P.301
115	"	"	30号石槨墓	轡	" P.305
116	"	"	17号土墳墓	轡(鏡板)	報-49 P.67
117	"	"	18号土墳墓	轡	" P.73
118	"	"	37号土墳墓	轡	" P.108
119	"	"	"	鍔	" "
120	"	"	38号土墳墓	鍔	" P.118
121	"	"	39号土墳墓	轡	" P.128
122	"	"	"	鍔	" "
123	"	"	"	鞍金具	" P.131
124	"	"	61号土墳墓	轡	" P.178
125	"	"	66号土墳墓	轡	" P.187
126	"	"	9号石槨墓	轡	" P.247
127	"	"	"	鞍金具	" P.249
128	"	"	1号石室墳	轡	報-50 P.26
129	"	"	20号石室墳	轡	" P.33
130	"	"	22号石室墳	轡	" P.36
131	"	"	28号石室墓	轡	" P.41
132	"	"	"	杏葉(心葉形)	" P.42
133	"	"	"	辻金具	" P.43
134	"	"	"	雲珠	" "
135	"	"	"	鞍金具	" "
136	"	"	36号石室墳	轡	" P.52
137	"	"	89号石槨墓	轡	" P.83
138	"	"	108号石室墳	轡	" P.100
139	"	"	111号石室墳	轡	" P.103
140	"	"	124号石槨墓	杏葉(心葉形)	" ?
141	"	新上里古墳群	20号	轡	報-83 P.134
142	梁山市	夫婦塚		金銅装鞍金具	報-30 P.103・105
143	"	"		蛇行状鉄器	" P.107
144	"	"		鍔	" P.110
145	"	"		雲珠	" P.111
146	"	"		轡	" "
147	"	"		杏葉	" "
148	"	"		馬鐙	" P.113
149	昌寧郡	校洞	11号墳	馬鈴	図-1 P.63
150	"	"	"	雲珠	" P.63
151	"	"	"	雲珠2	" P.63
152	"	"	"		" P.64
153	"	"	"	轡	" P.65
154	"	"	"	杏葉(釣鐘形)	図-4 P.98
155	"	"	89号墳	杏葉(心葉形)	" P.96
156	"	"	"	馬鐙	図-1 P.63
157	"	"	"	鞍金具	図-7 P.134
158	"	"	"	鞍金具付属金具	" P.135
159	"	校洞古墳群	第1号	鍔	報-32 P.69
160	"	"	"	杏葉	" P.70
161	"	"	"	三環鈴	" "
162	"	"	第3号	轡	" P.171
163	"	"	"	鍔	" P.173・174
164	"	"	"	杏葉(心葉形・魚尾形)	" P.176
165	"	"	"	雲珠	" "
166	"	桂城里古墳群	桂南1号墳(副槨)	鍔	報-28 P.157

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ
167	"	"	杏葉	"	P.158
168	"	桂南4号墳(主槨)	杏葉(魚尾形)	"	P.212
169	"	桂南4号墳(副槨)	杏葉(魚尾形)	"	P.238
170	"	"	轡	"	P.239
171	"	"	雲珠	"	"
172	"	桂城古墳群 第1号墳(第2棺)	杏葉(心葉形)	報-7	P.74
173	"	"	轡	"	"
174	"	第3号墳	馬鈴	"	P.371
175	慶山市	林堂洞・造永洞 7B号墳	杏葉(魚尾形)	"	P.97
176	"	北四里古墳群 1号墳	雲珠	報-29	P.60
177	"	2号墳	轡	"	P.88
178	"	3号墳(主槨)	轡	"	P.112
179	"	3号墳(副槨)	杏葉	"	P.132
180	"	"	鞍金具	"	P.134
181	"	林堂洞遺跡 G-6号	杏葉	報-71	P.177
182	"	"	轡	"	"
183	"	"	轡(鏡板)	"	"
184	"	G-3号	轡	報-72	P.111
185	"	林堂地域古墳群 造永EⅢ-8号墳(副槨)	轡	報-37	P.151
186	"	"	杏葉	"	"
187	"	造永1B地域	鏡	報-46	P.312
188	"	造永CⅠ-1(副槨)	杏葉	報-60	P.131
189	"	"	鞍金具	"	P.133・134
190	"	"	轡	"	P.136
191	"	"	雲珠	"	P.139
192	"	"	三環鈴	"	"
193	"	造永CⅠ-2(副槨)	鞍金具	"	P.197
194	"	"	杏葉(心葉形)	"	"
195	"	"	轡	"	P.200
196	"	"	辻金具	"	"
197	"	造永CⅡ-1(副槨)	杏葉(心葉形)	"	P.300
198	"	"	轡	"	"
199	"	造永CⅡ-2(副槨)	鏡	"	P.407
200	"	"	杏葉	"	"
201	"	"	鞍金具	"	"
202	"	"	鞍金具	"	P.408
203	"	"	轡	"	P.411
204	"	造永EⅠ-1号墳(副槨)	轡	報-61	P.177
205	"	"	鞍金具	"	P.180・181
206	"	"	座木先金具	"	"
207	"	"	杏葉(魚尾形)	"	"
208	"	"	鏡	"	P.184
209	"	"	雲珠	"	"
210	"	造永EⅠ-2号墳(副槨)	轡	"	P.227・229
211	"	"	杏葉	"	"
212	"	"	雲珠	"	"
213	"	"	鏡	"	P.231
214	"	林堂2号墳(北副槨)	鏡	報-77	P.153
215	"	"	杏葉	"	"
216	"	"	鏡	"	P.154
217	"	"	鞍金具	"	P.155
218	"	"	鏡	"	P.157
219	"	"	杏葉(心葉形・魚尾形)	"	P.157・158
220	"	"	雲珠	"	P.159
221	"	"	辻金具	"	P.160
222	"	林堂5B-1号墳(副槨)	轡	報-82	P.111
223	"	"	杏葉	"	P.112
224	"	"	辻金具	"	"
225	"	"	鞍金具	"	P.113・114
226	"	林堂5C-1号墳	雲珠	"	P.180
227	"	"	辻金具	"	"

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ	
228	"	"	轡	"	"	
229	"	"	鏡	"	P.181	
230	大邱市	遠城古墳群	4号石槨墓	報-77	P.356	
231	"	"	5号石槨墓	"	P.364	
232	"	"	杏葉	"	"	
233	"	内唐洞	55号墳	図-1	P.97	
234	"	"	雲珠10	"	P.97	
235	"	"	杏葉10	"	P.98	
236	"	飛山洞	37号墳	杏葉3	"	P.98
237	"	"	鏡	"	P.98	
238	"	花園 城山里	1号墳(副槨)	報-84	P.105	
239	"	"	轡	"	"	
240	"	"	辻金具	"	"	
241	"	"	雲珠	"	"	
242	"	"	杏葉	"	"	
243	"	"	1号墳(5槨)	轡(鏡板)	"	P.162
244	"	"	杏葉	"	"	
245	"	"	雲珠	"	"	
246	"	"	辻金具	"	"	
247	"	時至	I C-15号墳	鏡	報-55	P.195
248	"	"	I C-21号墳	轡	"	P.223
249	"	"	I C-27号墳	轡	"	P.237
250	"	"	I D-58号墳	轡	報-56	P.316
251	"	"	I D-66号墳	轡	"	P.338
252	"	"	I D-58号墳	轡	報-57	P.315
253	"	"	I D-264号墳	杏葉(心葉形)	報-58	P.293
254	"	"	I D-268号墳	轡	"	P.300
255	"	"	I D-301号墳	鏡	"	P.384
256	"	"	II-W-20号墳	轡	報-59	P.289
257	"	旭水洞古墳群	カ8号	辻金具	報-76	P.63
258	"	"	"	轡	"	P.64
259	"	"	"	鏡	"	"
260	"	"	カ9号	雲珠	"	P.76
261	星州郡	星山洞	38号墳(第2槨)	杏葉7(魚尾形)	図-3	PL. 22
262	"	"	"	轡	"	伽耶P.149 315
263	"	"	39号墳(副槨)	杏葉4(心葉形)	"	PL. 31
264	"	"	"	轡	"	"
265	"	"	57号墳(副槨)	杏葉	"	PL. 34
266	"	"	58号墳(副槨)	杏葉3(心葉形)	"	PL. 42
267	漆谷郡	鳩岩洞	第56号墳(主槨)	轡	報-8	P.58
268	"	"	第56号墳(副槨)	杏葉	"	P.72
269	"	"	北墳(副槨)	杏葉	"	P.88
270	"	"	"	辻金具	"	"
271	義城郡	鶴尾里古墳	3号墳	轡	報-80	P.88
272	"	"	"	鏡(輪・壺)	"	P.90・92
273	"	"	"	障泥連結具	"	P.94・95
274	"	"	"	辻金具	"	"
275	安東市	造塔里古墳群	2-1号墳	鏡板	報-33	P.309
276	"	"	"	轡	"	"
277	"	"	3-2号墳	鏡	"	P.346
278	"	"	"	杏葉	"	P.347
279	"	"	"	辻金具	"	"
280	"	"	1-1号墳	轡	報-43	P.16
281	"	"	3-1号墳	轡	"	P.23
282	"	"	"	辻金具	"	"
283	"	"	"	鏡	"	P.24
284	"	"	"	雲珠	"	P.25
285	"	"	3-3号墳	辻金具	"	"
286	"	"	5-1号墳	鏡	"	P.26
287	"	"	24号墳	鏡	"	P.73
288	金海市	大成洞古墳群	1号墓(主)	馬冑	報-67	

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ	
289	"	"	金銅馬具(鞍橋)2	"	P.195~197	
290	"	"	杏葉2	"	P.23	
291	"	"	鍔2	"	P.23	
292	"	2号墓	轡3(×字文円形等)	"	P.28	
293	"	3号墓(主)	杏葉	"	P.32	
294	"	8号墓	杏葉2	"		
295	"	"	鞍橋	"		
296	"	11号墓	轡	"	P.38	
297	"	14号墓	轡	"		
298	"	20号墓	轡(×字文円形)	"	P.76	
299	"	"	鍔2	"		
300	"	24号墓	鍔	"		
301	"	39号墓(副)	轡	"	P.58	
302	"	41号墓	轡	"		
303	"	42号墓	轡	"		
304	"	ツウコク	8号墳	馬冑	図-9	P.110
305	"	"	轡	"	"	
306	"	良洞里	第196号	轡	報-65	P.188・189
307	"	"	第229号	轡	"	"
308	"	"	第321号	轡	"	"
309	"	"	第429号	鍔	"	"
310	"	"	第162号	轡	"	"
311	"	"	第78号	轡	"	"
312	"	禮安里古墳群	39号墳	轡(鏡板)	報-15	P.67
313	"	"	"	銅鈴	"	P.68
314	"	"	57号墳	轡	"	P.100
315	昌原市	道溪洞	19号墳	轡	図-4	P.99
316	"	茶戸里	B42号	轡	報-75	図版144
317	"	"	B1号墓祭祀遺構1号	前輪	"	図版63
318	"	"	"	後輪	"	図版62
319	"	"	"	杏葉	"	図版64
320	"	"	"	杏葉片	"	図版64
321	"	"	"	辻金具	"	図版65
322	"	"	1号墳	馬鐙	図-4	P.24
323	"	"	"	轡	図-7	P.40
324	馬山市	縣洞遺跡	43号墳	轡(鏡板)	報-25	P.149
325	國城郡	ネサンリ	34号墳	鍔	図-9	P.96
326	"	栗袋里	2号墳	鍔	報-27	P.33
327	"	"	"	轡	"	"
328	宜寧郡	景山里古墳群	2号墳	轡	報-86	P.40
329	"	"	"	鍔	"	P.41
330	"	"	"	雲珠	"	P.42
331	"	"	"	辻金具	"	P.43
332	"	"	37号墳	轡	"	P.142
333	晋州市	縣洞	43号土墳墓	鏡板(円形)	"	P.100
334	"	加佐洞古墳群	1号墳	轡(円環)	報-19	P.28
335	"	中安洞		杏葉	図-4	P.96
336	南原市	月山里	M1-A号墳	轡(内湾楕円形)	"	P.70
337	"	"	"	輪鍔	"	P.70
338	咸安郡	道項里古墳群	3号墳	轡	図-7	P.86
339	"	"	3・4号墳	杏葉	図-9	P.91
340	"	"	22号墳	鍔	"	P.90
341	"	"	22号墳	轡	"	P.91
342	"	"	39号墳	辻金具等	"	P.91
343	"	"	?	鍔	図-4	P.95
344	"	"	10号墳	轡(十字鏡板)	報-45	P.84
345	"	"	36号墳	轡(十字鏡板)	報-53	P.102
346	"	"	38号墳	鞍金具	"	P.129・130
347	"	"	"	轡	"	"
348	"	"	"	鍔	"	"
349	"	"	39号墳	鞍金具	"	P.141

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ
350	"	"	鏡	"	"
351	"	"	雲珠	"	"
352	"	道項里 末山里遺跡	3号墳	杏葉	報-64 P.14
353	"	"	"	轡	" P.23
354	"	"	"	鏡	" P.45
355	"	"	"	轡	" P.133
356	"	末山里	34号墳	杏葉(心葉形)	図-4 P.96
357	"	馬甲塚	"	馬甲	報-78 P.44・45
358	"	"	"	馬甲(小札片)	" P.47
359	"	"	"	馬冑	" P.48
360	"	"	"	轡	" P.54
361	"	"	1号石槨墓	鏡	" P.75
362	"	"	"	雲珠	" "
363	"	岩刻畫古墳	"	鏡	報-42 P.51
364	"	"	"	雲珠	" "
365	"	"	"	轡(鏡板)	" P.53
366	咸陽郡	上栢里古墳	"	三環鈴	報-4 No.8
367	"	"	"	雲珠	" "
368	"	"	"	杏葉(心葉形)	" "
369	"	"	"	蛇行状鉄器	" No.9
370	"	白川里	1号墳	鞍金具	報-16 P.49
371	"	"	"	鏡	" "
372	"	"	"	轡(鏡板)	" "
373	高靈郡	池山洞古墳群	30号墳	杏葉	報-47 P.73
374	"	"	"	鏡	" "
375	"	"	"	辻金具	" P.77
376	"	"	"	雲珠	" P.75
377	"	"	35号墳	馬具	図-1
378	"	"	32号墳	馬具	"
379	"	"	"	馬鈴	図-4 P.93
380	"	"	"	轡(f字形鏡)	" P.99
381	"	"	44号墳(主石室)	轡(内湾楕円形)	報-9 P.20
382	"	"	"	杏葉(鈴付劍菱形)	" "
383	"	"	"	鏡	" "
384	"	"	"	鞍金具	" "
385	"	"	44号墳(25号石槨)	轡(鏡板)	" P.87
386	"	"	"	鏡	" "
387	"	"	"	馬鈴	" "
388	"	"	45号墳	輪鏡	" P.220
389	"	"	"	轡(鏡板)	" "
390	"	"	"	鞍金具	" "
391	"	"	"	雲珠	" P.223
392	"	"	"	杏葉(心葉形)	" "
393	"	"	"	辻金具	" "
394	"	"	10号墳	轡	報-69 P.103
395	"	"	"	辻金具	" P.106
396	"	"	"	鏡	" "
397	"	"	2号墳	鉄鐸	" P.20
398	"	"	"	鈴	" P.22
399	"	"	"	馬鐸	" "
400	"	本館洞古墳群	36号墳	轡	報-41 PL. 51
401	"	仁同	1号墳	雲珠	報-3 図版8・9
402	"	"	"	杏葉	" "
403	"	"	"	鏡	" "
404	"	不老洞	乙号墳	杏葉	" 図版28
405	"	"	"	轡	" "
406	陝川郡	玉田古墳群	M3号墳	鏡板(内湾楕円形)	報-21 P.107~109
407	"	"	"	鏡板(f字形)	" "
408	"	"	"	蛇行状鉄器	" P.113・121
409	"	"	"	轡	" P.107~109
410	"	"	"	金銅製鞍金具	" P.56

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ
411	"	"	鞍	"	P.56
412	"	"	馬鈴	"	P.117・119
413	"	"	鐙	"	P.99・103
414	"	"	杏葉(剣菱形)	"	P.115
415	"	"	馬冑A	"	P.99
416	"	"	馬冑B	"	P.100
417	"	"	鞍金具	"	P.103
418	"	"	雲珠	"	P.117
419	"	"	辻金具	"	P.117・123・124
420	"	M1号墳	馬冑	報-31	P.84
421	"	"	馬甲	"	P.86~89
422	"	"	杏葉(魚尾形)	"	P.98
423	"	"	鞍金具	"	P.91
424	"	"	鐙	"	P.93・94
425	"	"	轡	"	P.96
426	"	"	雲珠	"	P.100・102
427	"	"	辻金具	"	"
428	"	M2号墳	鐙	"	P.146
429	"	"	轡(鏡板)	"	"
430	"	"	杏葉(魚尾形)	"	P.147
431	"	72号墳	轡(鏡板)	"	P.175
432	"	82号墳	鐙	"	P.194
433	"	"	轡(鏡板)	"	"
434	"	M4号墳	杏葉(心葉形)	報-34	P.39
435	"	"	雲珠	"	"
436	"	"	辻金具	"	"
437	"	M6号墳	鞍金具	"	P.91
438	"	"	轡	"	"
439	"	"	杏葉(心葉形)	"	P.99
440	"	"	雲珠	"	P.101
441	"	"	辻金具	"	"
442	"	M7号墳	鐙	"	P.122
443	"	85号墳	轡	"	P.153
444	"	8号墳	鐙	報-18	P.23
445	"	"	轡	"	P.25
446	"	42号墓	轡	"	P.137
447	"	"	鞍金具	"	P.141
448	"	70号墳	雲珠	"	P.239
449	"	"	辻金具	"	"
450	"	"	轡	"	P.243
451	"	"	鐙	"	"
452	"	"	鞍金具	"	P.249・250
453	"	M11号墳	雲珠	報-39	P.34
454	"	"	鞍金具	"	"
455	"	"	障泥連結具	"	"
456	"	68号墳	鞍金具	"	P.53
457	"	"	鐙	"	P.54
458	"	"	轡	"	"
459	"	"	雲珠	"	P.56
460	"	23号墳	馬冑	報-44	P.63
461	"	"	鞍金具	"	P.66
462	"	"	杏葉	"	"
463	"	"	鐙	"	"
464	"	"	轡	"	P.69
465	"	28号墳	馬冑	"	P.135
466	"	"	馬甲	"	P.137~144
467	"	"	鞍金具	"	P.146
468	"	"	鐙	"	P.147
469	"	"	轡	"	P.149
470	"	12号墳	鞍装	報-51	P.17
471	"	"	雲珠	"	P.17

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ
472	"	"	轡	"	P.19
473	"	"	杏葉5	"	P.19
474	"	20号墳	馬甲	"	P.54~
475	"	"	鍔	"	P.67
476	"	"	轡	"	P.70
477	"	24号墳	鍔	"	P.103
478	"	"	轡	"	P.103
479	"	"	雲珠附属品	"	P.103
480	"	5号墳	鍔	報-52	P.33
481	"	7号墳	轡	"	P.54
482	"	35号墳	轡	"	P.108
483	"	"	鞍装	"	P.108
484	"	"	杏葉3	"	P.108
485	"	"	鍔	"	P.109
486	"	"	馬冑	"	P.115
487	"	"	雲珠	"	P.119
488	"	67-A号墳	鞍装	報-66	P.17
489	"	"	鍔	"	P.19
490	"	"	轡	"	P.23
491	"	67-B号墳	轡	"	P.47
492	"	"	鍔	"	P.47
493	"	"	雲珠	"	P.47
494	"	74号墳	鞍装	"	P.72
495	"	"	鍔	"	P.72
496	"	"	雲珠	"	P.72
497	"	75号墳	鍔	"	P.92
498	"	76号墳	轡	"	P.118
499	"	"	鍔	"	P.118
500	"	91号墳	轡	報-85	P.31
501	"	"	杏葉	"	P.31
502	"	"	鍔	"	P.33
503	"	"	轡	"	P.79
504	"	"	雲珠	"	P.79
505	"	"	鍔	"	P.81
506	"	磯浜堤 夕A号墳	壺鍔	報-17	P.210
507	"	"	轡(鍔板)	"	"
508	"	"	辻金具	"	"
509	"	"	蛇行状鉄器	"	P.211
510	"	カA号墳	馬鈴(人面文)2	"	P.58
511	"	"	鞍金具	"	P.61
512	"	"	轡(鍔板)	"	"
513	"	"	鍔	"	P.62
514	"	"	雲珠	"	"
515	"	"	杏葉	"	P.62・63
516	清州市	新鳳洞 3号土墳墓	轡	報-12	図面13
517	"	"	鍔	"	"
518	"	5号土墳墓	轡	"	図面19
519	"	6号土墳墓	轡	"	図面23
520	"	"	鍔	"	"
521	"	7号土墳墓	轡	"	図面26
522	"	"	鍔	"	図面27
523	"	8号土墳墓	轡	"	図面29
524	"	"	鍔	"	"
525	"	12・13・14号土墳墓	鍔	"	図面38
526	"	"	轡	"	図面39
527	"	4号墳	轡	報-24	P.54
528	"	"	鍔	"	P.55
529	"	54号墳	轡	報-40	P.129
530	"	60号墳	鍔	"	P.140
531	"	"	轡	"	P.141
532	"	66号墳	轡	"	P.153

番号	出土地	出土古墳	出土馬具類	報告書・図録番号	ページ	
533	"	"	71号墳	轡	"	P.161
534	"	"	72号墳	轡	"	P.164
535	"	"	74号墳	轡	"	P.169
536	"	"	80号墳	轡	"	P.184
537	"	"	"	鍔	"	P.186
538	"	"	83号墳	杏葉	"	P.194
539	"	"	"	轡(鏡板)	"	"
540	"	"	"	鍔	"	P.195
541	"	"	91号墳	轡	"	P.212
542	"	"	93号墳	鍔	"	P.217
543	"	"	94号墳	轡	"	P.225
544	"	"	97-1号墳	鍔	"	P.232
545	"	"	"	轡	"	"
546	"	"	98号墳	鍔	"	P.237
547	"	"	"	轡	"	"
548	"	ボンミョン洞		轡	図-11	P.61
549	清原郡	主城里		鍔	"	P.47
550	"	梧倉遺跡	7-1号土墳墓	轡	報-54	P.93
551	"	"	30号土墳墓	轡	"	P.203
552	"	"	31号土墳墓	馬鐔	"	P.209
553	"	"	50号土墳墓	轡	"	P.324
554	"	ソントリ		馬鐔	図-11	P.41
555	天安市	龍院里	1号石塚墓	鞍金具	報-68	P.56
556	"	"	"	鍔	"	"
557	"	"	"	杏葉	"	P.57
558	"	"	9号石塚墓	轡	"	P.109
559	"	"	"	鍔	"	"
560	"	"	12号石塚墓	轡	"	P.126
561	"	"	"	鍔	"	"
562	"	"	72号土墳墓	轡	"	P.310
563	"	"	108号土墳墓	轡	"	P.400
564	"	"	"	轡(鏡板)	"	"
565	公州市	宋山里		鏡板(f字形)	図-8	P.137
566	"	"	"	轡	"	"
567	大田市	ウオルピョン洞		木製鞍橋	図-12	P.77
568	諭山市	茅村里	4号墳	轡	報-36	P.130
569	"	"	5号墳	轡	"	P.143・144
570	"	"	"	鞍金具	"	"
571	"	"	14号墳	轡	"	P.178
572	益山市	笠店里	1号墳	轡(鏡板)	報-20	P.32
573	"	"	"	鍔	"	P.33
574	"	"	"	鞍金具	"	P.35
575	"	"	"	杏葉(銀製)	"	P.36
576	扶安郡	竹幕洞		杏葉(剣菱形)	報-38	P.177・P.181
577	"	"		鞍金具片(亀甲透彫)	"	"
578	"	"		鈴	"	"
579	"	"		馬鐔	"	"
580	羅州市	伏岩里		鍔	報-74	P.193
581	"	"		轡	"	P.189
582	"	"		杏葉	"	P.190
583	"	"		辻金具	"	P.192
586	海南郡	月松里 造山古墳		鏡板(f字形)	報-13	P.30
587	"	"		杏葉	"	P.29
588	"	"		鈴	"	P.32
589	"	"		鍔	"	"
590	咸平郡	新徳		雲珠	図-8	P.100
591	"	"		辻金具	"	P.100
592	"	"		轡	"	P.101
593	長城郡	マンム里		三環鈴	図-8	P.92
594	原州市	法泉里		轡	図-8	P.47

表2 報告書一覽表

番号	報告書名	書名	刊行年	発行所	所名
1	1946年発掘調査 慶州路西里 董杆塚と銀鈴塚	国立博物館古蹟調査報告	1948	乙酉文化社版	
2	皇吾里四・五号古墳 皇南里破城古墳 発掘調査報告	国立博物館古蹟調査報告	1954		
3	仁同・不老洞・高靈古衙 古墳 発掘調査報告	慶北大学校博物館叢刊	1966		慶北大学校博物館
4	咸陽 上栢里古墳群 発掘調査報告	1972年度古蹟調査報告	1973		東亜大学校博物館
5	天馬塚 皇南洞98号古墳 発掘報告		1973		文化公報部・文化財管理局
6	天馬塚 発掘調査報告書		1974		文化公報部・文化財管理局
7	昌寧 桂城古墳群 発掘調査報告	古蹟調査報告	1977		慶尚南道
8	鳩岩洞古墳 発掘調査報告		1978		嶺南大学校博物館
9	大加那古墳 発掘調査報告書 (池山洞44・45古墳)		1979		高靈郡
10	慶州地区 古墳 発掘調査報告書		1980		文化財管理局・慶州史蹟管理事務所
11	東萊 福泉洞古墳群 I	釜山大学校博物館遺跡調査報告	1982		釜山大学校博物館
12	清州 新鳳洞百濟古墳群 発掘調査報告書 1982年度調査	忠北大学校博物館調査報告	1983		忠北大学校博物館
13	海州 月松里 造山古墳	国立光州博物館学術叢書	1984		国立光州博物館・百濟文化開発研究院
14	コチャマンフル里古墳	国立博物館古蹟調査報告	1985		国立中央博物館
15	金海 禮安里古墳群 I	釜山大学校博物館遺跡調査報告	1985		釜山大学校博物館
16	咸陽 白川里1号墳	釜山大学校博物館遺跡調査報告	1986		釜山大学校博物館
17	陝川 陸溪堤古墳群	陝川 水没地区発掘調査報告	1987		慶尚南道・国立晋州博物館
18	陝川 加佐洞古墳群 I 木槨墓	慶尚大学校博物館調査報告	1988		慶尚大学校博物館
19	晋州 玉田古墳群 I 1~4号墳	慶尚大学校博物館調査報告	1989		慶尚大学校博物館
20	益山 笠店里古墳 発掘調査報告書		1989		
21	陝川 玉田古墳群 II	慶尚大学校博物館調査報告	1990		慶尚大学校博物館
22	釜山 杜邱洞 林石遺蹟	釜山直轄市立博物館 調査報告書	1990		釜山直轄市立博物館
23	東萊 福泉洞古墳群 II	釜山大学校博物館遺跡調査報告	1990		釜山大学校博物館
24	清州 新鳳洞百濟古墳群 発掘調査報告書 1990年度調査	忠北大学校博物館調査報告	1990		忠北大学校博物館
25	馬山 縣洞遺蹟	昌原大学校博物館学術調査報告	1990		昌原大学校博物館
26	慶州市 月城路古墳群	国立慶州博物館・慶北大学校博物館・慶州市	1990		国立慶州博物館・慶北大学校博物館・慶州市
27	固城 栗袋里 2号墳	国立晋州博物館・固城郡	1990		国立晋州博物館・固城郡
28	昌寧 桂城里古墳群 - 柱南1・4号墳	国立晋州博物館 学術調査報告	1991		嶺南大学校博物館
29	慶山 北四里古墳群	学術調査報告	1991		嶺南大学校博物館
30	梁山 金鳥塚・夫婦塚	学術調査報告	1991		東亜大学校博物館
31	陝川 玉田古墳群 III	慶尚大学校博物館調査報告	1992		慶尚大学校博物館
32	昌寧 校洞古墳群	東亜大学校博物館 古蹟調査報告	1992		東亜大学校博物館
33	安東 造塔里古墳群 (92)	文化遺産発掘調査報告書(軍威-安東間)	1992		慶北大学校博物館・慶南大学校博物館・大邱教育大学校博物館
34	陝川 玉田古墳群 IV	慶尚大学校博物館調査報告	1993		慶尚大学校博物館
35	皇南大塚		1993		文化財管理局文化財研究所
36	論山 茅村里 百濟古墳群 発掘調査報告書 (II)	学術調査報告	1994		財団法人百濟文化開発研究院・公州大学校博物館
37	慶山 林堂地域古墳群 II 造永E III - 8号墳外	国立全州博物館学術調査報告	1994		嶺南大学校博物館・韓國土地開発公社慶北支社
38	扶安 竹幕洞 祭祀遺跡	国立全州博物館学術調査報告	1994		国立全州博物館
39	陝川 玉田古墳群 V	慶尚大学校博物館研究叢書	1995		慶尚大学校博物館
40	清州 新鳳洞古墳群	忠北大学校博物館調査報告	1995		忠北大学校博物館
41	高靈 本館洞古墳群	学術調査報告	1995		啓明大学校博物館
42	咸安 岩刻畫古墳	学術調査報告	1996		昌原文化財研究所
43	安東 造塔里古墳群 II (94)	慶北大学校博物館 叢書	1996		慶北大学校博物館
44	陝川 玉田古墳群 VI	慶尚大学校博物館研究叢書	1997		慶尚大学校博物館
45	咸安 道項里古墳群 I	学術調査報告	1997		昌原文化財研究所
46	慶山 林堂地域古墳群 III 造永I B地区	学術調査報告	1998		嶺南大学校博物館・韓國土地公社

番号	報告	書名	発行年	発行所	名
47	高霊 池山洞30号墳	嶺南埋蔵文化財研究院 学術調査報告	1998	社団法人嶺南埋蔵文化財研究社・高霊郡	第13冊
48	高州 新興里古墳群 (I)	学術調査報告	1998	韓国文化財保護財団・釜山地方国土管理庁	第7冊
49	高州 新興里古墳群 (II)	学術調査報告	1998	韓国文化財保護財団・釜山地方国土管理庁	第7冊
50	高州 新興里古墳群 (V)	学術調査報告	1998	韓国文化財保護財団・釜山地方国土管理庁	第7冊
51	陝川 玉田古墳群 VII	慶尚大校博物館研究叢書	1998	慶尚大校博物館	第19輯
52	陝川 玉田古墳群 VIII	慶尚大校博物館研究叢書	1999	慶尚大校博物館	第21輯
53	咸安 道項里古墳群 II	学術調査報告	1999	昌原文化財研究所	
54	清原 梧倉遺蹟 (I) ~ (III)	学術調査報告	1999	韓国文化財保護財団・韓国土地公社	第23冊
55	時至の文化遺蹟 III	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館・大邱広域市都市開発公社	第28冊
56	時至の文化遺蹟 IV	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館・大邱広域市都市開発公社	第29冊
57	時至の文化遺蹟 V	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館・大邱広域市都市開発公社	第30冊
58	時至の文化遺蹟 VI	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館・大邱広域市都市開発公社	第31冊
59	時至の文化遺蹟 VII	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館・大邱広域市都市開発公社	第32冊
60	慶山 林堂地域古墳群 IV 造永C1・II号墳	学術調査報告	1999	嶺南大校博物館	第25冊
61	慶山 林堂地域古墳群 V 造永E1-1号墳	学術調査報告	2000	嶺南大校博物館	第35冊
62	慶州市 栗洞1108番地 古墳群発掘調査報告書	学術調査報告	2000	韓国文化財保護財団・慶州市	第57冊
63	慶州 路東里四号墳	日帝強占期資料調査報告	2000	国立中央博物館	1
64	道項里 末山里遺跡	東義大校博物館学術叢書	2000	社団法人慶南考古学研究所・咸安郡	
65	金海 良湖里古墳文化	慶尚大校博物館研究叢書	2000	東義大校博物館	7
66	陝川 玉田古墳群 IX	慶尚大校博物館研究叢書	2000	慶尚大校博物館	第23輯
67	金海 大成洞古墳群 I	慶里大校博物館研究叢書	2000	慶里大校博物館	第4輯
68	龍院里古墳群	公州大校博物館学術叢書	2000	公州大校博物館・天安温泉開発・高麗開発	00-03
69	高霊 池山洞古墳群 (大加耶歴史館新築敷地内)	学術調査報告	2000	慶尚北道文化財研究院・高霊郡	第6冊
70	鳳山 義洞里 土専室墓	日帝強占期資料調査報告	2001	国立中央博物館	2
71	慶山 林堂洞遺跡 II G地区5・6号墳	嶺南埋蔵文化財研究院 学術調査報告	2001	財団法人嶺南埋蔵文化財研究社	第34冊
72	慶山 林堂洞遺跡 III G地区	嶺南埋蔵文化財研究院 学術調査報告	2001	財団法人嶺南埋蔵文化財研究社	第35冊
73	慶州 舍羅里遺跡 II	嶺南埋蔵文化財研究院 学術調査報告	2001	財団法人嶺南埋蔵文化財研究社	第32冊
74	羅州 伏岩里3号墳 発掘調査報告書	国立博物館古蹟調査報告	2001	国立文化財研究所・全南大校博物館・羅州市	
75	昌原 茶戸里遺蹟	国立博物館古蹟調査報告	2001	国立中央博物館・慶尚南道	第32冊
76	大邱 旭水洞 古墳群	学術調査報告	2002	嶺南大校博物館	第40冊
77	慶山 林堂地域古墳群 VI 林堂2号墳	学術調査報告	2002	嶺南大校博物館	第42冊
78	咸安馬甲塚	国立慶州博物館 学術調査報告	2002	国立昌原文化財研究所・咸安郡	第15輯
79	慶州 陸城洞古墳群 II-513・545番地	義城召文国部邑地古墳群発掘調査報告書	2002	国立慶州博物館	第14冊
80	鶴尾里古墳	発掘調査報告	2002	慶北大校博物館・義城郡	1
81	慶州市 吾琴里古墳群	学術調査報告	2002	中央文化財研究院・慶州市	第14冊
82	慶山 林堂地域古墳群 VII 林堂5・6号墳	学術調査報告	2003	嶺南大校博物館	第40冊
83	高州 新上里 古墳群 I・II	慶南埋蔵文化財研究院・釜山地方国土管理庁	2003	慶南埋蔵文化財研究院・釜山地方国土管理庁	第30冊
84	大邱 花園 城山里1号墳	慶北大校博物館学術叢書	2003	慶北大校博物館	29
85	陝川 玉田古墳群 X	慶尚大校博物館研究叢書	2003	慶尚大校博物館	第26輯
86	宜寧 敬山里古墳群	慶尚大校博物館研究叢書	2004	慶尚大校博物館	第28輯

表3 図録一覧表

番号	図録名	発行年	発行所	名
1	国立晋州博物館 (図録)	1984	国立晋州博物館	
2	国立慶州博物館 (図録)	1988	国立慶州博物館	
3	星州望山洞古墳 (特別展図録)	1988	啓明大学校博物館	
4	よみがえりる古代王国 伽耶文化展	1992	東京国立博物館・朝日新聞社	
5	新羅陵墓の形成と展開	1996	国立慶州博物館	
6	榮山江の古代文化	1998	国立光州博物館	
7	国立金海博物館 (図録)	1999	国立金海博物館	
8	百濟 (特別展図録)	1999	国立中央博物館	
9	先史の伽耶 (特別展図録)	2000	国立金海博物館・釜山広域市立破物館福泉分館	
10	福泉博物館 (図録)	2001	福泉博物館	
11	国立清州博物館 (図録)	2001	国立清州博物館	
12	錫江 (特別展図録)	2002	国立公州博物館	

表4 参考文献一覧表

番号	図録名	発行年	発行所	名
1	李蘭暎・金斗喆	1999	韓國馬事会馬事博物館	
2	姜裕信	1999	學研文化社	

表5 その他、今回確認できなかった馬具出土古墳等の報告書名

番号	図録名	発行年	発行所	名
1	朝鮮古蹟図譜	1916		第3冊
2	慶州金冠塚と基遺寶	1924		第3冊
3	慶高北道連城郡達西面古墳調査報告	1931		第1冊
4	慶州の金冠塚	1932		第1冊
5	慶州金鈴塚跡原塚発掘調査報告	1932		第1冊
6	古蹟調査概報 慶州古墳昭和8年	1934		第1冊
7	慶州皇南里第82号墳・83号墳調査報告	1935		第1冊
8	慶州皇南里第109号墳・皇南里14号墳調査報告	1937		第1冊
9	昭和11年度古蹟調査報告	1937		
10	大邱府付近に於ける古墳の調査	1940		第2冊
11	慶州路西里雙味塚・馬塚・138号墳調査報告	1955		
12	若木古墳調査報告一 大鏡塚発掘	1961	慶北大学校博物館	
13	義城塔里古墳	1962		第3冊
14	造塔洞古墳発掘調査報告	1962	梨花女子大学校博物館	
15	慶州皇南里第1・33号 皇南里第151号古墳発掘調査報告	1969		第2冊
16	東萊福泉洞第1号古墳発掘調査報告	1971		
17	慶州 仁旺洞19・20号 古墳発掘 調査報告	1974	慶熙大学校博物館	
18	皇南洞古墳発掘調査概報	1975	嶺南大学校博物館	
19	慶州地区古墳発掘調査報告書	1975		第1冊
20	安溪里古墳群発掘調査報告書	1981		
21	高靈池山洞古墳群	1981	啓明大学校博物館	
22	山清中村里古墳発掘概報	1983		10
23	南原 月山里古墳群発掘調査報告	1983	圓光大学校 馬韓百濟文化研究所	
24	上老 大島	1984		
25	皇南大塚北墳発掘調査報告書	1985		
26	陝川鳳溪里古墳群	1986	東亜大学校博物館	
27	昌原 道溪洞古墳群 I	1987	昌原大学校博物館	
28	南原斗洛里発掘調査報告書	1989		
29	東萊福泉洞53号墳	1992		
30	咸安阿羅加郎の古墳群(1)一 道項里・末山里精審調査報告	1992	昌原大学校博物館	
31	固城 連塘里古墳群	1994	慶南大学校博物館	
32	宜寧 中洞里古墳群	1994	慶南大学校博物館	
33	慶州皇南洞106-3番地古墳群発掘調査報告書	1995		12

## 「大足（おおあし）」について（資料とその周辺）

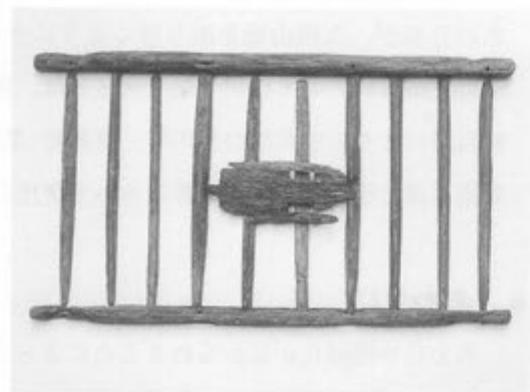
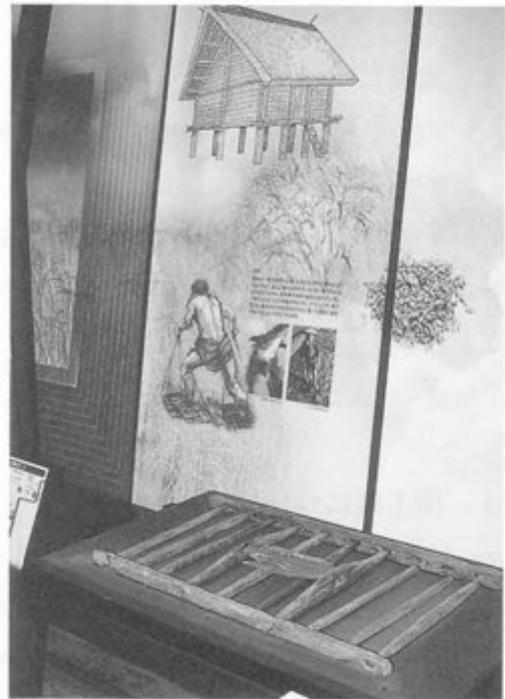
出土地：宮崎市前田遺跡 年代：古墳時代後期

地村 光広

### 1 はじめに

本資料は、宮崎県立西都原考古博物館展示室「古墳文化の終焉」コーナーに展示してある。

土器・石器・金属器の資料が大部分を占めるなかで数少ない木製の資料の一つである。大足は、農耕用具（稲作用具）のなかの施肥用具であり、稲作の生産過程の中で重要な役割を果たす道具である。良い作物を実らせるためには、良い土作りが不可欠であると言われるように、肥料の管理は、水の管理と同様に重要な作業である。化学肥料が、広くまた大量に用いられるようになるのは、長い稲作の歴史のなかでは比較的新しい時期になってからであり、それ以前は水田の近くに生えている若草や若木・若芽等を刈り取り緑肥として用いていた。化学肥料が普及する以前の昭和時代の初めまで行われていた。地域により、カシキ・カリシキと呼ばれ、若木の刈り取りの際使用したカシキギリ等の作業に用いた道具にも、その名前のついているものがみられる。カリシキの光景は機械化と施肥の方法の変化によって、現在みることができなくなった。高原町の狭野神社では、毎年豊作を祈願して、「ベブガハホ」の祭りが奉納されるが、そのなかにカリシキの所作がみられ、これは、稲作での施肥の重要性を印象づけるものがある。



宮崎市前田遺跡出土「大足」

### 2 使用法について

本資料は、田植え前の水田に投げ入れられた緑肥を土深くしきこむために、大足の先端部に固定されたそれぞれのひもを手に取り、左右の足を交互に踏み込んで使用する。本県で、かつて使用された同様の道具は「田下駄」とも呼ばれている。広義には、田下駄は湿田や深田での作業効率をあげるために用いられているものであり、特に施肥の目的として用いられるものは、「大足」と呼ばれる。

### 3 形状について

本資料は、縦84.8cm、横47.3cmと比較的大きなもので、本来は1対で用いるが、調査の際片方のみ出土している。箱形のものや梯子状のものなどがあるが、本資料は梯子状をしており、栈木を10本わたしてある。県総合博物館には、民俗資料として田下駄が10点余り収蔵されているが、全体として、本資料よりはやや小型である。

### 4 素材について

下駄部はアカガシ、枠や栈部はコウヤマキが用いてある。アカガシは農耕用具や山樵用具の中で強度や耐久性を求められる道具として、例えば奥山から伐採した木材を搬出する際の「キンマ」という運搬具、材を伐採する際切り口に入れる「くさび」、炭材を窯に立て込む道具等に使用が多くみられる。また、コウヤマキは、水に強い特性をもつため耐水性を求められる材として容器や建築材として使用が多くみられる。本資料は、これら素材の特性をうまくいかした道具であり、古代人の知恵・工夫にあらためて驚かされる。

### 5 出土地について

出土地は、宮崎市北部に位置し、地形としては西からの丘陵部の端部にあたり、ここから東に広がる平地部へとつながる部分に位置する。本県では類似の地形の湿地を意味する語「牟田・無田(ムタ)」や「仁田(ニタ)」という地名の分布が、九州山地を取り巻くように全県的にみられ、また民俗資料としての田下駄(大足)は、県総合博物館資料目録によると県北部の北川町・東郷町、県南部の日南市、県南西部の小林市・須木村等において使用がみられる。



### 6 おわりに

省力化や機械化がはかられることによって、すがたを消した種々の農耕用具も長い年月のなかで幾度となく改良が加えられてきた物も少なくない。そのようななかで、昭和時代初めまで使用されていた農具の「大足」が、すでに古墳時代には確立していたことを示す点で、本資料は重要である。

### 参考文献

- 東 憲章 1998『前田遺跡』一般国道10号宮崎北バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第9集  
宮崎県総合博物館 1985『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』民俗資料編

## 玉文化を考える

鳥原 孝仙

宮崎県立西都原考古博物館には、1997（平成9）年に開館した古代生活体験館がある。古代人の知恵や工夫、技術といったものを体験学習することにより、現代の我々の生活に結びつけるという主旨により運営されている。体験メニューは、粘土による土器・埴輪・土偶・土鈴・土面作り、中国原産の滑石を加工する勾玉ペンダント・牙玉ペンダント・丸玉・自由な形にする自由ペンダント作り、北海道産黒曜石を石鏃や槍先形石器に加工する打製石器作りや本県北部の西米良村産赤色頁岩を石鏃や槍先形石器に加工する磨製石器作り、織物体験として縄文機アングイン織り、弓ぎり法による火起こし道具作りと火起こし体験、竹を加工する竹笛作り、土器による古代食作り、動物の骨を加工して釣り針やペンダントを作る骨角器作り等の11種30コースのプログラムを常時開設している。これらプログラムの中で年間2万人を越える利用者が、最も好んで体験するプログラムが勾玉ペンダント作りである。平成16年度の体験館利用者の全体に占める割合は、勾玉ペンダント作りが71%を占めている。多くのプログラムがある中で、なぜこんなにも勾玉ペンダント作りに興味関心が現代人にもあるのか。興味を覚えるところである。そこで、装飾品として古来より身につけられた玉の数々、これらはどこに由来がありいつごろから文化として花開いたのか？ 玉文化に関しての研究を勾玉を中心に概観してみたい。

人類はいつ頃から装飾品を飾り始めたのか。世界では、ヨーロッパや中国の後期旧石器時代の遺跡からペンダント（垂飾品）が出土しているので、これを最古とみることができる。日本では、10,000～14,000年前の北海道の湯ノ里遺跡や美利河遺跡で、旧石器時代終末期の石器とともに滑石製の小玉（径7～8mmで茶褐色）が出土していることから、これを最古とみることができる。

次に、縄文草創期から早期にかけてみると、最古の石製垂飾品として、9,000年前の無文土器文化の時代に愛媛県の岩蔭遺跡から鋸歯状の刻み目が付けられている石製垂飾品が出土している。同様の形態の物がシベリアでも出土していることから、日本独自のものではなく広くアジアの各地に流行したものではないかということも考えられる。また、同時期の物は、茨城県花輪台貝塚からも出土している。8,000年前頃の押型文尖底深鉢土器が作られる時代になると、日本の各地でペンダントが発見されるようになる。長野県の岩蔭遺跡ではオオカミの犬歯で作られた牙勾玉や貝製のネックレス（頸飾り）が出土し、愛媛県の岩蔭遺跡の埋葬人骨には貝製の物が副葬されている。また、岩手県の瓢箪穴石灰洞からは、縄文早期白浜式尖底土器文化層からツキノワグマ犬歯の牙勾玉が出土している。縄文早期後半には、熊本県の曾畑貝塚から石製の勾玉としては最古と思われる物が出土している。そして、縄文早期末の6,000年前の遺物として、クマの犬歯の牙勾玉が宮城県の新山前貝塚から出土しており、これには11本の浅い溝が刻まれている。この時期の特徴としては、石製品

はまだ少なく、素材としては動物の牙を中心に加工・製作される垂飾品が多いことがあげられる。

縄文前期になると、熊本県の轟貝塚出土のイモガイの頸飾りや、前記の最古の石製勾玉（緑灰岩の蠟石製）出土遺跡である、熊本県の曾畑貝塚から縄文早期後半（早期中葉～前期初頭）の物が出土している。また、岩手県の宮野貝塚出土の前期末の屈葬人骨にイノシシの犬歯・門歯の牙勾玉が副葬され、富山県の極楽寺遺跡の縄文前期初頭からは、穴状耳飾りや白玉も出土している。同様の滑石製品が、静岡県の木島遺跡から出土している。さらに、長野県の籠田遺跡の縄文前期初頭の集落跡からも出土している。この時期の特徴としては、勾玉の出現があげられる。

縄文中期には、特徴として硬玉製の大型大珠が数多く出土していることがあげられ、中でも鏝節型をした大珠が最も多い。最も大きい物は、富山県の朝日貝塚出土の鏝節型の物で、長さ15.9cm・幅4.2cmで重要文化財に指定されている。日本中部地方を中心として北陸・関東に分布するが、その他の地域ではほとんど出土しない。九州では、縄文後期中葉の福岡県の山鹿貝塚で出土した、呪術者の20歳代の女性の人骨と思われる上腹部に、長崎の翡翠製と思われる大珠が副葬されているのが確認されている。

縄文後期には、硬玉製の石製勾玉が多く出土する。

縄文晩期になると、縄文後期よりも数多く出土するようになり、細工も複雑で精巧な物が多くなる傾向がある。丸玉を主として勾玉・管玉・白玉・垂玉など多種多様な玉が作られる。北海道の御殿山遺跡出土の碧玉製白玉、青森県の亀ヶ岡泥炭層遺跡出土の勾玉、青森市の近郊から出土した晩期に出現する瘤状突起のある翡翠製勾玉、九州では後の古墳時代に流行する管玉と勾玉を連珠する物が現れ始め、鹿児島県の上加世田遺跡からも連珠の物が出土しており、同様な石製の連珠の物が九州の各地で出土している。

以上のように、垂飾類は縄文土器より先に出現し時代とともに種類が増加し、材料は石や、獣鳥魚類の歯牙・角・骨・嘴や、粘土などがあげられる。

弥生時代になると、縄文系の垂飾、外来系の垂飾、弥生系の垂飾が作られ、個数的には管玉が多く、その他に勾玉、棗玉、丸玉、垂玉、角玉が作られる。また、ガラス製の勾玉や管玉、丸玉が出現するのもこの時期である。管玉の石材としては、碧玉（緑色凝灰岩を含む）が多く、最古の物は、高知県の中村貝塚出土の縄文晩期後半の物がある。同時期の佐賀県の菜畑遺跡出土の物には、土製の物とともに出土した物があり、縄文晩期終末からは、縄文系と外来系が出土している。長崎県の箱式石棺遺跡からは、韓半島からもたらされた物が出土していることから、碧玉製の管玉は、縄文晩期に韓半島から渡来したものが起源ではないかと考えられている。管玉の製作工房跡としては、弥生前期中葉に位置づけられる鳥取県の長瀬高浜遺跡竪穴住居跡が最古と思われる。荒制品や剥片、未成品など製作途中の軟質碧玉が出土し、ハンマーや弾み車、穿孔具などの工具も確認されている。山陰ではその後の弥生中期後葉から後期にかけて盛んに作られている。また、新潟県の佐渡では、集中して工房跡が検出されており他に例をみない分布となっている。おそらくは専門的な集団の存在ではないかと考えられているが、弥生中期後半から後期末葉にかけて存続していたようである。

さて、弥生の勾玉の形であるが、森貞次郎氏によると以下のように形態別に分類されている。

- ①獣形勾玉 ②緒締形勾玉 ③牙形勾玉 ④半挾状勾玉 ⑤丁字頭勾玉 ⑥定形式勾玉  
⑦不定形式勾玉 ⑧土製勾玉

また、このほかに大陸の影響といわれるガラス製の勾玉が、奈良県の唐古遺跡や福岡県の須玖遺跡・三雲遺跡等で出土しており、弥生中期から後期にかけて北九州地方を中心に鑄造が行われたと考えられている。

古墳時代になると、玉の分類は以下のように形態別に分けられる。

- ①勾玉 ②管玉 ③白玉 ④切子玉 ⑤棗玉 ⑥丸玉 ⑦蜜柑玉 ⑧山梔玉 ⑨平玉 ⑩小玉

また、ガラス製として、算盤玉・練玉・蜻蛉玉などがあげられる。後期に多くみられる金・銀・金銅製の球形中空の丸玉は、空玉と分類されている。

このように時代とともに玉類の形態や材質も多種多様になり、石製模造品も作られるようになるなど複雑な様相をみせてくる玉文化であるが、発生は人が持つ自然な感情・感覚からの装飾品であることから今日の私たちと似た感覚での利用であったと考えられる。先人たちの精神文化を理解するうえでも、今後ますます注目していきたい。

#### 参考文献

- 江坂輝彌 渡辺 誠 1988『装身具と骨角製漁具の知識』 考古学シリーズ13 東京美術  
寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館  
水野 祐 1969『勾玉』 学生社  
藤田富士夫 2002『玉』 考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社  
土肥 孝 1997『縄文時代の装身具』 日本の美術2 第369号 至文堂  
岩永省三 1997『弥生時代の装身具』 日本の美術3 第370号 至文堂  
町田 章 1997『古墳時代の装身具』 日本の美術4 第371号 至文堂  
鈴木克彦ほか 2004『縄文時代の玉文化』 季刊考古学 第89号 雄山閣

## 日向国可愛山陵説<sup>1)</sup>

鶴田 裕一

### 1 はじめに

西都原に関する著述が、江戸時代後期にいくつかなされている。以下のような書である。

- ①笠狭大略記：兎玉実満<sup>2)</sup> 文政8 (1825) 年
- ②日向可愛山陵図書：中村忠次<sup>3)</sup> 天保3 (1832) 年
- ③日向国斎殿原王都論：濱崎観海<sup>4)</sup> 天保3 (1832) 年
- ④日向国笠狭御碕王都論弁：富永芳久<sup>5)</sup> 天保8 (1837) 年
- ⑤日向国可愛山陵記：水島永政<sup>6)</sup> 天保12 (1841) 年
- ⑥日向山陵考略：本部定就<sup>7)</sup> 嘉永5 (1852) 年

このうち、日向国可愛山陵説(記)を紹介する。<sup>8)</sup> それは、①③④は「特別史跡西都原古墳群＝西都原風土記の丘＝」<sup>9)</sup> に紹介され、②⑥は、「男狭穂塚・女狭穂塚等資料集」<sup>10)</sup> に全文が掲載されているが、⑤については未見だからである。なお、西暦及びルビを付加して記述した。また、項目ごとに改行した。

### 2 日向国可愛山陵説本文

上宮 皇孫瓊々杵尊の神廟なり 一号覆野神社俗云三宅神社

下宮 木花開耶姫命の宮所なり。上宮を去ること十余町辰の方也。大宮司一人社司三十六家あり。この宮を妻宮又妻神社とも云う。在所を妻町と云う。

天正五(1577)年兵火に罹り、神廟家宅共に亡ぶ。大宮司兎玉土佐介実友、釈受珍と改め、本願寺末となり、笠沙南端に一字を建て、上宮山照明寺と号し、御神主を守護し奉る。同十一(1583)年仮宮を旧地に造営し、井上相模介を大宮司とし御遷座なし奉る。今の上宮是なり。

山陵は上宮より十五町許り戌亥の方おがたまいつきとのほろにあり。此の所を樹齋殿原又は狭穂山とも称す。高二十九間周二百三十間

皇后山陵は其の西に並び座り。形同じで小なり。陰狭穂山と称う。

此の両山陵の間百余間あり。高十九間 周百六十間

又此の両山陵の後ろに飯盛塚殺生塚などと云うあり。

飯盛塚高二丈五尺周六十四間

殺生塚高二丈五尺周七十五間

上宮より山陵への途中うつせうに空室塚あり。山陵を去ること八町許り辰の方なり。

空室塚高六間許り周四十余間口より奥まで八間許り。奥に壇あり。四面皆大石を以て作り。里俗鬼ガ窟という。

吾田長屋 風土寛厚にして人物惇朴なり。此の辺りの惣名

笠狭崎 凡そ方二十町高原なり。又下笠狭と云うもあり

一之宮 上宮之南八町許り下笠狭に在り。大巳貴神

日隅田 同処にあり

乳之滝 涌泉也

国分寺 同処

長狭神社 右同所

御禊滝 同所西山間涌出

日隠 地名也方一町堀二重

雨隠 地名なり上宮の西に当たる形日隠に同じ上古宮跡也

婆尉之御手洗 岩間涌出

笠狭皇城東二十余町に米良川あり。西南二里許りに濁川あり。皆大河なり。佐土原の東南にて落ち  
合ひ東南海に入る。

東北に鈴ヶ岳あり。大山なり。笠狭より百余町あり。又北に連なるを米良山という。

襲高千穂 米良山の奥にあり。笠狭より二十里許り

高屋之山陵 彦火々出見尊

相伝う元徳二(1330)年伊東大和守祐重 山陵を犯し奉り、城を築いて浮舟城<sup>11)</sup>と名づく。天正十五(1587)年<sup>12)</sup>伊東三位入道義益<sup>13)</sup>に至り没落す。今も其の下を竹屋の里と云う。佐土原と本庄との間の高原なり。

此の高原中に黒貫寺と云うあり。三百石 是古より山陵に属し奉りし宮寺なり。幸いに伊東の乱に免れ存せり。黒貫寺附きの農家百余あり。

又神社百余座あり。

此の高原中に大なる古墳旧塚多くあり。又黒貫寺麓に都於郡町と云う駅あり。此所より本庄町へ一里半佐土原城下へも一里半なり。

潮権現<sup>14)</sup> 高原中の東方にあり。往来より少し北なり。都於郡町より十町許りあり。此の社海を去ること三里なり。井あり。海潮と同じく満涸を為す。所謂潮満汐涸の瓊を齋き祭る神社なり。

又本庄に四十八塚あり。何れも大なり。其の中に形山陵にひとしき塚、町の北、畑の中にあり。高十二間余幅四間許り此の如きの塚二所あり。又往還の傍ら一冢あり。

冢上に社あり。劍襲大明神<sup>15)</sup>と称す。屢奇瑞あり。

又町の南に一冢あり。一とせ畑主棺を掘り出す。其の中に太刀鋒の類又鏡三面あり。薩摩候これを懇望せられしとぞ。されば冢を発けば大いに崇りあるよし。皆四十八の中なり。

淡島<sup>16)</sup> 折生迫と云う処の前の海中にあり。佐土原の城下より十五里南なり。火々出見尊豊玉姫玉依姫三柱を齋祭る宮地なり。陸を去る事八町許り。潮涸れば歩行にて参詣す。此の島平らにして高一丈許り周一里許り然有るに上古よりいかなる海荒れの時も変わる事なし。清浄無双の靈地なり。

玉の井 同所の汀にあり。潮満れば海中にあり。潮涸ればあらわる。水ことに清し。所謂

可<sup>うましおびま</sup>怜小汀と考える。大宮司友永山城守安恩折生迫に住む。此の辺りの生土神也。

鶴戸山<sup>17)</sup> 折生迫より五里許り。山路險阻にして難所多しという。

吾平山陵<sup>ふきあみずのみこと</sup> 葺不合尊 鶴戸山岩窟中に齋祭る。

鶴戸之尾山は、城ヶ崎町より一里余南にあり。山中に平野出屋布<sup>てやしほ</sup><sup>18)</sup>と云う所あり。本村は麓にあり。松田氏祠の事に預かる。

御神主円鏡なり。短一尺二寸重一貫三百目 三尊御像あり。中尊衣冠の御像兩脇女躰の御像なり。正月十五日十一月初卯の日共に祭りあり。即ち岩窟中齋祭る是なり。山陵未詳。

又肥後国に相良観音寺<sup>あいら</sup><sup>19)</sup>と云うあり。其の山上に葺不合尊の山陵と云い伝える所あり。又吾平山とも云う。山上五六町にして両おらび(よばい)と云う所あり。是山陵也と云えり。熊本城下より十里許りあり。山東に八峰ヶ嶽あり。大山也。又遙かに三国ヶ嶽見ゆ。肥後筑後豊後三国の境なり。山陵外周より高き事五七尺 樹繁茂せり。外周六十間許りあり。

神武天皇宮址<sup>20)</sup>は宮崎にあり。本庄より城ヶ崎まで六里。其の半ばにあたる地なり。又此の辺りに景清墓というものあり

右日向国事蹟は其の国児湯郡笠狭の人兒玉実満<sup>あし</sup>主 同国日高盛陳ぬし 又京師中村忠次ぬしの説どもをつたえきて書きしるし<sup>お</sup>畢わりぬ。

天保十二(1841) 歳次辛丑冬十月 水島永政

### 3 まとめ

「日向国可愛山陵説」は内容的には、それ以前に書かれた「日向可愛山陵図書」を簡略化して踏襲している。実際に西都原を踏査した中村忠次の著作に基づいて記述したわけである。水島永政自身は西都原を訪れてはいない。同じような内容でありながら、再度書き記したということからは、京都から熱い視線を西都原に向けていた人々がいたということを感じずにはいられない。近傍の山陵や神社を巡りながら、遙か西都原に想いを馳せた永政の気持ちが察せられる。

#### 註 1) 日向国可愛山陵説

財団法人無窮会図書館神習文庫所蔵本より。国書総目録(岩波書店)では、山陵記となっている。

2) 兒玉実満(1765～1836)は、現在の西都市三宅の人。代々庄屋を勤める家柄であったが、やがて役を辞め神代の史跡を調査することに没頭した。老境に入った実満は、文政8(1825)年「笠狭大略記」と「日向国神代絵図」を完成する。中村忠次の著した「日向可愛山陵図書」には、「一日実満の導きに従い(山陵を)押し奉り」とある。

3) 中村忠次は京都の人で、実際に西都原を踏査し、それをもとに「日向可愛山陵図書」を著している。

4) 濱崎観海(1761～1843)は、現在の島根県簸川郡大社町の人。兒玉実満の著した「日向国神代絵図」を知り、此れに感動し「日向国斎殿原王都論」及び「王都図」を記した。

5) 富永芳久(1813～1890)は、観海と同じ大社町の人。「日向国斎殿原王都論」に反論して、「王都論弁」を書いている。

6) 水島永政について

・生年 寛政六(1794)年

・没年不詳 但し嘉永六(1853)年60歳で生存していたという記録がある。

・京都黒門下立売に住す。笛の演奏家。傍ら山陵の研究にも専心し、嘉永年中、三条実万が主唱した山陵会に参加した。

・国書総目録著者別索引865頁には、水島永政の著作について次のように紹介されている。

山陵考（天保十二年） 日向国可愛山陵記  
 式社詣之記（天保十四年） 山城国式社考（嘉永元年）  
 陵墓考 山城王蹟考

- 7) 本部定就（～1865）は、現在の西都市都万神社の神官。濱崎観海と書簡を数度交わし、意見を述べ合っている。
- 8) ここに挙げた書籍の所蔵場所、掲載書籍は以下の通り。
  - ・笠狭大略記：久保平一写本（昭和9年）
  - ・日向可愛山陵図書：宮崎県教育委員会 1991『男狹穂塚・女狹穂塚等資料集』
  - ・日向国斎殿原王都論：天理大学図書館所蔵
  - ・日向国笠狭御碕王都論弁：九州大学図書館所蔵
  - ・日向山陵考略：宮崎県教育委員会 1991『男狹穂塚・女狹穂塚等資料集』
- 9) 宮崎県教育委員会 1984『特別史跡西都原古墳群＝西都原風土記＝』
- 10) 8)に既述
- 11) 都於郡城の別名
- 12) 天正十五年とあるが、天正五年の事ではないかと思われる。伊東の豊後落ちはこの年のことである。
- 13) 義益は、永禄十二（1569）年に没している。
- 14) 西都市鹿野田潮にある鹿野田神社
- 15) 東諸県郡国富町本庄剣柄稻荷神社
- 16) 宮崎市南部にある青島
- 17) 日南市鶴戸にある鶴戸神宮
- 18) 宮崎郡清武町平野付近
- 19) 熊本県山鹿市（以前の鹿本郡菊鹿町）相良観音
- 20) 現在の宮崎神宮もしくは皇宮屋と思われる。

## 筑紫の日向について

鶴田 裕一

### 1 はじめに

森鷗外は、その作品「長曾我部信親」<sup>1)</sup>の冒頭で次のように記述している。

「頃は天正十四年しはす半ばの朝まだき、筑紫の果ては夜も闇けて、靈山おろし吹きすさむ、戸次の川の岸近く（後略）」

ここで言う「筑紫の果て」とは、現在の大分市南部大野川流域を指している。鷗外の認識では、豊後の大分は筑紫の領域からすると果てにあたる地域であるということなのであろう。それでは、古代において「筑紫」や「日向」の所在位置は、どのように認識されていたのであろうか。以下日本書紀<sup>2)</sup>の記述から見てみたい。

### 2 筑紫の用法について

各箇所記述されている「筑紫」がどの地域を表すかについて、その後続く地名を見ることによって窺い知ることができると考えられる。つまり「筑紫」+地名あるいは「筑紫」+地名+ $\alpha$ ということである。まず、書記の巻ごとにこれを見てみる。

#### ① 「筑紫」+地名、「筑紫」+地名+ $\alpha$

- ・ 筑紫日向小戸橋之櫓原<sup>3)</sup>

日本書紀通釈<sup>4)</sup>（以後通釈）によると、「筑紫は筑前筑後の域を云うは本よりなれど、ここは九国を都でも云へるなり」とあり、筑紫は九州全体を指し、日向は現在の宮崎県を指すとしている。つまり、筑紫プラス国名という記述である。

- ・ 筑紫胸肩君等所祭神是也<sup>5)</sup>
- ・ 筑紫水沼君等祭神是也<sup>6)</sup>

これらの筑紫に続く地名、胸肩、水沼は、現在も残る地名、宗像、三瀧に相当すると思われる。筑紫国内である。

- ・ 筑紫日向可愛可愛此埃之山陵<sup>7)</sup>
- ・ 筑紫日向高千穂櫛觸之峯<sup>8)</sup>

前述のように筑紫は九州全体を指し、日向は現在の宮崎県にあたるというのが従来の説である。瓊瓊杵尊が降臨した高千穂、葬られた可愛山陵は日向の国、宮崎県にあるというのは、この記述からきている。

- ・ 筑紫国菟狭<sup>9)</sup>
- ・ 筑紫国崗水門<sup>10)</sup>

菟狭は、宇佐であるという註がある。つまり現在の大分県宇佐市付近を指しているということ

になっている。宇佐神宮境内には、神武天皇一柱騰宮址の石碑が建っている。しかしながら、宇佐は豊前であり、筑紫国内ではない。鴨外の言う筑紫の果ても筑紫国内であるというのなら、この記述も首肯できるのだが<sup>9</sup>。菟夫羅媛（つぶらひめ）という人名も別な箇所<sup>11</sup>に記されている。辞書によると、菟は、「トもしくはツ、ヅ」という読みがある<sup>12</sup>。それならば、「菟狭」は「トサ」もしくは「ツサ」「ヅサ」と読むことになり、宇佐とは全く別なところとなる。つまり、筑紫国内にあるこの地名を探せばよいということになる。また、宇佐ほどの有力な神社であることも視野に入れておかなければならないであろう。例えば、宗像大社などを考えたい。なお、通釈では、宇佐という註が削除されている。日く「(宇佐とあるは)きわめて後人の加筆なり」(( )書きを付加)

崗水門は、遠賀川河口近く芦屋町にこの名前を冠した神社、岡湊神社が存在しており、岡垣という地名もあり、筑紫国内であると考えられている。

・ 筑紫伊観縣主祖五十迹<sup>13</sup>)

伊観は伊都に通じ、魏志倭人伝<sup>14</sup>)に出てくる伊都国という古い地名もあり、現在も福岡県前原市で使われている。筑紫国内である。

・ 筑紫樞日宮<sup>15</sup>)

ここに出てくる樞日宮は、香椎宮と考えられており現在の福岡市内に鎮座している。

仲哀天皇、神宮皇后が御祭神となっている。

・ 生於筑紫之蚊田<sup>16</sup>)

福岡県糟屋郡宇美町は、神宮皇后がこの地で応神天皇を産んだので、「産み」から「宇美」という地名がついたとされている。ここが蚊田の里であるという。福岡市の東に隣接している。

・ 於筑紫各羅嶋<sup>17</sup>)

各羅嶋には「かわらのしま」とルビが振られている。これに従うと、筑豊地方にある香春岳や現在の田川郡香春町などを当てはめることができるであろう。この記述は、百済の武寧王の生誕にまつわる場所である。佐賀県唐津市内の旧鎮西町にある加唐島をこれにあてる説もあるようである。

・ 至筑紫嶋生斯麻王<sup>18</sup>)

これも武寧王の誕生に関する記述である。ここでは各羅は抜けている。既に記載されているので省略したとするならば、香春の嶋となる。また、嶋という地名を探すと、現在の志摩町が想起される。あるいは九州全体を一つの島と考えたということも有り得るが、嶋で生まれたから斯麻王と名付けたということからすると、九州全体は考えにくい。

・ 交戦於筑紫御井郡<sup>19</sup>)

これは、筑紫国造磐井と戦った記事である。御井郡は、現在三井郡と書かれ、磐井と深いつながりのあったと考えられる地にその名が残っている。

・ 筑紫国膽狭山部<sup>20</sup>)

・ 置筑紫穂波屯倉鎌屯倉<sup>21</sup>)

膽狭山は、「いさやま」とルビが振られている。通釈<sup>22</sup>)によると豊前国京都郡諫山に比定してい

る。これは、現在の福岡県勝山町になる。諫山村が他の町村と合併したものである。筑豊から山を一つ越えたところにある。

穂波はかつての穂波郡で筑豊西部。<sup>23)</sup> 鎌はかつての嘉麻郡で筑豊東部<sup>24)</sup>にあたる。筑紫の国の遠賀川流域に屯倉を置いたという記事である。

・ 竹斯嶋<sup>25)</sup>

ここに現れている竹斯嶋とは「ちくし」と読むことはできても「つくし」と読むことは、むづかしいと言わざるを得ない。いわゆる筑紫を別な漢字で記したということであろう。これから筑紫は「つくし」ではなく「ちくし」と読むということが考えられる。

・ 発自筑紫大津之浦<sup>26)</sup>

これは、筑紫を発して百済の南畔の嶋に向かう件である。大津之浦がどこか特定することはできないが、朝鮮半島に対する北部九州であることは疑いようがない。娜大津<sup>27)</sup>という記述があるが、これは那珂川の河口にあたる博多港と考えられる。ここでいう大津之浦とは現在の博多湾岸を指すと考えられる。

・ 筑紫大郡<sup>28)</sup>

この大郡とは、通釈<sup>29)</sup>によると小郡か大野であると説く。小郡は現在も小郡市があり、大野については古代の城大野城が大宰府の北に聳えている。筑紫国内の地名と考えて良いであろう。

・ 於筑紫小郡<sup>30)</sup>

・ 軍丁筑紫国上陽畔郡大伴部博麻<sup>31)</sup>

筑紫小郡については、前項にもあるように現在も地名が小郡市として残っている。上陽畔郡は「かみつやめのこおり」と読まれ、八女という地名は残っているし、大伴部博麻は、久留米城内や出身地とされる上陽町にはその功績を称える石碑が建立されている。

② 筑紫の位置を推定できる記事について

次に筑紫の位置を推定できるような記述を見てみよう。

・ 將軍来目皇子到于筑紫乃進屯嶋郡而聚船舶運軍糧<sup>32)</sup>

この場面は、新羅を撃つために来目皇子を將軍として、筑紫の嶋郡に軍勢が集結したところである。ところが、にわかには皇子は薨去される。その墓が糸島郡志摩町に伝承されている。ここで言う筑紫は、筑紫国と考えられる。

・ 送王子忠元於筑紫<sup>33)</sup>

新羅の王子忠元を筑紫にて送ったという記事である。これも北部九州を指し、九州全体を指すものではないと考えられる。

・ 居筑紫南海中<sup>34)</sup>

これは多瀨嶋に遣いを送ったという記事である。ここでいう筑紫は九州全体を指しているとも考えられる。また、三国志に「倭人在帶方東南大海之中」<sup>35)</sup>という倭人伝冒頭の記述がある。これも、朝鮮半島に置かれた帶方郡を半島全体の呼び名として使用していると考えられる。つまり、筑紫は九州全体を指しているのではなく、その一部ではあるが、代表する地名として捉えられ、

その南にあると記述していると考えられることもできる。ちなみに、多禰嶋は種子島であると考えられる。確かに方角からいって筑紫の南方になる。

以上筑紫について見てきたが、筑紫プラス国名という記述は、筑紫日向以外にない。その他は、いずれも筑紫国内、もしくはその周辺部ではないかと思われる箇所が少数存在する。

### 3 日向の用法について

日向の記述は、天孫降臨や景行天皇の九州巡狩、応神・仁徳紀の髪長姫の件に頻出する。興味深いのは、神代紀は筑紫の日向あるいは日向単独で記載されているが、その後は筑紫が冠されている箇所がないことである。神代紀の用例を以下見てみる。

なお、筑紫の項で記述したところと重なるところがあるが、比較するためであるので、再度記載する。

- ・ 筑紫日向小戸橋之櫛原<sup>36)</sup>
- ・ 日向襲之高千穂峯<sup>37)</sup>
- ・ 筑紫日向可愛山陵<sup>38)</sup>
- ・ 當到筑紫日向高千穂櫛觸之峯<sup>39)</sup>
- ・ 到筑紫日向高千穂櫛觸之峯<sup>40)</sup>
- ・ 降到於日向櫛日高千穂之峯<sup>41)</sup>
- ・ 到於日向襲之櫛日二上峯<sup>42)</sup>
- ・ 呼日日向襲之高千穂添上峯<sup>43)</sup>
- ・ 葬日向高屋山上陵<sup>44)</sup>
- ・ 葬日向吾平山上陵<sup>45)</sup>

以上が神代（巻一、二）における日向の記事である。筑紫つまり九国の内の日向という表現があり、日向単独の記載がある。この違いは何であろうか。考えられるのは、筑紫が省略されているということである。つまり、本来は神代巻ではすべて筑紫日向となるという考え方である。なぜ省略したのかはわからない。しかし、ここで問題となるのは、筑紫とは九州九国全体を指すのか、筑紫国を指すのかという点である。

### 4 まとめ

筑紫の日向とは、現在で言うならば「九州の宮崎県」ということであると従来考えられてきた。確かに九州の鹿児島県とも言えるであろうし、九州の熊本県ということも言える。他の県にしてもそれは可である。しかしながら、日本書紀には不思議なことにこれまで見てきたように、筑紫の日向とのみあり、筑紫の豊も筑紫の肥もない。逆に「筑紫肥豊三国屯倉」<sup>46)</sup>と並列になっており、これなどは確実に筑紫国となる。それから、筑紫火君<sup>47)</sup>という記述もあるが、これは註に「火、原作大」とあり、元来「筑紫大君」と記述されていたものらしい。しかし、「筑紫大君」とはいかにもおかしいとでも思ったのであろうか、書き直したのが真相というところであろう。

さて、この日向だけ特別に筑紫を冠しているということは、どう考えればよいのであろうか。考えられることは、日向が国名ではなくて、筑紫国内の地名であるということである。こう考えると、日向という国名だけ特別に筑紫に続く不自然さはなくなる。

つまり、筑紫の日向とは、筑紫国内の日向を指すと考えたい。そして、筑紫国内のどの場所かはわからないが、同じ地点を指すものと考えられる。もし、複数あるならば、区別するために郡名をつけることなどが必要になるからである。さらに言えば、当時の人たちにとって筑紫の日向といえ、すぐに理解できる場所であつただろうということである。日向という地名とともに特筆すべき遺跡地や出土品のある場所がその候補地となる。

## 5 おわりに

日本書紀の記述から筑紫の日向とはどこなのかということについて考えてみた。従来言われていたこととはかけ離れたところに結論が到ってしまったが、当時の人々の認識に迫ることができたであろうか。あるいは、筑紫の日向は、これだけ特別な使用法とされたのだろうか。もし、そうならばそこには何かの理由が存在するはずである。しかし、今の時点では全くわからない。それをはっきりさせるためには、日本書紀だけでなく、他の資料でも調べてみる必要があると思う。

- 註 1) 鴨外全集著作編第一巻詩歌戯曲(岩波書店)明治36年刊 276頁  
 2) 新訂増補国史大系日本書紀前編後編、日本書紀索引六国史索引一(吉川弘文館)  
 3) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷一神代上16頁  
 4) 日本書紀通釈第一 飯田武郷(内外書籍株式会社)昭和5年刊 240頁  
 5) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷一神代上27頁  
 6) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷一神代上31頁  
 7) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷二神代下66頁  
 8) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷二神代下71頁  
 9) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷三神武天皇113頁  
 10) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷三神武天皇113頁  
 11) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷八仲哀天皇 235頁  
 12) 大漢和辞典(諸橋轍次、大修館書店)  
 13) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷八仲哀天皇 235頁  
 14) 百納本二十四史三国志宋紹熙刊本(台湾商務印書館)423頁  
 15) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷九神宮皇后 235頁  
 16) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷十応神天皇 269頁  
 17) 新訂増補国史大系日本書紀前編(吉川弘文館)卷十雄略天皇 368頁  
 18) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷十六武烈天皇 6頁  
 19) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷十七継体天皇 26頁  
 20) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷十八安閑天皇 41頁  
 21) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷十八安閑天皇 42頁  
 22) 日本書紀通釈第四 飯田武郷(東京印刷株式会社)明治36年刊 2659頁  
 23) 角川日本地名大辞典40福岡県 1222頁  
 24) 角川日本地名大辞典40福岡県 376頁  
 25) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷十九欽明天皇 84頁  
 26) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷二十六斉明天皇 270頁  
 27) 新訂増補国史大系日本書紀後編(吉川弘文館)卷二十六斉明天皇 276頁

- 28) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷二十九天武天皇 334頁
- 29) 日本書紀通釈第五 飯田武郷(東京印刷株式会社) 明治36年刊 3624頁
- 30) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷三十持統天皇 401頁
- 31) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷三十持統天皇 407頁
- 32) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷二十二推古天皇 140頁
- 33) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷二十九天武天皇 337頁
- 34) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷二十九天武天皇 359頁
- 35) 百納本二十四史三国志宋紹熙刊本 (台湾商務印書館) 423頁
- 36) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷一神代上 16頁
- 37) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 64頁
- 38) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 66頁
- 39) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 71頁
- 40) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 71頁
- 41) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 75頁
- 42) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 78頁
- 43) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 81頁
- 44) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 87頁
- 45) 新訂増補国史大系日本書紀前編 (吉川弘文館) 卷二神代下 101頁
- 46) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷十八安閑天皇 45頁
- 47) 新訂増補国史大系日本書紀後編 (吉川弘文館) 卷十九欽明天皇 88頁

## 国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」 鞍橋金具の復元について

東 憲章

### 1 金銅馬具類について

国宝日向国西都原古墳出土金銅馬具類は、宮崎県出土考古資料の中で唯一の国宝であり、現在は、(財)五島美術館(東京都)が所有している。これは、大阪府丸山古墳出土金銅馬具類、福岡県宮地嶽古墳出土金銅馬具類、奈良県藤ノ木古墳出土金銅馬具類とともに日本屈指の優品とされるものである。

馬具類の内訳は以下のとおりである。

指定名称：「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」

①金銅透彫鞍橋金具残欠	1背分	②金銅透彫轡鏡板	2箇
③金銅透彫雲珠	1箇	④金銅無地雲珠	1箇
⑤金銅透彫杏葉	3枚	⑥金銅無地杏葉	4枚
⑦金銅透彫辻金物	9箇	⑧金銅無地辻金物	6箇
⑨金銅透彫散金物	16箇	⑩金銅鈎具	1箇
⑪鞍橋金具遊離残欠	一式		

これらの馬具は、明治30年代に西都市(現)百塚原古墳群で地元の農民により掘り出されたものである。その後、古物商や美術品収集家の手を渡り、1956(昭和31)年、京都府の守屋氏が所有している時点で国宝指定を受けている。1959(昭和34)年、守屋氏より(財)五島美術館が購入し、現在に至っている。

透彫のものと無地のものの2組の馬具セットが混在するが、同一古墳からの出土とされており、全体的に腐食の状態も類似している。透彫は龍文であり、轡鏡板と杏葉においては双龍が対峙する図文、鞍橋金具においては、海部と磯部にそれぞれ数頭の龍が中央の円文を境に対称配置されたものと考えられる。その図文や形態的特徴などから、6世紀前半に新羅で製作されたものと思われる。

宮崎県では、県立西都原考古博物館の開館(2004年4月)に向け、展示資料として活用するため複製品の製作を計画し、(財)五島美術館の了承を得た。

本県では、県総合博物館のリニューアル(1997年)に合わせ、同馬具類の一部を複製している。鞍橋金具については、原品の現状を忠実に模したものであるが、西都原考古博物館においては、鞍橋金具の金銅透彫の欠損部分までを復元し、同馬具が製作された当時の姿を再現することとした。その他の馬具類については、原品に欠損がほとんど見られないことから、現状どおりの複製品を製作することとした。

ここでは、復元に係る検討と製作工程の概要を報告する。

なお、鞍橋金具の原品と完成した復元品は、巻頭カラー1、2に示した。

## 2 鞍橋金具復元品製作について

- (1) 体制
- |         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 計画、実施   | 宮崎県教育委員会                      |
| 復元製作委託先 | (株) 芸匠                        |
| 復元製作者   | 小杉拓也                          |
| 協力      | (財)五島美術館、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所 |

### (2) 復元委員会の設置

鞍橋金具復元に向けては、学術的に違和感のないものとするために、研究者や関係者による委員会を設け、十分な検討を行うこととした。

委員会の構成は次のとおりである。

名称：国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」鞍橋金具復元委員会

委員（敬称略、所属は当時）

小田富士雄（福岡大学教授）

千賀久（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）

名見耶明（五島美術館学芸課長）

古谷毅（東京国立博物館考古課）

森田稔（文化庁美術学芸課）

柳沢一男（宮崎大学教授）

事務局：北郷泰道、東憲章（宮崎県教育庁文化課）

### (3) 経過

- |              |   |
|--------------|---|
| 2001（平成13）年度 | 復元デザイン案制作<br>復元委員会の設置及び開催（第1回、第2回）                |
| 2002（平成14）年度 | 復元委員会（第3回、第4回）<br>復元委員会分科会（素材及び製作技法の分析）<br>復元製作開始 |
| 2003（平成15）年度 | 復元委員会（第5回）<br>復元品完成                               |

## 3 検討と製作の経過

### (1) 第1回復元委員会（2002年2月13日、五島美術館）

小杉氏による復元デザイン案が提示された。原品の透彫残存部のパターンを繰り返し、覆輪や帯金に突起状に残存する部位との繋がりを重視した図案であった。これに対し、各委員による検討が行われ、以下のような意見が出された。

- ・同馬具の図文のモチーフは龍であり、後輪右端部に龍文パターンの全体が残存しているため、それを海部と磯部の全体に繰り返す図文の方が違和感が無い。

- ・龍文の基本パターンを重視すると、国宝指定後の修理復元を含む原品の現状と異なる部分が生じる可能性があるが、最新の情報を含む復元を目指すべきであり、そのことで馬具に対する理解が深まれば良い。
- ・デザイン（形状）のみの復元にするのか、製作技法を含めた復元にするのか。また、木質部を含めた鞍としての復元なのか、金工品としての復元にするのか。

以上の検討を踏まえ、次回委員会までに、デザイン案の修正と復元方針の整理を行うこととした。

## (2) 第2回復元委員会（2002年3月26日、宮崎県庁）

前回の委員会での検討を受け、復元と展示の方針について提示した。復元は、デザイン（形状）のみではなく、製作技法を含めた技術全体の復元とし、素材は分析結果を受けての同素材復元とすることとした。また、鞍の木質部分の復元は行わず、金工品として復元し、展示においては、実際の馬装がイメージできる演示を行うこととした。

デザインについては、原品に残る龍文の基本パターンをトレースし、それを繰り返す図案が提示された。前輪については、海部に左右各4パターンと磯部に各3パターン、後輪については、海部に各5パターンと磯部に各4パターンが配置された。しかし、磯部については、海部よりも幅広であるために、龍文が大振りとなり間延びした印象を受けた。

そのため、磯部については前輪・後輪ともに各1パターンを増やして配置することとし、龍文細部の形状も含めて再度デザイン修正を行うこととした。

更に、素材と製作技法の検証のため、原品を用いて各種の分析を行うこととした。

## (3) 鞍橋金具復元にむけての化学分析（2002年6月19日～21日、東京文化財研究所）

素材と製作技術の復元に向けての科学分析は、東京文化財研究所に委託した。資料は鞍橋金具遊離残欠33点を用い、彫金や切り抜き技法の観察、地金と鍍金の化学組成、鍍金層の厚みと構造等を明らかにすることを目的とした。

調査手法は、①実体顕微鏡撮影、②電子顕微鏡撮影（SEM）、③マイクロX線分析、④蛍光X線分析（XRF）である。（調査分析者：三浦定俊、佐野千絵、早川泰弘）

調査の結果は次のとおりである。

- ・地金の科学組成は、Cu（銅）97～99%、Sb（アンチモン）1～2%、Ag（銀）1%以下で、古代の銅製品に含まれることの多いSn（錫）やPb（鉛）は0.1%以下である。
- ・鍍金層の金の純度は99%以上であり、ごく僅かにAg（銀）を含む可能性がある。Hg（水銀）も僅かに検出されるが、これは金アマルガムを作る際に用いられたものであろう。
- ・金の表面には1～2 $\mu$ m程度の粒子構造が見られ、粒子がよく残る部分と平滑につぶれた部分が見られるが、全体的には鍍金後の強い研磨を行ってはいないと思われる。
- ・測定データからの計算では、鍍金層の厚みは2～3 $\mu$ mである
- ・鍍金は全体に均質で、彫金（列点、刻線）にも入り込んでいる。
- ・切り抜きは、タガネではなく糸鋸で行われたと思われる。刻線は、蹴り彫りではなく「なめくり」技法による。毛描き線は一部に残るが、ほとんど観察できない。

・列点やなめくりによる彫金の際にできるエッジの盛り上がりが見られず、槌目状の円弧痕、微小な擦痕、断面部の面取り状痕跡が見られる。このことから、製作の各工程後に砥石や「ささら」による擦り仕上げ、木槌による整形が行われたと推定される。

以上のような結果を得たが、鍍金については二通りの技法が推定された。予め水銀に金を溶かして金アマルガムを作り塗布する方法と、銅板に水銀を塗り直後に金箔をおいて金アマルガムの状態とするものである。いずれも、金アマルガムに特徴的な金の粒状構造が観察される。これは、実験サンプルの観察からも確認されている。

前者の方法では厚みにむらが出やすく、また、鍍金後に十分に研磨を行わないと金の光沢が出ない。一方後者の方法では、均質的で地金の被覆が容易であるが、測定データから推定された厚みを出すためには、かなりの枚数を重ねることが必要になる。

#### (4) 第3回復元委員会 (2002年9月5日、五島美術館)

修正デザイン案の提示。前回委員会での指摘を受けて、磯部については前輪に片側4パターン、後輪に5パターンを配することで全体的なバランスが取れ、デザイン上に列点や鋸を表現することで引き締まった印象を受けた。概ねデザインについては全委員の了承を得た。

素材、製作技法については、東文研における科学分析の結果を基に以下のとおりとした。

①銅板は、Cu(銅)97.5%、Sb(アンチモン)1.0%、Ag(銀)0.75%の合金とし、復元品であることが後世の分析で明白となるように、Zn(亜鉛)0.75%を含有させる。

②切り抜きはタガネではなく、糸鋸とする。原品製作当時の糸鋸を再現することは不可能であるが、針金に刻みを入れたものを数種類作製し、切断痕の観察、原品との比較など実験を行う。その上で、実際の製作には現代の糸鋸(切断痕の最も近似するもの。)を使用する。

③製作の工程順序は、彫金 → 切り抜き → 鍍金の順序とする。

分析で明確に判断し得なかった次の2点については、実験を行って判断することとした。

- ・鍍金は金箔を用いたものか、事前に作られた金アマルガムを用いたものか。
- ・鍍金後の光沢を出すための方法。特に彫金(列点や刻線)内に入り込んだ金に原品のような光沢が出るのか。

その他、各工程での詳細技法や使用する工具等についても実験を行いながら判断し、記録を残すこととして、復元作業に着手することとした。

#### (5) 第4回復元委員会 (2002年3月28日、五島美術館)

前輪の透彫が概ね終了した時点で、一つの問題が浮上した。平面上での復元デザインに沿って作業を進めていたため、3次元的な曲線を持つ磯部で原品との形状差が生じたのである。木質の鞍本体は遺存していないため、本来の立体形状を検証することは不可能であった。国宝指定後に修理(一部復元)された原品の現状に合わせるためには、立体図面を作成する必要がある、平面図とは多少デザインが異なることが予想された。

小杉氏により作成された、原品の立体形状に合わせて調整した立体図面が提示され、委員による検討の結果、海部は平面図との差異は微小であるためそのまま作業を進め、磯部については、立体

図面に従って製作し直すこととした。

(6) 第5回復元委員会(2003年11月5日、6日、五島美術館)

前輪、後輪ともに彫金、切り回しまで完成し、研磨、組み立て、鍍金、仕上げを残すのみとなった。全体的な復元状況と金具細部の仕上げ状況の確認を行った。全体的な雰囲気は問題なく、完成に近づいていた。帯金具の厚みや断面部の面取り、彫金の手直しなどいくつかの修正点が上げられたものの、以後の工程で修正可能なものであり、そのまま完成に向け作業を進めることとした。

鍍金の方法については、数種のサンプル製作実験の結果、箔鍍金を基本に、部分的に金アマルガム鍍金を併用する方法を採用することとした。

## 4 復元製作

### (1) 経過

復元製作は、以下の工程により進められた。

各工程については、検討・分析・実験等を含めて、映像として記録し、考古博物館展示室にて紹介している。更に、検討図面、作製されたサンプル、使用した道具類については館に収蔵・保管している。

#### ①デザイン画の作成

#### ②銅板の作成

分析結果に基づき、銅合金を作製する。成分組成の安定と材質の均質化を図るため、20kg以上のインゴットを作成した。成分組成は、次のとおり。

Cu(銅)	97.5%	Sb(アンチモン)	1.0%
Ag(銀)	0.75%	Zn(亜鉛)	0.75%

作製したインゴットを、槌打ちとローラーを併用して圧延べし、素材の銅板とした。

#### ③デザインの銅板への転写

実験では酸化チタニウムを使用し置目を行ったが、実際の製作の際はカーボン紙を用いた。その後、鉄筆による毛描き。

#### ④彫金

列点(石目)及びなめくり技法による刻線。

⑤透彫り切り回し。透彫りの中に、ほぼ同径の円孔が確認される。これらは、切り回しのために予め穿たれたものと考えられる。

#### ⑥接合

作業の効率上、磯部については左右二分割、海部も龍文2単位ごとに分割して作業を進めた。切り回しが終了した時点で銅板にて接合した。

#### ⑦鋸、帯金、覆輪等の作製

鋸は、8mm角の棒状のインゴットを、金槌で角を潰しながら径5mm程度の円棒とし、引き板(鋼材に数種類の径の孔を穿孔したもの)の径の大きなものから小さなものへ順次通しながら断面円

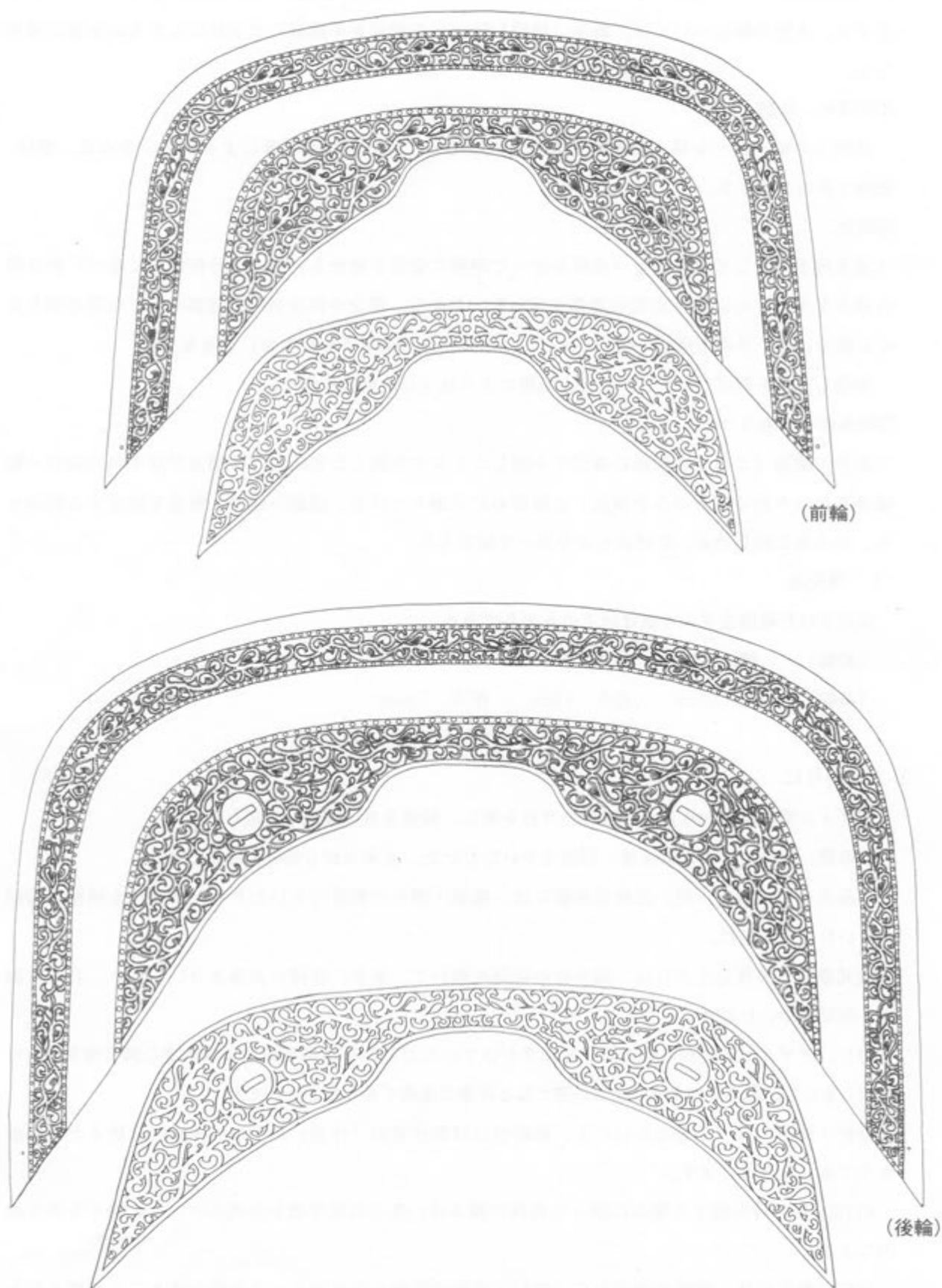


図1 国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」鞍橋金具 復元デザイン  
(前輪・後輪それぞれの破部は、下段の立体裁断図に修正した)

形（径約1mm）の針金状にし、一端を斜めに切断し、逆端を先端部の窪んだ魚々子鑿で成形し鉸頭とする。大型の鉸については、針金（径約1.7mm）の端部を半溶解にて玉状にしたものを基に成形した。

#### ⑧仮留め、研磨

透彫りの切り回しを終えた銅板と帯金を鉸留めし、砥石、ささら等により研磨。さらに、磨砂、砥粉で表面を整える。

#### ⑨鍍金

基本的な手法としては箔鍍金（水銀を塗った銅板に金箔を被せる）とし、分析結果に基づく鍍金層の厚みを出すために7～10枚の金箔を重ねた。しかし、帯金や鉸金具の接続部など、金箔の回りにくい部分には、予め用意した金アマルガム（水銀に金を溶解させたもの）を塗布した。

加熱し水銀を飛ばした後に、重曹、砥粉により仕上げの研磨を施す。

#### ⑩鞍本体への取り付け

黒色の樹脂（エポキシ樹脂に漆塗りを施した）にて作製した展示台（鞍橋及び居木の先端部＝鞍橋金具の取り付け部分のみを復元）に鉸留めにて取り付ける。透彫り銅板と帯金を固定する鉸のうち、10本毎に鉸足の長い釘状のものを用いて固定した。

### （2）復元品

復元された鞍橋金具の寸法は以下のとおりである。

（前輪） 幅 52cm 高さ 34cm 厚さ 5 cm

（後輪） 幅 65cm 高さ 43cm 厚さ 5.5cm

## 5 おわりに

デザイン案の制作から足かけ3年の月日を要し、鞍橋金具の復元が完成した。

この間、多くの方々に御指導・御助言をいただいた。文末ながら御礼申し上げます。

原品所有者である（財）五島美術館には、複製・復元の御許可をいただき、作製中も格別の御配慮をいただきました。

復元委員会の諸先生方には、御多忙の時間を割いて、東京、宮崎にお集まりいただき、真剣な議論と御助言をいただきました。

特に、デザイン制作から復元の全てを手がけていただいた小杉拓也先生には大変な御苦勞をおかけいたしました。彫金や切り回しは気の遠くなる作業の連続であったと思います。

分析・検討に基づく復元とはいえ、最終的には製作者の「作品」を生み出す感性に依るところが多であったと思います。

約1500年の時を隔てて現在に蘇った馬具の輝きは、多くの見学者を古代のロマンに導くものと確信します。

今回の報告では、紙幅の関係から、検討・分析の詳細や全てのデータを提示することができなかった。これらについては別稿を期し、全てのデータを共有できるようにしたい。

## 《附論》国宝「日向国西都原古墳出土金銅馬具類」鞍橋金具残欠の蛍光X線分析

## 【分析者】

東京文化財研究所 保存科学部 早川泰弘

## 【分析操作と測定】

条件①（大気中測定）では、資料をそのままの状態、条件②（真空中測定）では、資料をマイラーフィルムで挟み込んで測定した。

・蛍光X線分析（XRF）：セイコーインスツルメンツ(株)蛍光X線分析装置SEA5230E

条件①：Mo管球、管電圧50kV、管電流1mA、照射径0.2mm、測定時間300秒、大気中

条件②：Mo管球、管電圧50kV、管電流1mA、照射径0.2mm、測定時間300秒、真空中

## 【分析結果】

全測定結果を別表に示す。

・地金の銅の化学組成は、Cu97～99%、Sb 1～2%、Ag 1%以下である。

Agについては、金に含まれる不純物の可能性がある。

・Cu中にSbが1～2%含まれていることが大きな特徴であるが、SnやPbは0.1%以下の含有率である。

・金の純度は99%以上であると思われる。極微量の銀を含んでいる可能性がある。

・金部分の測定では、Hgを同時に検出しており、Hg-Lβ/Au-Lβ=0.2～0.3程度である。

・金の厚みは、薄層ファンダメンタルパラメータ法を用いた理論計算によると、2～3μm程度である。

## 【測定条件】

測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	288
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
コメント	西都原13

## 【結果】

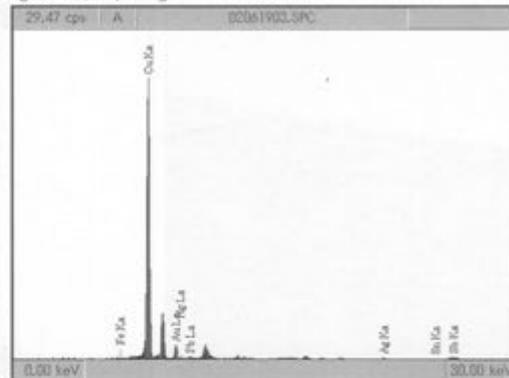
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	Kα	7.786	6.23-6.57
29	Cu	銅	Kα	231.179	7.86-8.22
47	Ag	銀	Kα	0.641	21.84-22.36
50	Sn	スズ	Kα	0.385	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	Kα	1.484	25.99-26.55
79	Au	金	Lα	12.393	9.51-9.90
80	Hg	水銀	Lα	3.886	9.79-10.17
82	Pb	鉛	Lα	1.652	10.34-10.74

## 【試料像】



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

## 【スペクトル】



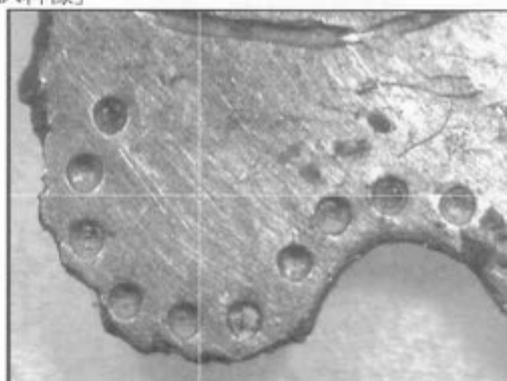
[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	289
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1 mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	西都原21

[結果]

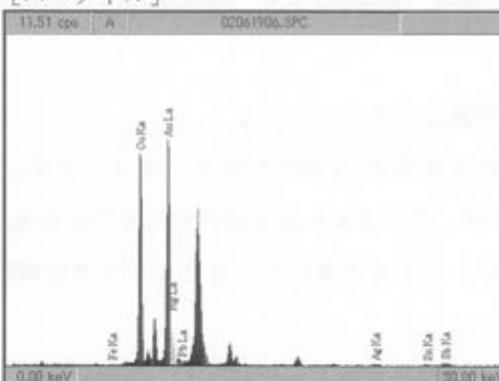
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	0.591	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	67.757	7.86-8.22
47	Ag	銀	K α	0.579	21.84-22.36
50	Sn	スズ	K α	0.353	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	K α	1.429	25.99-26.55
79	Au	金	L α	83.487	9.51-9.90
80	Hg	水銀	L α	21.018	9.79-10.17
82	Pb	鉛	L α	2.679	10.34-10.74

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]



[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	289
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1 mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	西都原43

[結果]

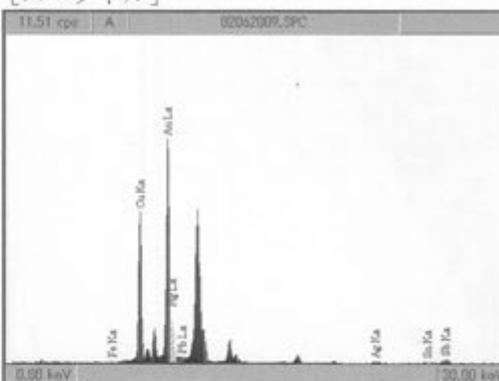
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	0.798	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	48.309	7.86-8.22
47	Ag	銀	K α	0.718	21.84-22.36
50	Sn	スズ	K α	0.373	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	K α	1.811	25.99-26.55
79	Au	金	L α	80.960	9.51-9.90
80	Hg	水銀	L α	24.875	9.79-10.17
82	Pb	鉛	L α	3.321	10.34-10.74

[試料像]



視野: [X Y] 6.60 4.95 (mm)

[スペクトル]





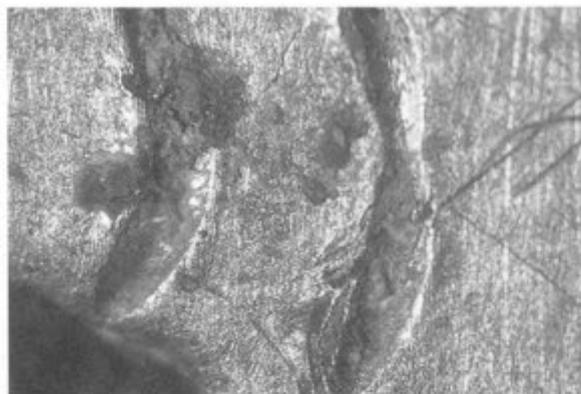
図版  
1



遊離残欠を用いての技法観察 8倍



鍍金後の磨き痕が明瞭 20倍



なめくりの単位が明瞭である 40倍



彫金(石目)の中まで金が入っている 40倍



石目となめくりによる彫金 8倍



同左拡大 25倍



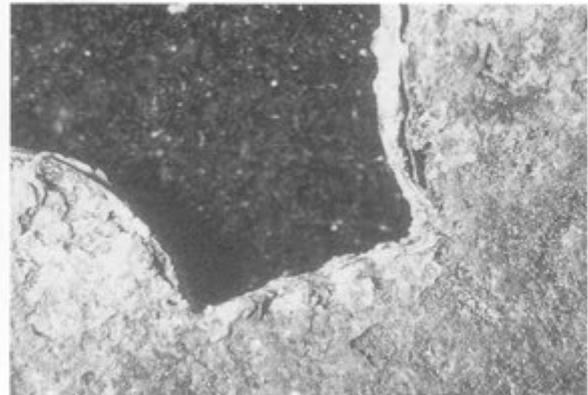
彫金(石目、なめくり)の中の金も光っている 10倍



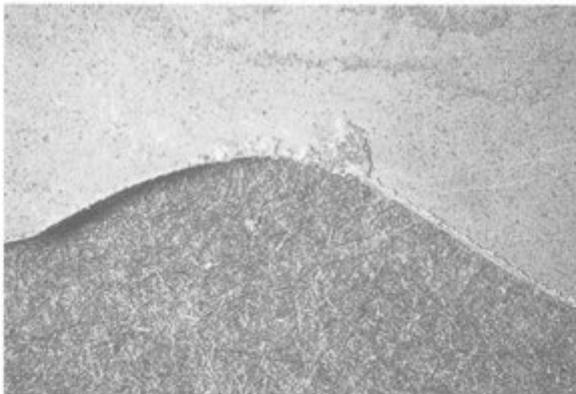
石目により外へ押し出された銅版 20倍  
(切り回し後の追加的な彫金痕)



断面にも金が回り込む 20倍



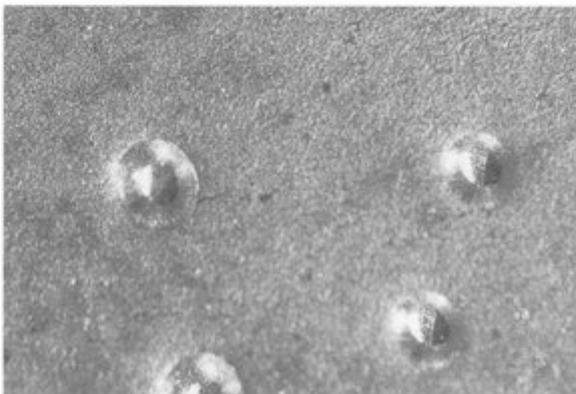
資料裏面 金層の厚みが観察される 20倍



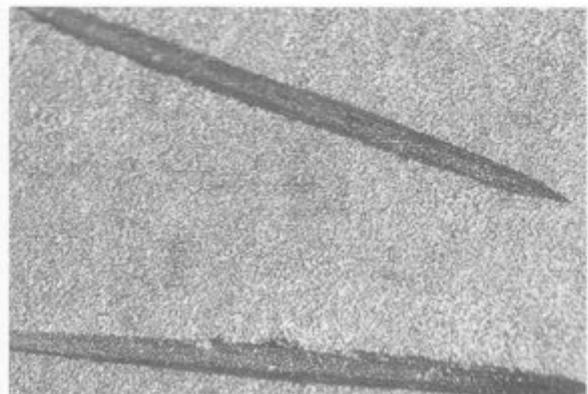
糸のこによる切断サンプル 10倍



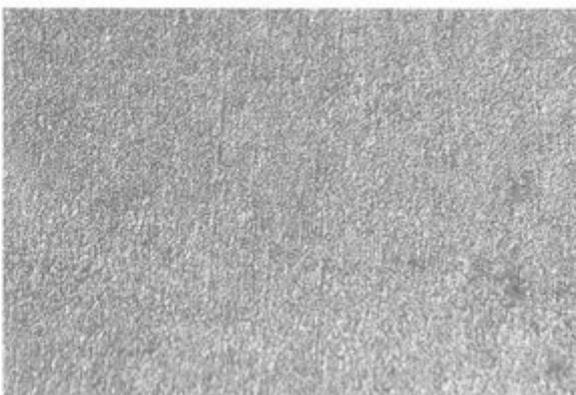
突切タガネによる切断サンプル 10倍



鍍金サンプル 彫金後アマルガム銷、磨きなし 40倍



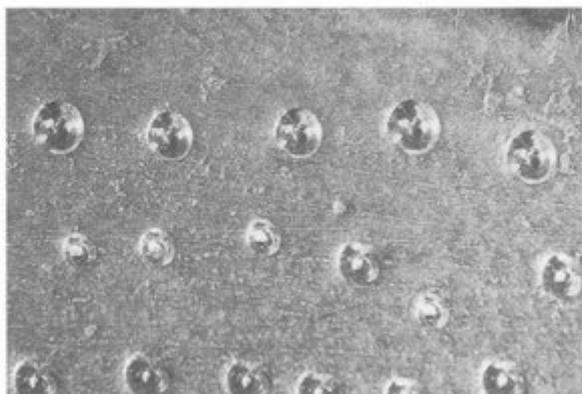
鍍金サンプル 彫金後箔銷6枚、磨きなし 40倍



鍍金サンプル アマルガム銷、磨き痕が不明瞭 40倍



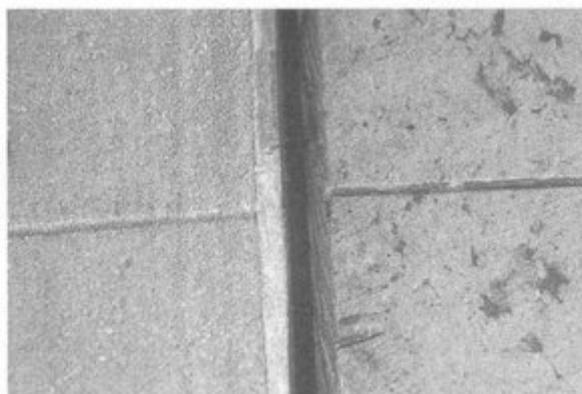
鍍金サンプル 箔6枚、磨き痕が明瞭 40倍



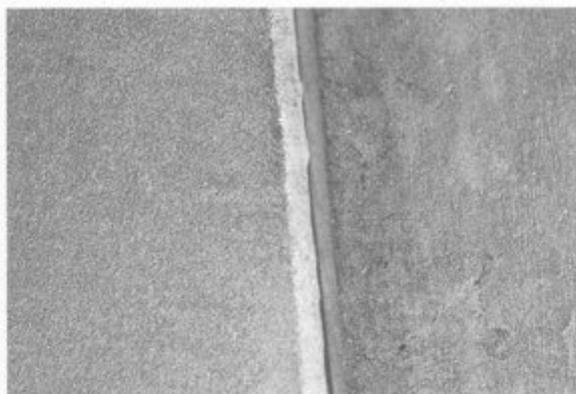
鍍金サンプル 箔銷後彫金 石目 20倍



鍍金サンプル 箔銷後彫金 なめくり 20倍



鍍金サンプル 左：アマルガム銷 右：箔銷  
アマルガムの方が金の粒子が粗い 20倍



鍍金サンプル 左：アマルガム銷 右：箔銷  
アマルガムの方が磨き痕が不明瞭 20倍



復元委員会での検討



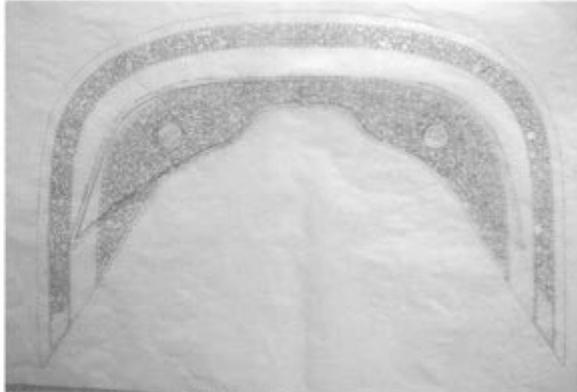
同左 工具、サンプル等の確認



復元工程の記録化



同左



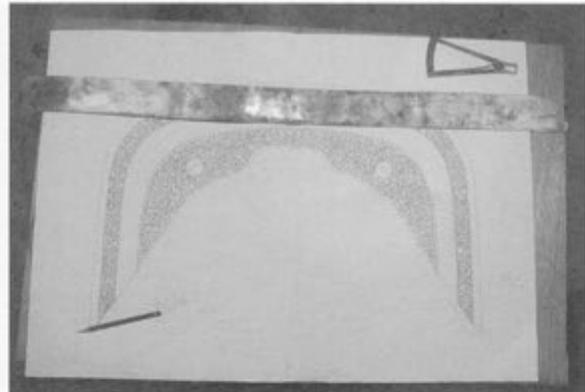
復元デザインと立体裁断修正図



坩堝、金型、インゴット



圧延べされた銅版



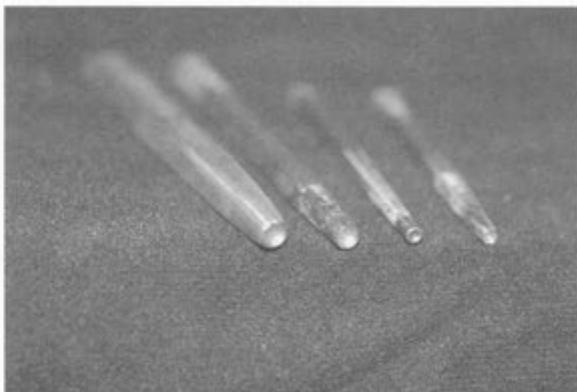
海部素材銅版



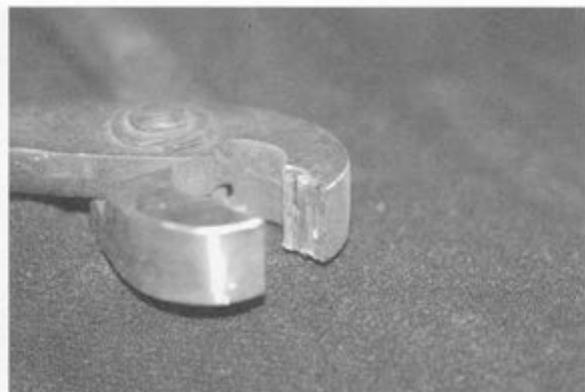
磯部素材銅版



線引き板による銅線の加工

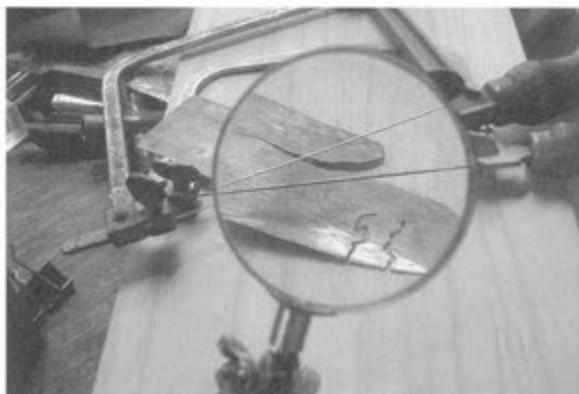


鋸頭を加工するための魚々子（ななこ）鋳



鋸、釘を加工するための「やっここ」

図版  
5



糸のこ歯の違いによる切り口サンプル



鍍金実験



鍍金の実験サンプル



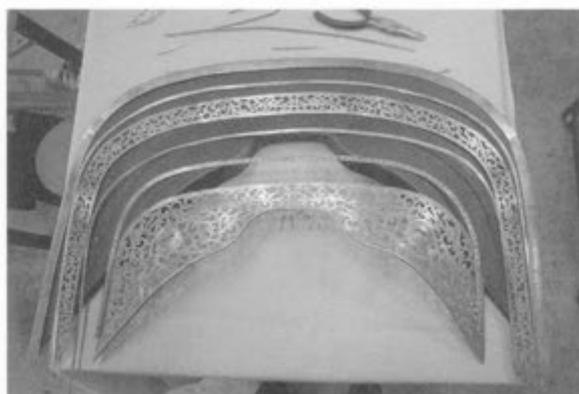
同左拡大



彫金、切り回しに使用した道具類 (1)



彫金、切り回しに使用した道具類 (2)



彫金、切り回しまで終了した後輪



切り回しが終了した前輪

## 宮崎県立西都原考古博物館における 金属製品の保存処理と保管

日高 敬子・有馬あゆみ

### 1 はじめに

鉄・青銅・木製品などは、遺跡から出土したままの状態では錆や劣化が進行するためにその形状を留めておく事が出来ず、考古学的資料としての価値が無くなる。それを防ぐために、適切な保存処理を施す事が必要である。また、温湿度管理されている場所での保管が望ましい。

宮崎県立西都原考古博物館では約5400点の金属製品を収蔵しているが、保存処理を施していない遺物や応急処理のままの遺物が多い。それらの遺物に本格的な保存処理を施すために、当館には保存処理室が設置されている。しかし、保存処理室が設置されている事や実際に行っている処理方法については、まだ周知されていない。そこで、当館の保存処理室内及び処理内容と実際に処理を施した遺物を紹介していきたい。

また、金属製品は温湿度管理された収蔵庫に保管しており、各遺物のデータベース化も行っている。その保管方法とデータベース方法も併せて紹介したい。

### 2 西都原考古博物館における保存処理

#### ・設備

保存処理室には、鉄製品の保存処理の全行程を行えるように様々な機器類が設置されている。また、安全性を考慮して薬品は全て薬品庫内に保管し、薬品を扱う時はドラフトチャンバー内で作業を行うようにしている。鉄製品の保存処理ではないが、土器や人骨などの燻蒸も行っている。保存処理室内を写真1・2で紹介し、各機器を表1に表記した。

#### ・保存処理内容

処理工程：事前調査→クリーニング→脱塩処理→含浸処理→接合・補填→保管

遺物によって多少の処理工程は異なるが、おおまかな流れは上記の順で行っている。各工程内容について説明する。

#### 1) 事前調査

処理前の遺物の状態をデジタルカメラ及び軟X線撮影装置で写真撮影する。(X線写真は軟X線撮影装置と連結しているパソコン内に記録し、重要な遺物や形状が分かりにくい遺物のみフィルム撮影している。) 残存木質・付着物の有無や鍍金・鍍銀・象眼などが施されていないかを肉眼や実体顕微鏡で観察する。

各遺物の処理台帳を作成し、以後の処理過程や注意点などを記載していく。

#### 2) クリーニング

筆・ニッパー・針・グラインダー・エアブレイシブ・エタノールなどで物理的・化学的に土や



写真1 保存処理室東側



写真2 保存処理室西側

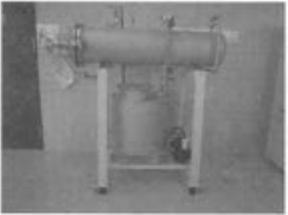
			
薬品類を保管する	木質や繊維などを観察する	軟X線を放射して遺物の形状を撮影する	X線撮影したフィルムを現像する
			
空気圧で研磨剤を噴射し土や錆を除去する	作業時に薬品などを排気・洗浄する	高温高圧下で脱塩処理を行う	水道水を電気イオン交換する
			
除去したイオンの濃度を測定する	減圧下で遺物に樹脂を含浸する	シリカゲルを乾燥する際に使用している	土器・古文書・人骨などの燻蒸を行う

表1 各機器類

錆を除去する。木質・付着物などは実体顕微鏡で見ながらクリーニングを行っている。すでに接合が施されている遺物で接合状態が悪い場合は、アセトンで接着剤を除去している。

クリーニング後は処理前の遺物の状態と形状などが変化している場合があるため、処理途中写真をデジタルカメラで撮影しておく。

### 3) 脱塩処理

遺物を微量のベンゾトリアゾールとほう砂の水溶液に浸けてオートクレイブに入れ、高温高压状態で錆の原因である塩化物イオンと硫酸イオンを除去する。脱塩処理後の液をイオン分析計に注入して、除去したイオンの濃度を測定する。遺物は純水とメタノールで洗浄した後、メタノールに一昼夜浸けて鉄に含まれている水分をメタノールに置換する。その後取り出して自然乾燥させる。

上記の事をイオン濃度が一定の数値になるまで、数回繰り返す。

### 4) 含浸処理

遺物をアクリル系の合成樹脂に浸して4～5時間ほど減圧含浸する。その後遺物を取り出してソルベントナフサを染みこませたキムタオルで表面の合成樹脂を軽く拭き取り、2～3日ほど自然乾燥させる。脆弱な遺物は、筆を使用してアクリル系の樹脂を数回塗布している。

### 5) 接合・補填

エポキシ系の接着剤で接合する。欠損部分には補填剤を入れ、補填剤が固まると彩色する。接合・補填の後に処理後写真をデジタルカメラで撮影する。

### 6) 保管

各遺物の大きさの不織布の箱を作り、薄葉紙を敷いて遺物を収め、コンテナに詰めて温湿度管理されている鉄器収蔵庫に保管する。(詳細は後述する。)

## 3 処理を施した遺物

2004(平成16)年度は高鍋町光音寺横穴墓群出土の鉄製品を53点と新富町祇園原地区遺跡出土の鉄製品53点に処理を施した。その中で刀子(刃部)1点と轡1点を紹介したい。

### 1) 高鍋町光音寺横穴墓群1号横穴墓出土の刀子(1969年発掘)

この遺物は全くの未処理であったが保存状態が良く、土が表面を覆っていたが鉄の残りは良好であった。

5月より処理を開始する。まず処理前写真をデジタルカメラで撮影し、針・メス・ニッパー・エタノールを使用して土と錆を除去した。(切先は大きく錆ぶくれしていたが、X線写真より鉄地は残存していないと判断し、錆ぶくれは除去しなかった。)その際に接合部分の接着剤をアセトンで除去した。その後、エアブレイシブ・グラインダーを使用して、表面に残っている土と錆を除去した。7月にX線写真を撮影する。その後脱塩処理を3回行い、イオンの数値は塩化物イオンが2.32ppmから0.766ppmに、硫酸イオンが19.1ppmから8.86ppmに下がった。その後20% NAD-10V ソルベントナフサ溶液を1回減圧含浸し、自然乾燥させた。セメダインハイスーパー5で接合を行い、欠損部分にボンドオールを補填しグラインダーで整形してから、遺物よりもやや濃い茶色を彩色した。9月中

匂に処理後写真を撮影し、鉄器収蔵庫に保管して保存処理を終了した。(写真3)

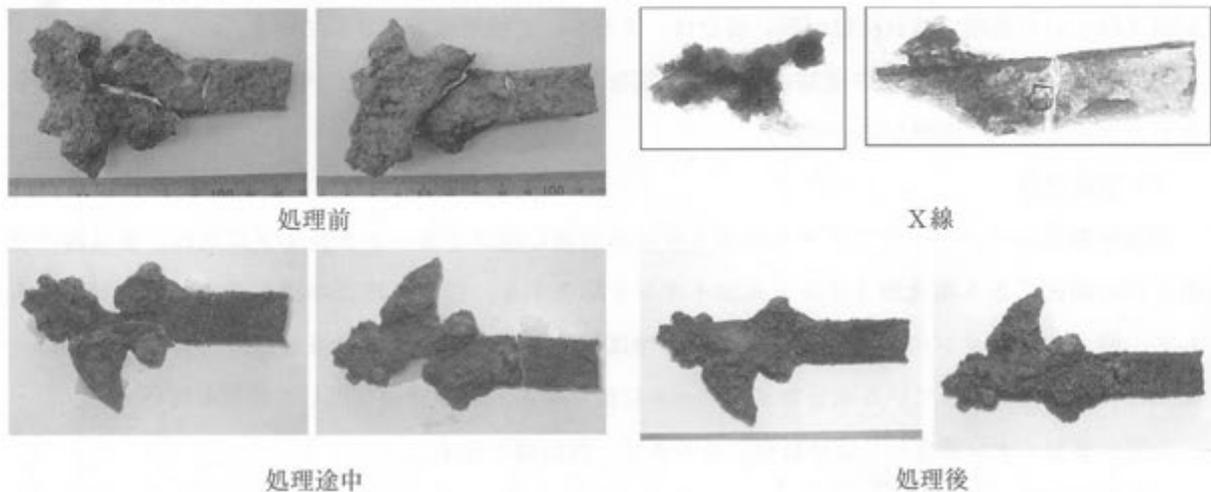


写真3 光音寺横穴墓群出土刀子 処理過程

## 2) 新富町祇園原地区遺跡8号墳出土の轡(1992年～93年発掘)

この遺物は当初は別々にナンバリングされていたため、同一個体であるとは想定せずに処理を行ってしまい、処理工程が異なってしまった。また、土はわずかに付着していたが非常に脆弱で、鉄地がかなり露出している部分が多かった。

8月中旬より処理を開始する。まず処理前及びX線写真を撮影した。轡の鏡板の立間部分と銜の一部は針・ニッパー・エタノールを使用して錆を除去した。その後脱塩処理を11回行い、イオンの数値は塩化物イオンが58.0ppmから3.99ppmに、硫酸イオンが19.3ppmから6.25ppmに下がった。その後2回、20% NAD-10V ソルベントナフサ溶液を減圧含浸し、自然乾燥させた。

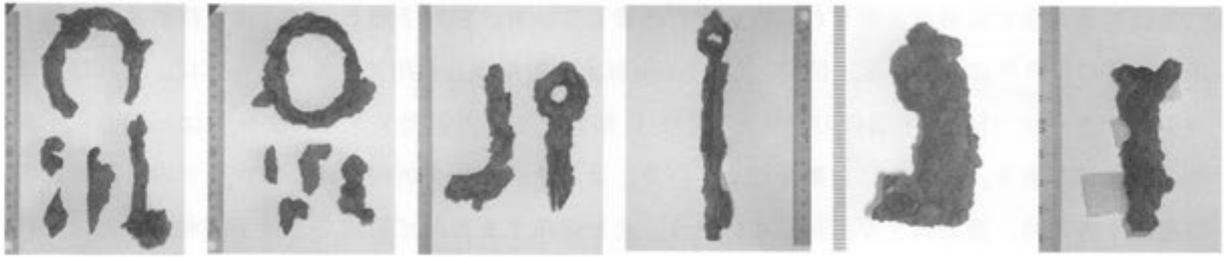
轡の残りの部分は錆の進行が著しいため、クリーニングの前処理として鉄地が露出している部分に3%パラロイドB-72を塗布して補強した後、針・ニッパー・エタノールでクリーニングを行った。遺物が脆弱なため高温高圧下での脱塩処理は困難であると判断し、脱塩処理は行わなかった。おおまかに接合した後2回、20% NAD-10V ソルベントナフサ溶液を減圧含浸し、自然乾燥させた。その後全部分をセメダインハイスーパー5で接合し、一個体とした。2月末に処理後写真を撮影し、鉄器収蔵庫に保管して保存処理を終了した。(写真4) (日高敬子)

## 4 収蔵品登録・管理と保管

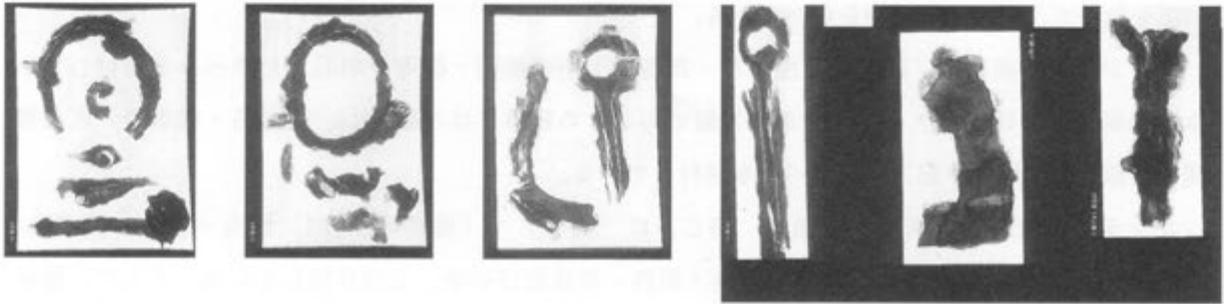
収蔵している鉄器を管理するため、収蔵資料のデータベース(以下DB)を作成している。DBはパッケージソフト「博物館収蔵品管理システム パピルス」を使用している。

カード化された画面に、画像・項目化した情報・特記事項などを記録する。収蔵品に限らず、県内出土の全ての資料をDB入力対象としており、合わせて入力総数5383点となっている(2005年2月現在)。対象とする鉄器資料は、武器・武具・馬具・農具・工具・その他としている。

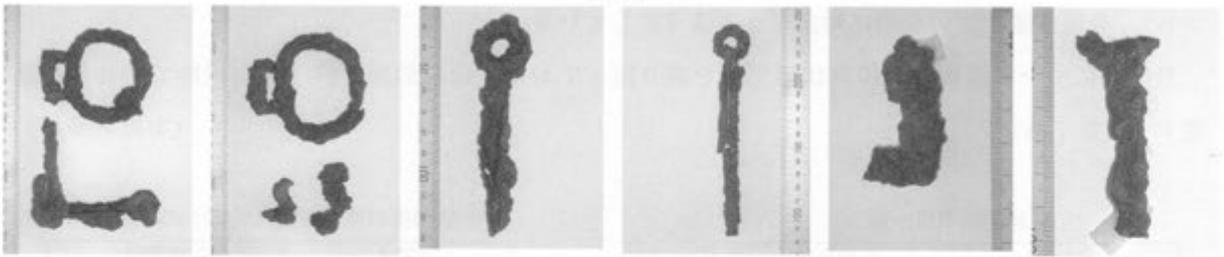
開館に先立ち、平成13年度から鉄器資料の登録作業を進めてきたが、当館では鉄製品の保存処理作業を実施しているため、それまでの入力項目を改変し、保存処理に関する項目を新たに追加した。



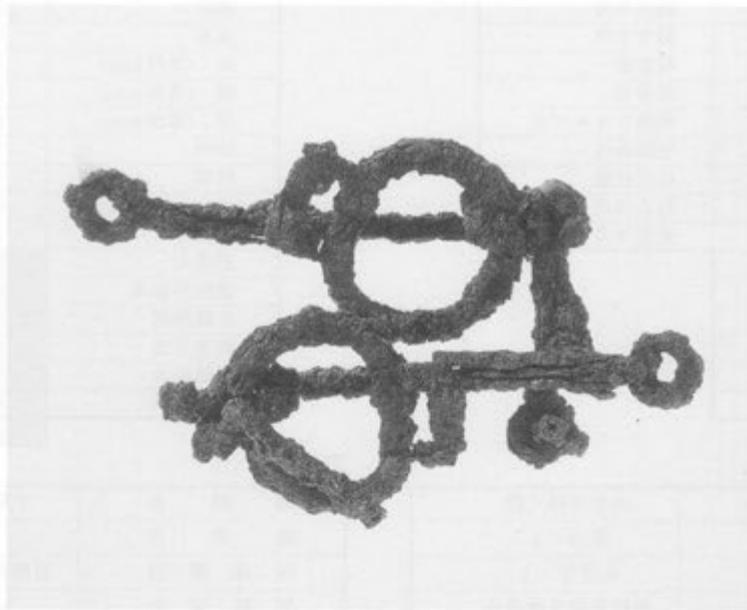
処理前



X線



処理途中



処理後

写真4 祇園原地区遺跡出土轡 処理過程

金属製品は全て温湿度管理された収蔵庫で保管している。整理手順として、まず鉄製品は刀剣とそれ以外の鉄製品に大別する。目安として55cm以上の刀剣は刀剣用アクリルケースに、それ以外はコンテナケース（55cm未満の刀剣片も含む）に保管する。刀剣用アクリルケースは、底面に不織布・薄葉紙を敷き、その上に刀剣を収めている。コンテナケースの場合は、コンテナ内に遺物が多数混在するため、遺物同士が混同しないよう、また保護する目的で遺物ごとに不織布製の箱に入れて保管している。不織布箱は遺物の大きさに合わせて一重または二重で作り、更にその箱の中に薄葉紙を敷いて、その上に遺物を収めている。

各コンテナ外面には、遺跡名・棚番号・箱番号・所蔵機関・備考を明記したラベルを貼付している。刀剣ケースは、一ケースにつき一刀剣であるため箱番号は不要とし、遺跡名・棚番号・所蔵機関・登録番号・備考を記入したラベルを貼付している。

コンテナを収納するスチール棚は、棚ごとに「棚名」－「棚番号」（例：県央－2）を決定し、「棚名」は県内の地域ごとに「県北・県央・県西・県南及び不明」と四分類している。そして、棚板に各市町村名を貼付し、その市町村ごとにコンテナを収納している。「棚番号」は「棚名」ごとにカウントし、今後の遺物数の変動に対応できるようにしている。

刀剣棚については現在の保存状態で棚を割り振っており、保存処理が終了した段階で棚番号を決定する予定である。（有馬あゆみ）

当初の項目一覧

資料名	収蔵登録
資料番号	棚番号
分類	箱番号
部位	調査年度
重量	調査主体
長：(単位mm)	報告書
幅：(単位mm)	図番号
厚：(単位mm)	画像フォルダ名
時代	登録番号
時期	保存状態
用途・使用法	記入年月日
遺跡名	更新年月日
遺構名	
遺跡所在地	
所蔵機関	
収集方法	
保管場所	
特記事項	

コンテナ用ラベル

遺跡名	光音寺横穴群
棚番号	県央－1
箱番号	光音寺－1
所蔵機関	宮崎県教育委員会
備考	(高鍋町)

追加後の項目一覧（網掛けが追加分）

資料名	収蔵登録
資料番号	棚番号
分類	箱番号
部位	調査年度
重量	調査主体
長：(単位mm)	報告書
幅：(単位mm)	図番号
厚：(単位mm)	画像フォルダ名
時代	登録番号
時期	保存状態
用途・使用法	記入年月日
遺跡名	更新年月日
遺構名	保存処理番号
遺跡所在地	X線写真
所蔵機関	クリーニング
収集方法	脱塩処理
保管場所	含浸処理
特記事項	接合
	補填

刀剣用ラベル

遺跡名	六野原古墳群
棚番号	
所蔵機関	宮崎県教育委員会
登録番号	MB－201
備考	(国富町)

表2 データベース登録項目と遺物保管用ラベル

入力モード

カード作成(Ⓜ) 画像入力(Ⓜ) 一括処理(Ⓜ) 階層管理(Ⓜ)

資料名: 刀子      総数: 5383  
資料番号: 3009      Main: 5383  
Sub: 0      カード アイコン リスト

分類: 刀子  
部位: 刀身部  
重量: 39.5g

長: 70      幅: 20      厚: 6

時代: 4 古墳時代  
時期: 5 後期  
用途・使用法: 1 武器

遺跡名: 光音寺横穴群  
遺構名: 第1号横穴  
遺跡所在地: 児湯郡高鍋町大字南高鍋字光音寺  
所蔵機関: 宮崎県教育委員会  
調査方法: 1 調査  
保管場所: 宮崎県立西都原考古博物館

高速検索

AV%  
INPUT

終了



刀身部に錆跡が付着

宮崎県教育委員会 1970年  
宮崎県文化財調査報告書 第15集 40頁

入力モード

カード作成(Ⓜ) 画像入力(Ⓜ) 一括処理(Ⓜ) 階層管理(Ⓜ)

資料名: 埋蔵品      総数: 5383  
資料番号: 3009      Main: 5383  
Sub: 0      カード アイコン リスト

収蔵記録: 2 未登録      保存状態: 1 良(保存処理済)

標番号: 県央-1      保存処理番号: 光音寺 1号横穴-2

箱番号: 光音寺-1      X線写真: PC, フィルム無し

調査年度: 1969年2月      クリーニング: 終了

調査主体: 宮崎県教育委員会      数値処理: 3回

報告書: 1掲載      含浸処理: 1回

図番号: 図版10回      接合: 終了

画像フォルダ名: 光音寺(TKO-1)      補修: ホンドオールを使用

登録番号: KJ-006

高速検索

AV%  
INPUT

終了

前保管場所: 宮崎県総合博物館

記入年月日: 2001年 7月 6日  
更新年月日: 2005年 2月 10日

図1 収藏品管理システム パピルス画面

## 5 おわりに

上記した処理工程で鉄製品106点(2遺跡分)の保存処理を行った。1年間処理を行った過程で浮上した反省点とその対策法・課題を述べたい。

### 反省点

- ・ 処理前の接合状態が悪い遺物は、クリーニングの際に接着剤を除去しているが、遺物によっては細分化し過ぎたために含浸処理後の接合が非常に困難になった。  
→接着剤を除去した後、ある程度の大きさに再度接合する。
- ・ 処理終了後に同一個体であると気付いた遺物は、処理内容が異なる場合が生じた。  
→処理を行う前に各遺物の状態・形状を充分把握し、接合関係を良く吟味する。
- ・ 塩化物イオンと硫酸イオンの除去濃度が一定の数値に下がるまで脱塩処理を行っているが、高温高圧であるため遺物に負荷がかかり、より脆弱になってしまった場合が生じた。  
→脱塩処理回数は、イオンの除去濃度の数値のみだけでなく、各遺物の状態からも判断する。

### 課題

- ・ 脱塩処理はオートクレイブを使用して高温高圧下での方法を行っているが、脆弱な遺物や木質が残存している遺物には適さない。それらの遺物に適している、セスキ炭酸ナトリウムや水酸化リチウムに長時間浸ける脱塩処理方法も行っていく予定である。
- ・ 金銅張り製品や青銅製品も多く収蔵しており、それらの遺物にはキレート化剤やベンゾトリアゾールを使用した保存処理を行う予定である。
- ・ 土器や人骨の燻蒸には酸化エチレンオキシドを使用しているが、この酸化エチレンオキシドは発ガン性があるため、燻蒸器から排気した際に人体に影響を与える可能性がある。また、酸化エチレンオキシドは代替フロンであり、京都議定書に基づいて2008年～2012年には規制されるため、使用できなくなる。以上より、今後は燻蒸の際の排気環境をより安全にし、酸化エチレンオキシドに替わるものを検討する。

(日高敬子)

### 参考文献

沢田正昭 1997 「文化財保存化学ノート」 近未来社

## 宮崎県立西都原考古博物館における 古人骨の整理と資料化

高橋 由香

### 1 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館は、2004（平成16）年4月17日に開館した。本館では、収蔵資料の柱の一つとして、宮崎県内各地で出土する古人骨資料を収集している。収集した人骨については、展示や研究公開に向け、整理作業・データベース化を行っている。現在の収蔵数はおよそ300体である。整理作業・データベース化は、今年度はえびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨に重点をおいた。

### 2 収集

開館に合わせて、宮崎県総合博物館と鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱの保管分の宮崎県出土古人骨を本館に移管した。

#### ★宮崎県総合博物館より

出土地	遺跡名
宮崎市	蓮ヶ池横穴墓群
都城市	下川東牧ノ原地下式横穴墓群 下水流・築池地下式横穴墓群
延岡市	樫山古墳、東海友内箱式石棺
えびの市	小木原地下式横穴墓群、 久見迫地下式横穴墓群、 島内地下式横穴墓群、 天神免遺跡
田野町	灰ヶ野地下式横穴墓群
佐土原町	(出土遺跡不明火葬骨)
高城町	牧ノ原地下式横穴墓群
高崎町	縄瀬地下式横穴墓群、 原村上地下式横穴墓群
野尻町	大萩地下式横穴墓群
須木村	上ノ原地下式横穴墓群
高岡町	城ヶ峰横穴墓群
国富町	大坪地下式横穴墓群、 飯盛地下式横穴墓群、 源六原地下式横穴墓群

新富町	日置横穴墓群
川南町	(出土遺跡不明火葬骨)
高千穂町	南平横穴墓群

#### ★鹿児島大学より

出土地	遺跡名
都城市	葉子野地下式横穴墓群、 下水流地下式横穴墓群、 貴船寺跡、横尾原遺跡
延岡市	林遺跡
西都市	西都原10号地下式横穴墓、酒元ノ 上横穴墓群、石貫地下式横穴墓群、 常心原地下式横穴墓群、千畑横穴墓 群、金倉上地下式横穴墓群、岳惣寺 遺跡
えびの市	島内地下式横穴墓群、杉水流地下式 横穴墓群、建山地下式横穴墓群、天 神免遺跡
田野町	高野原地下式横穴墓群
佐土原町	佐土原村古墳周辺遺跡
新富町	祇園原地下式横穴墓群

また、2004年7月末にはえびの市建山地区の千人塚に納められていた人骨の収集も行った。主にえびの市内の地下式横穴墓群から出土した古墳時代人骨が多数納められていた。

### 3 整理

各個体ごとに、人骨整理フォーマット（図1）に、人骨の遺存部位、保存状況、歯式、特記事項を記入した。遺存部位は着色し、保存状態は○△×（○：保存良好、×：保存不良）で記入した。その後、分別した骨をビニール袋などに入れ、桐箱に収納した。桐箱は、西都原考古博物館では頭

蓋骨用、肢体骨用、全身骨用の3種類作製されており、人骨の残存量によって使い分けた。

本年度は島内地下式横穴墓群167体、杉水流地下式横穴墓群1体、久見迫地下式横穴墓群1体、菓子野地下式横穴1体、西都原地下式横穴1体、上ノ原地下式古墳群2体の整理が終了した。えびの市建山地区千人塚の古人骨についても個体識別や保存処理等の作業に着手している。

また、整理の過程でいくつかの新知見が得られた。その詳細については、本号別稿にて紹介している（竹中・高橋論文）。

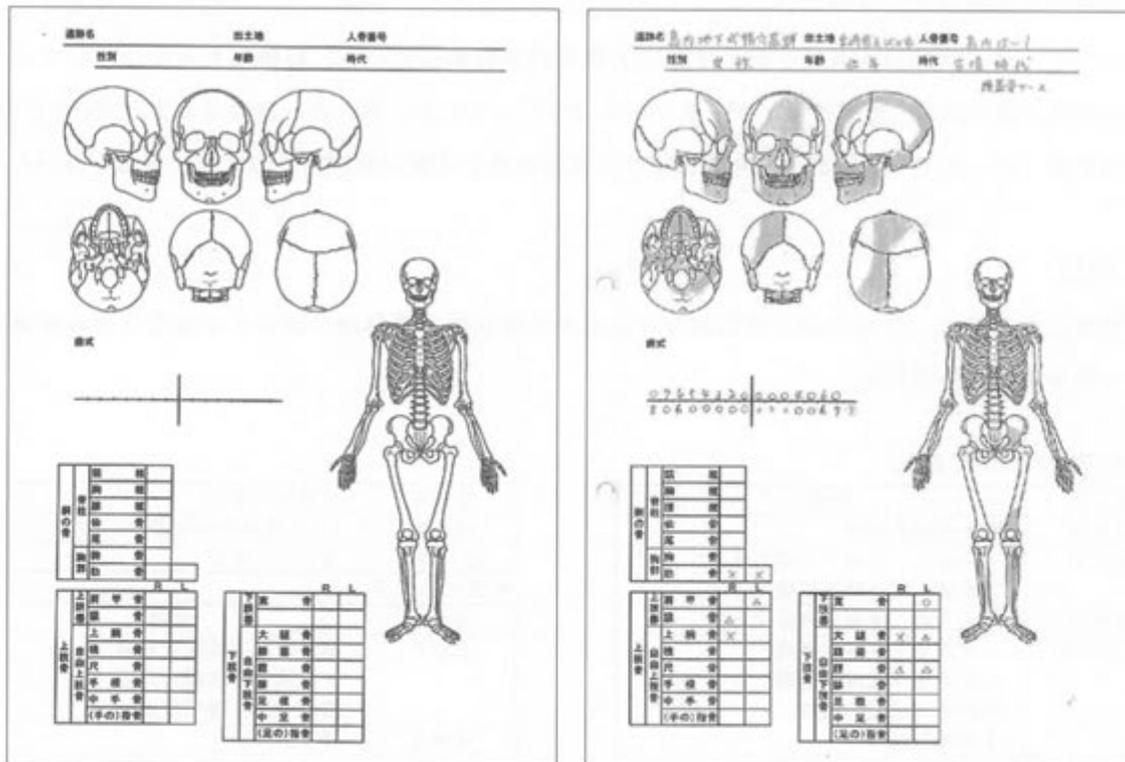


図1 人骨整理フォーマット（右側：使用例）

#### 4 データベース

本館の収蔵品検索は、ホームページ上（<http://saito-muse.pref.miyazaki.jp/>）で行える。本年度は島内地下式横穴墓群から出土した古墳時代人骨に関する情報を公開した。

各人骨のデータは博物館収蔵品管理システムで管理されており、頭蓋の計測値を中心に性別、年齢、調査報告書等が検索できる（図2）。また、頭蓋等の写真も見ることができ、古人骨の人類学的・考古学的研究に役立つことが期待される。

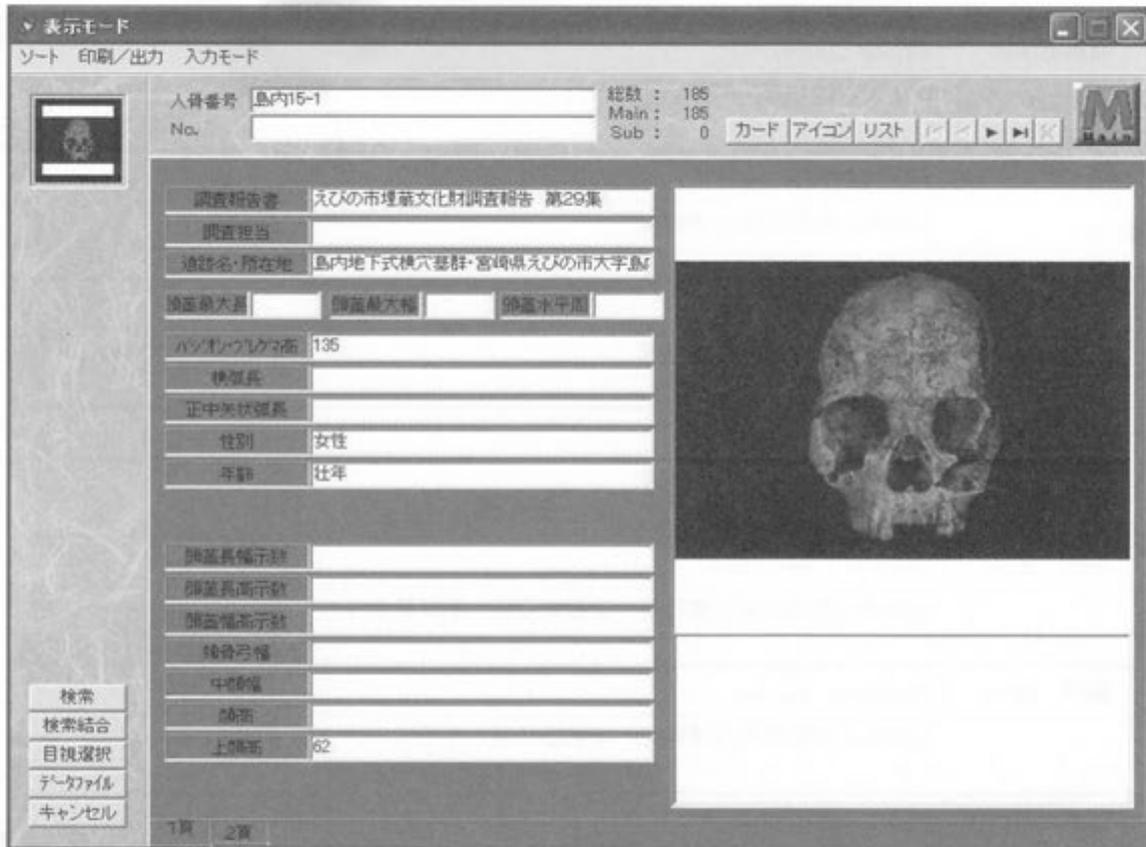


図2 収藏品管理システム バピルス画面

有馬あゆみ	ARIMA Ayumi	宮崎県立西都原考古博物館
柄本 久子	ENOMOTO Hisako	宮崎県立西都原考古博物館
高橋 由香	TAKAHASHI Yuka	宮崎県立西都原考古博物館
竹中 正巳	TAKENAKA Masami	鹿児島女子短期大学助教授
地村 光広	CHIMURA Mitsubiro	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主幹兼主任
鶴田 裕一	TSURUDA Yutchi	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主査
鳥原 孝仙	TORIHARA Takanori	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主査
二宮 満夫	NINOMIYA Mitsuo	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主事
東 憲章	HIGASHI Noriaki	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主査
日高 敬子	HIDAKA Ketko	宮崎県立西都原考古博物館
北郷 泰道	HONGO Hiromichi	宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及班 主幹
吉村 和昭	YOSHIMURA Kazuaki	奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

## 宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 執筆要項（投稿規定）

### 1 執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りではない。

### 2 執筆内容

- ① 研究論文：掲載30頁以内
- ② 研究ノート：掲載16頁以内
- ③ 調査報告：掲載30頁以内
- ④ 研究動向：掲載10頁以内
- ⑤ 資料紹介：掲載8頁以内
- ⑥ その他、編集担当者が適当と認めたもの

### 3 原稿

#### (1) 締切

- ・2月末日とする。

#### (2) 提出

- ・原則としてFD（フロッピーディスク）とし、プリントアウト原稿を添付し、使用したソフト名を明記すること。
- ・図、表、写真は、本文とは別に作成し、拡大率・挿入位置を明記する。

### 4 執筆要項

#### (1) 体裁

- ・A4版、横組、44字×35行、MS明朝体基本
- ・版面（図、表、写真）はキャプションを含め縦24.5cm、横16.5cm

#### (2) 表記

- ・文字は、資料的なもの以外は原則として、現代仮名遣いで新字体とする。
- ・度量衡単位は、cm、kg、m<sup>2</sup>のように記号を、数量は算用数字（半角）を使用する。
- ・年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は（ ）で併記する。

例：2004（平成16）年

#### (3) 註、引用、参考文献

- ・本文末尾に一括記載する。
- ・註は、右肩付き終わり小括弧で表記する。

例：□□1)

註 1) ○○○○

2) ○○○○

- ・引用、参考文献は、著者名、発行年、「論文名」、「書名」、巻号数、発行所、頁数を明記する。

#### (4) その他

- ・別刷が必要な場合は、執筆者負担とする。
- ・PDFファイルを作成する。（配布用にプリント可能）

---

宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要 第1号

BULLETIN

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Vol.1

2005年3月31日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館  
〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番  
TEL：0983-41-0041 FAX：0983-41-0051  
<http://saito-muse.pref.miyazaki.jp/>

印刷：北一株式会社  
〒880-0903 宮崎県宮崎市太田3-1-31  
TEL：0985-51-5100 FAX：0985-53-5640

---